宮崎市文化財調査報告書[第41集]
（田野町文化財調査報告書第53集）

本野原遺跡三

2006

宮崎市教育委員会

例　　言

1．本書は、平成13年度県営農地保全整備事業元野地区に伴い、宮崎県中部農林振興局の依頼を受けて実施した「本野原遺跡」の調査結果のうち、調査の成果と資料整理による追加資料を収録するものである。

2．本書の作成や、それにかかる室内整理作業は、文化庁の国庫補助事業を得て田野町教育委員会が実施した。

3．調査体制は以下のとおりである。

調査主体	宮崎県宮崎郡田野町教育委員会		
調査組織	田野町教育委員会	教育長	西田　英介
		社会教育課長	尾割　利秋
		課長補佐兼社会教育係長	松崎　孝二
	調査事務担当	同主査	森田　浩史
	調査担当	同主査	森田　浩史
		同主任	金丸　武司

4．室内整理作業の実施にあたり、田野町在住の下記の方々のご協力を得た。

[redacted]

5．作業の進行及び編集は、森田の指導の下、金丸が行った。

6．執筆は、金丸が行った。なお、第Ⅸ章の自然科学分析は、古環境研究所に依頼した。

7．方位は磁北、標高は海抜絶対高である。

8．色調表示は、農水省農林水産技術会議事務局監修の『標準土色帖』の表示に従った。

9．遺構略号は、宮崎県内で一般的に用いられる表示に従った。具体的には以下のとおりである。

竪穴住居：SA　掘立柱建物：SB　土坑：SC　ピット：SP　集石遺構：SI　道路状遺構：SG

＊中央配石、埋甕等、表示基準のない場合はそのまま記した。なお、竪穴状遺構は用途不明であることから、不明遺構であるSXの名称を用いた。

10. 本書の作成にあたっては、以下の方々よりご指導･ご協力を賜った（五十音順・敬称略）

秋成雅博　石川悦雄　今田秀樹　黒川忠広　相美伊久雄　東和幸　藤木聡　古森雅高

林潤也　松田清孝　松本茂　水ノ江和同

11. 出土遺物及び図面や写真などの記録物は、宮崎市教育委員会田野文化財調査事務所で保管している。

12. 題字の揮毫は、尾割利秋氏（田野町社会教育課長）に依頼した。

13. 本報告書中には、既に報告書で掲載された遺物を再録した部分がある。その中には、初出とは図面の表現が異なるものも含まれるが、その場合は、本書を優先する。また、土器型式の変更は、第Ⅰ章に記した。

14. 田野町は、平成18年１月１日より宮崎市と合併した。

目　　次

第Ⅰ章　出土土器の正誤表 …… 1

第Ⅱ章　調査区内の基本層序 …… 14

第Ⅲ章　土器型式の設定 …… 19
　第１節　岩崎式・綾式土器を巡る諸問題 …… 19
　第２節　指宿式土器を巡る諸問題 …… 30
　第３節　丸尾式土器を巡る諸問題 …… 42
　第４節　納屋向タイプを巡る諸問題 …… 44
　第５節　納曽式土器を巡る諸問題 …… 44
　第６節　小結 …… 51

第Ⅳ章　南九州縄文後期土器の変遷 …… 52

第Ⅴ章　出土土器 …… 71

第Ⅵ章　出土石器 …… 101

第Ⅶ章　検出遺構 …… 110
　第１節　竪穴住居 …… 110
　第２節　掘立柱建物群 …… 115
　第３節　大土木工事 …… 121
　第４節　中央配石 …… 124
　第５節　竪穴状遺構 …… 125
　第６節　道路状遺構 …… 125
　第７節　埋甕 …… 126
　第８節　土坑 …… 126
　第９節　ピット …… 128

第Ⅷ章　集落の変遷 …… 131
　第１節　早期 …… 131
　第２節　前期～中期中葉 …… 131
　第３節　中期後葉～後期後葉 …… 132
　第４節　晩期 …… 136

第５節　集落景観の変化について …… 137
第６節　竪穴住居空白期の解釈について …… 137
第７節　小結 …… 137

第Ⅸ章　自然科学分析 …… 139
第１節　土層堆積における自然科学分析 …… 139
第２節　田野町、本野原遺跡における放射性炭素年代測定結果 …… 146

第Ⅹ章　総括 …… 148
第１節　生業について …… 148
第２節　遺構について …… 148
第３節　精神文化について …… 149
第４節　まとめと課題 …… 149

付編『第52集』補遺 …… 157

写真図版 …… 231

第Ⅰ章　出土土器の正誤表

番号	52集	訂正後
1	後期	縄文時代 底部
2	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原式
3	中末～後中	縄文時代
4	後期	縄文時代
5	後期前葉 本野原2・3式	6期 本野原3式
6	後期前葉 本野原2・4式	6・7期
7	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
8	早期初頭 加栗山式	早期前葉 加栗山式
9	後期	縄文後期
10	後期	5～8期
11	後期前葉	5～7期
12	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
13	後前～中葉 本野原式	5～7期
14	中末～後初 宮之迫2・3式	4期 宮之迫3式
15	後期	縄文時代
17	後期	6期以降
18	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
20	後前～中葉	5～8期 底部
21	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期 本野原1～3式
24	後期中葉	5～14期
26	中末～後初 宮之迫2・3式	3期 宮之迫2式
27	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
28	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
29	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
30	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
31	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
32	後前～中葉 宮之迫2～4式	5～7期
33	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期
34	後前～中葉 本野原3・4式	6・7期
35	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期
36	後前～中葉 本野原2～4式	5・6期 本野原系
37	後初～前葉 宮之迫3・4式	5～7期
38	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
39	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期 本野原系
40	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期
41	後前～中葉 本野原2～4式	5・6期
42	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
43	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
44	後前～中葉 本野原2～4式	9期 市来Ⅱ式
45	後初～中葉 本野原2～4式	5・6期
46	後前～中葉 本野原2～4式	5～11期
47	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
48	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
49	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
50	後初～前葉 宮之迫3・4式	5期 宮之迫4式
51	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
52	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
53	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
54	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
55	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
56	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
57	後期初～前葉 磨消縄文系	5・6期 磨消縄文系
59	後前～中葉	5～9期
60	後前～中葉	5～9期
61	後前～中葉	5～8期
62	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
63	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
64	後前～中葉	時期不明
65	後期中～後 台付皿形	9・10期 台付皿形土器
66	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
67	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
68	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
69	中末～後中	2・3期 宮之迫1・2式
70	後前～中葉	時期不明
71	後前～中葉	時期不明
72	縄文後期	8～14期
73	後前～中葉	5～9期 底部
74	縄文後期	5～8期
75	後前～中葉	時期不明
76	後前～中葉	時期不明
77	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
		同一個体456
78	中末～後初	時期不明
79	後期初頭 宮之迫3式	3・4期 宮之迫2・3式
80	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
81	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
82	後期前葉 宮之迫4	5期 宮之迫4式
83	後期前葉 宮之迫4	5期 宮之迫4式
84	後期前葉 宮之迫4	5期 宮之迫4式
85	後期前葉 宮之迫4	5期 宮之迫4式
86	後前～中葉 本野原2～4式	7期 本野原3式
87	後前～中葉 本野原2～4式	7期 本野原3式
88	後前～中葉 本野原1～4式	7期 本野原3式
89	後期前葉	5～8期
90	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
91	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
92	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
93	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
94	後期中葉 市来Ⅰ式	9期 市来Ⅱ式
95	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
96	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
97	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
98	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
99	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
100	後期中葉 旧草野式	9期 旧草野式
101	後期中葉 旧草野式	9期 旧草野式
102	後期中葉 旧草野式	9期 旧草野式
103	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
104	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
105	後期中葉 上面施文土器	8期 上面施文土器
106	後前～中葉	5～8期
107	後期前葉	6・7期
108	後前～中葉	5～8期
109	後前～中葉	5～8期
110	後前～中葉	5～8期
111	後期中葉 台付皿形	8期 台付皿形土器
112	後前～中葉	5～8期
113	中末～後中	中後～9期
115	縄文後期	5期
116	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
117	後前～中葉	5～8期
118	後前～中葉	5～8期
119	後前～中葉	5～8期
120	後前～中葉	5～8期
121	後前～中葉	5～8期
122	後前～中葉	5～8期 底部
123	後前～中葉	5～8期 底部
124	後前～中葉	5～8期 底部
125	後前～中葉	5～9期 底部
126	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
127	後前～中葉	2・3期 宮之迫1・2式
128	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
129	中末～後初	2期 宮之迫1式
130	中末～後初	2期 宮之迫1式
131	中末～後初	2期 宮之迫1式
132	中末～後初	2期 宮之迫1式
133	中末～後初	2期 宮之迫1式
134	後期初頭 宮之迫3式	3期 宮之迫2式
135	中末～後初	2・3期 宮之迫1・2式
136	中期後葉 宮之迫1式	2・3期 宮之迫1・2式
137	中期後葉 宮之迫1式	2・3期 宮之迫1・2式
138	中末～後初	2・3期 宮之迫1・2式
139	後期初頭 宮之迫3式	2・3期 宮之迫1・2式
140	中末～後初 宮之迫2・3式	2・3期 宮之迫1・2式
141	中期末 宮之迫2式	2・3期 宮之迫1・2式
142	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
143	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
144	後期初頭 宮之迫3式	2・3期 宮之迫1・2式
145	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
146	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
147	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
148	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
149	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
150	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
151	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
152	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
153	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
154	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
155	後期前葉	5～8期
156	縄文後期	2～8期 底部
157	後初～前葉	2～8期 底部
158	後初～前葉	縄文時代
159	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
160	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
161	後期前葉 本野原1～3式	5～7期
162	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期 本野原1～3式
163	後前～中葉 本野原式	5～8期
164	縄文後期	5～8期
165	縄文後期	5～8期
166	縄文後期 脚台	1～14期 土器脚台
167	後前～中葉	5～8期
168	後前～中葉	5～8期
169	後前～中葉	5～8期 底部
171	後期前葉	4・5期 宮之迫3・4式
172	後期前葉	4・5期 宮之迫3・4式
173	後前～中葉	5～8期
174	後前～中葉	3・4期 宮之迫2・3式
175	後期前葉 宮之迫4式	5～7期
176	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期 本野原1～3式
177	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
178	後前～中葉 本野原2～4式	4期 宮之迫3式
179	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
180	後前～中葉	5～8期

第１表　出土土器正誤表（１）

番号	52集	訂正後
181	後前～中葉	時期不明
182	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
183	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
184	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
185	後初～前葉	4期 宮之迫3式
186	後期初頭 宮之迫4式	4期 宮之迫3式
187	後前～中葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
188	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期 本野原2・3式
189	後期初頭 宮之迫3式	6期
190	縄文後期	5～7期
191	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期
192	後期中葉 市来式（？）	中後～9期 市来式類似
194	後前～中葉	5～8期
195	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
196	縄文後期	時期不明
197	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
198	後期前葉 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
199	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5式 宮之迫3・4式
200	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
201	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
202	後期前葉 宮之迫4式	5～8期
203	中末～後後	縄文時代
204	後前～中葉	5～11期
205	後前～中葉	5～8期 底部
206	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
207	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
208	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
209	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
210	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
211	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
212	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
213	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
214	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
215	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
216	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
217	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
218	後期前葉 宮之迫4式	5～7期 宮之迫・本野原
219	後期前葉 宮之迫4式	5～7期 宮之迫・本野原
220	後期前葉 宮之迫4式	5～7期 宮之迫・本野原
221	後前～中葉	5～7期
222	後前～中葉	5～9期 本野原・市来
223	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
224	後期前葉 福田・宿毛式	5・6期 磨消縄文系

番号	52集	訂正後
225	後初～前葉	5～8期 底部
226	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
227	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
228	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
229	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
230	後前～中葉	5期 宮之迫4式
231	後前～中葉	5期 宮之迫4式
234	後前～中葉	5～8期
235	後前～中葉	5～8期
236	後前～中葉	6・7期
237	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
238	後初～前葉	5～8期 底部
239	後初～前葉	5～8期 底部
240	縄文後期	縄文時代
241	後期前葉	5～8期
242	後期前葉	5～8期
243	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
244	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
245	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
246	縄文後期	5～8期 底部
247	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期 本野原2・3式
248	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
249	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
250	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
251	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
252	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
253	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
254	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
255	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
256	後期前葉	5～7期
257	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
258	後期前葉	5～8期
259	後期前葉	5～8期
260	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津Ⅰ式
		同一個体261
261	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津Ⅰ式
		同一個体260
262	中期前葉 轟B類似	中期前葉 上水流Ⅲ類
263	後期前葉 本野原2・3式	6期 本野原2式
		同一個体264
264	後期前葉 本野原2・3式	6期 本野原2式
		同一個体263
265	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
266	後期前葉	5・6期
267	後前～中葉	5～8期

番号	52集	訂正後
268	後前～中葉	6・7期
269	後前～中葉	4～8期
270	中期前葉 轟B類似	中期前葉 上水流Ⅲ類
271	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津Ⅰ式
272	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津Ⅰ式
273	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
274	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
275	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
276	後初～前葉	5～8期 底部
277	後初～前葉	5～8期 底部
278	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
279	後前～中葉	5～7期
280	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
281	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
282	晩期中葉 組織痕土器	晩中～後葉 組織痕土器
283	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
284	後前～中葉 宮之迫2・3式	時期不明
285	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津式
286	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
287	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
288	後初～前葉	5～8期
289	縄文後期	5～11期
290	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
291	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
292	後前～中葉	5～7期
293	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期
294	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
295	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
296	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
297	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
298	縄文後期	縄文時代
299	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
300	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
301	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
302	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
303	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
304	後前～中葉 本野原2～4式	4～7期
305	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期
306	後初～前葉 磨消縄文系	4・5期 磨消縄文系
307	後前～中葉	5～8期
308	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
309	後前～中葉	5～7期
310	後前～中葉	5～7期

番号	52集	訂正後
311	後前～中葉	5～8期 底部
312	後前～中葉	5～8期
313	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
314	中末～後初 宮之迫2・3式	5～7期
315	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
316	後初～中葉	5・6期
317	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
318	後前～中葉	5～8期
319	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
320	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
321	後期前葉	5期 宮之迫4式
322	後期前葉 磨消縄文系	4・5期 磨消縄文系
323	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
324	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
325	後前～中葉	5～8期
326	後前～中葉	5～8期
327	後前～中葉	5～8期
328	後前～中葉	5～8期
329	縄文後期	5～8期
330	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
331	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
332	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
333	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
334	後前～中葉	5～8期
335	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
336	後期初頭 宮之迫3式	3・4期 宮之迫2・3式
337	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
338	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
339	後初～前葉 宮之迫3・4式	4～7期
340	後前～中葉 本野原2～4式	8期 橋牟礼川系
341	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
342	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
343	後期中葉 市来Ⅱ式	8期 市来Ⅰ式
344	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
345	後期後葉 丸尾A式	10・11期 丸尾式
346	後前～中葉	5～8期
347	後前～中葉	5～8期
348	後期初頭 宮之迫3式	3・4期 宮之迫2・3式
349	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
350	後期前葉 本野原1式	5期 宮之迫4式
351	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
352	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
353	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式

第２表　出土土器正誤表（２）

番号	52集	訂正後
354	後期前葉 磨消縄文系	4・5期 宮之迫3・4式
355	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 磨消縄文系
356	後初～前葉 宮之迫3・4式	5～7期
357	後期初頭 宮之迫3式	5～7期
358	後期前葉	5～7期
359	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
360	後期前葉	5～7期
361	後期前葉	5～7期
362	後期前葉	5～7期
363	後期前葉	5～7期
364	後期前葉	5期 宮之迫4式
365	後期前葉 御手洗A(？)	5～7期 御手洗A系
366	縄文後期	5～11期
367	後前～中葉	5～8期
368	後前～中葉	5～8期
369	後前～中葉	5～8期
370	中期前葉 轟B類似(？)	中期前葉 上水流Ⅲ類
371	後期初頭 宮之迫3式	3・4期 宮之迫2・3式
372	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
373	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
374	後期初頭 宮之迫3式	4～7期
375	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
376	後期初頭 宮之迫3式	4～7期
377	後期前葉 本野原3式	5期 本野原1式
378	後前～中葉	4～7期
379	時期不明	前期前葉？
380	後前～中葉	5～8期
381	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期 本野原1～3式
382	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
383	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
384	後初～前葉 宮之迫3・4式	4～7期
385	後期初頭 宮之迫3式	4～7期
386	後期初頭 宮之迫3式	4～7期
387	後期初頭 宮之迫3式	5期 宮之迫4式
388	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
389	後期前葉 本野原2式	5～7期 本野原1～3式
390	後前～中葉	5～8期
391	後前～中葉	5～8期
392	後前～中葉	5～8期
393	後前～中葉	5～8期
394	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
395	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
396	後期前葉 福田K2式	5期 宿毛式

番号	52集	訂正後
397	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
398	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
399	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
400	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
401	後初～前葉 宮之迫3・4式	5期 宮之迫4式
402	中末～後初	2～4期 宮之迫1～3式
404	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
405	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
406	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
407	後初～前葉 宮之迫3・4式	5～7期
408	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
409	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
410	後前～中葉	5～8期
412	中末～後前 宮之迫2～4式	2・3期 宮之迫1・2式
413	中末～後前 宮之迫2～4式	2・3期 宮之迫1・2式
414	中末～後前 宮之迫2～4式	2～4期 宮之迫1～3式
415	後初～前葉 宮之迫3・4式	2～4期 宮之迫1～3式
416	後初～前葉 宮之迫3・4式	2～4期 宮之迫1～3式
417	後初～前葉 宮之迫3・4式	2～4期 宮之迫1～3式
418	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
419	後初～前葉 宮之迫3・4式	2～4期 宮之迫1～3式
420	後期初頭 宮之迫3式	2・3期 宮之迫1・2式
421	後前～中葉	4～7期
422	後前～中葉	4～7期
423	縄文後期	5～12期 土器片加工品
424	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
425	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
426	後初～前葉 宮之迫3・4式	2・3期 宮之迫1・2式
427	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式
428	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
429	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
430	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
431	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
432	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
433	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
434	後期前葉 本野原1・2式	5・6期 磨消縄文系
435	後期前葉 本野原2・3式	5・6期
436	後前～中葉	5～8期
437	後初～前葉 宮之迫2・3式	5～7期
438	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
439	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
440	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
441	後初～前葉 宮之迫3・4式	3・4期 宮之迫2・3式

番号	52集	訂正後
442	中末～後初 宮之迫2～4式	3～7期
443	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
444	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
445	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
446	中末～後初 宮之迫2・3式	2・3期 宮之迫1・2式
447	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
448	後前～中葉	5～7期
449	後期初頭 宮之迫3式	2期 宮之迫1式
450	後前～中葉	4～7期
451	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
452	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
453	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
454	後期初頭 宮之迫3式	5期 宮之迫4式
455	後期中葉 指宿式	8期 橋牟礼川系
456	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
457	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
458	後前～中葉	5～8期 底部
459	後前～中葉	5～8期 底部
460	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
461	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
462	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
463	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
464	後前～中葉	5～7期
465	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
466	後期前葉 磨消縄文系	5・6期
467	後前～中葉	5～8期
468	縄文後期	5～8期
469	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
470	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
471	中末～後初 宮之迫2・3式	4期 宮之迫3式
472	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
473	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
474	後初～前葉	5～7期
475	中末～後前 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
476	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
477	後初～前葉 宮之迫3・4式	4期 宮之迫3式
478	後初～前葉 宮之迫3・4式	4～7期
479	縄文後期	5～8期
480	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
481	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
482	中末～後前 宮之迫2～4式	3～5期 宮之迫2～4式
483	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
484	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式

番号	52集	訂正後
485	後初～前葉	4～7期
486	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
487	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
488	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
489	縄文後期	時期不明 底部
490	後前～中葉	5～8期
491	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
492	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
493	後初～前葉 宮之迫3・4式	4～7期
494	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
495	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
496	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
497	後前～中葉	4～7期
498	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
499	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
500	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
501	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
502	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
503	後初～前葉	4～7期
504	後期前葉 宮之迫4式	4～7期
505	後期前葉 宮之迫4式	4～7期
506	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
507	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
508	後初～前葉	4～7期
509	早期前葉 貝殻文系	早期前葉 加栗山式
510	縄文後期	時期不明
511	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
512	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
513	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
514	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
515	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
516	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
517	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
518	後期前葉 宮4・本1	4～6期
519	後期前葉 本野原1式	4～6期
520	後期前葉 本野原1・2式	3・4期 宮之迫2・3式
521	後期前葉 出水式系	6・7期 出水式系？
522	後期前葉 本野原1式	4～6期
523	後期前葉 福田K2式	5期 宿毛式系
524	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
525	後期前葉 磨消縄文系	5・6期
526	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
527	後期前葉 御手洗A式	5～7期 御手洗A系？

第３表　出土土器正誤表（３）

番号	52集	訂正後
528	縄文後期	5期 宮之迫4式
529	縄文後期	4～7期 土器片加工円盤
530	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
531	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
532	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
533	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
534	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
535	中後～中末 宮之迫1・2式	2～4期 宮之迫1～3式
536	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
537	中後～中末 宮之迫1・2式	3・4期 宮之迫2・3式
538	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
539	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
540	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
541	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
542	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
543	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
544	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
545	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
546	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
547	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
548	中末～後初 宮之迫2・3式	4期 宮之迫3式
549	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
550	後前～中葉	4・5期
551	後前～中葉	5～7期
552	後前～中葉	5～8期
553	後前～中葉	5～8期
554	後前～中葉	5～8期
555	後前～中葉	4～7期
556	後前～中葉	5～8期
557	後前～中葉	5～11期
558	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
559	後前～中葉	～5期 宮之迫4以前
560	後前～中葉	5～8期
561	晩期中葉 黒川式	縄文晩期 黒色磨研土器
562	後前～中葉	晩期後葉 黒川式
563	前期後葉 深浦式	前期後葉 星塚式
564	前期後葉 深浦式	前期前葉？ 西川津式？
565	中期前葉 轟B類似	中期前葉 上水流Ⅲ類
566	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
567	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
568	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
569	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
570	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式

番号	52集	訂正後
571	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
572	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
573	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
574	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
575	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
576	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
577	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
578	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
579	後初～前葉 宮之迫3・4式	5期 宮之迫4式
580	中末～後前	2～7期
581	中末～後前 宮之迫2～4式	3～5期 宮之迫2～4式
582	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
583	縄文	縄文時代
584	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
585	縄文後期	5～8期
586	縄文後期	5～8期
587	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
588	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
589	後期前葉 宮之迫4式	4・5期 宮之迫3・4式
590	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
591	後期中葉 指宿式	8期 橋牟礼川タイプ
592	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
593	後期前葉	8・9期
594	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
595	後期中葉 市来式	8・9期 市来式
596	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
597	後期中葉 市来Ⅰ式	9期 市来Ⅱ式
598	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
599	後前～中葉	5～8期
600	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
601	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
602	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
603	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
604		
605	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
606	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
607	後前～中葉	5～8期
613	早期前葉 貝殻文系	早期前葉 貝殻文系底部
614	早期前葉 貝殻文系	早期前葉 貝殻文系底部
615	中期末葉 阿高2式 同一個体617	3・4期 阿高2・3式 同一個体619
616	中末～後初 宮之迫1～3式	2・3期 宮之迫1・2式
617	中末～後初 宮之迫1～3式	2～4期 宮之迫1～3式
618	中後～中末 宮之迫1・2式	時期不明

番号	52集	訂正後
619	中期末葉 阿高2式 同一個体613	3・4期 阿高2・3式 同一個体615
620	中末～後前	時期不明
621	中後～中末 宮之迫1～3式	2～4期 宮之迫1～3式
622	中後～後初 宮之迫1～3式	3・4期 宮之迫2・3式
623	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
624	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
625	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
626	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
627	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
628	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
629	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
630	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
631	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
632	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
633	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
634	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
635	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
636	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
637	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
638	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
639	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
640	中末～後前 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
641	中末～後前 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
642	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
643	中後～中末 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
644	中末～後初 宮之迫2・3式	4期 宮之迫3式
645	中末～後初 宮之迫2・3式	4期 宮之迫3式
646	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
647	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
648	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
649	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
650	後期前葉	5～7期
651	後初～前葉	4～7期
652	後前～中葉	中期前葉？ 上水流Ⅲ類？
653	後前～中葉	5～8期 底部
654	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
655	後前～中葉	5～8期
656	後前～中葉	5～8期
657	後前～中葉	中中～5期 底部
658	後前～中葉	5～8期
659	縄文晩期	縄文晩期 底部
660	晩期中葉 黒川式	晩中～後葉 黒川式

番号	52集	訂正後
661	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
662	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
663	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
664	縄文前期 尾田式	前期後葉 星塚式
665	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
666	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
667	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
668	中末～後初 宮之迫2・3式	3期 宮之迫2式
669	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
670	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
671	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
672	後前～中葉	3・4期 宮之迫2・3式
673	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
674	後初～前葉	3～5期 宮之迫2～4式
675	後期前葉 本野原2式	6・7期 本野原2・3式
676	後前～中葉	5～8期
677	中末～後前	4期 宮之迫3式
678	後期前葉	5期
679	中末～後初 宮之迫2・3式	2期 宮之迫1式
680	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
681	後前～中葉	4～7期
682	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
683	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
684	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
685	後前～中葉	時期不明 底部
686	後前～中葉	時期不明 底部
687	縄文後期	4～7期
689	中期前葉 春日式後半	中期中葉 春日式後期
690	後期前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
691	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
692	中末～後前 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
693	後前～中葉	5～8期
694	後前～中葉	5～8期
695	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
696	中末～後前 宮之迫2～4式	5期 宮之迫4式
697	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
698	後期前葉	4～8期
699	縄文後期	5～8期 底部
700	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
701	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
702	後初～前葉 宮之迫3・4式	4～7期
703	後前～中葉 宮之迫2～4式	5～7期
704	後前～中葉 宮之迫2～4式	6・7期 本野原2・3式

第４表　出土土器正誤表（４）

番号	52集	訂正後
705	後期中葉 市来内面施文	8期 市来（内面施文）
706	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
707	後前～中葉	5～8期
708	後前～中葉	5～8期
709	後前～中葉	縄文晩期 黒色磨研土器
710	早期前葉 貝殻文系	早期前葉 加栗山式
712	後前～中葉	4～7期
713	早期前葉 小牧3A段階	早期前葉 貝殻文系
714	中期前葉 深浦式	前期後葉 深浦式
715	後前～中葉	時期不明
716	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
717	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
718	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
719	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
720	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
721	中末～後初 宮之迫2・3式	2・3期 宮之迫1・2式
722	中末～後初 宮之迫2・3式	2・3期 宮之迫1・2式
723	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
724	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
725	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
726	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
727	中後～後初 宮之迫1～3式	2～4期 宮之迫1～3式
	同一個体727	同一個体729
728	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
729	中末～後初 宮之迫2・3式	2～4期 宮之迫1～3式
	同一個体725	同一個体727
730	中末～後前	2期 宮之迫1式
731	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
732	中期後葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
733	中後～末葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
734	中後～末葉 宮之迫1式	2～4期 宮之迫1～3式
735	中後～末葉 宮之迫1式	2期 宮之迫1式
736	中末～後前	～6期
737	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
738	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
	同一個体738、751	同一個体739、752
739	中末～後前 宮之迫2～4式	5期 宮之迫4式
	同一個体737、751	同一個体738、752
740	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
741	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
742	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
743	後初～前葉	4～7期
744	中末～後前 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
745	中末～後前 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
746	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式

番号	52集	訂正後
747	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
748	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期 本野原2・3式
749	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
750	後前～中葉	4～7期
751	後前～中葉	5～8期
752	縄文後期	5期 宮之迫4式
	同一個体737、738	同一個体738、739
753	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
754	早期前葉 塞ノ神式	早期後葉 塞ノ神式
755	中末～後前 宮之迫2～4式	3～5期 宮之迫2～4式
756	中末～後前 宮之迫2～4式	3～5期 宮之迫2～4式
757	中末～後前 宮之迫2～4式	3～5期 宮之迫2～4式
758	中末～後前 宮之迫2～4式	3～5期 宮之迫2～4式
759	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
760	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
761	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
762	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
763	後初～前葉	4・5期 宮之迫3・4式
764	後初～前葉	4・5期 宮之迫3・4式
765	後初～前葉	4・5期 宮之迫3・4式
766	中末～後前	5～8期
767	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
768	後前～中葉	5～8期 底部
769	後前～中葉	5～8期 底部
770	縄文後期	5期以降 底部
771	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
772	縄文後期	～8期
773	中期中葉 並木式	1期 並木式
775	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
776	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
777	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
778	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
		同一個体820
779	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
780	後初～前葉	3期 宮之迫2式
		同一個体817
781	後初～前葉 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
782	後初～前葉 宮之迫2～4式	3・4期 宮之迫2・3式
783	後初～前葉 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
784	後初～中葉	4～7期
785	後前～中葉	5～8期
786	後前～中葉	5～8期 底部
787	後前～中葉	～8期 底部
789	Ah直下 条痕文系	5～8期

番号	52集	訂正後
790	晩期初頭	縄文晩期 深鉢
791	晩期初頭	縄文晩期 深鉢
792	晩期前葉 入佐式	縄文晩期 黒色磨研土器
793	後前～中葉	5～8期
794	後前～中葉	5～8期
795	後前～中葉	5～8期
796	後前～中葉	5～8期 底部
797	晩前～中葉 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
798	縄文晩期 黒色磨研	縄文晩期 黒色磨研土器
799	縄文晩期 黒色磨研	縄文晩期 黒色磨研土器
800	後前～中葉	5～8期 底部
801	後前～中葉	5～8期
802	後後～晩期	縄文晩期 黒色磨研土器
803	後後～晩期	縄文晩期 黒色磨研土器
804	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
805	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
806	中期末葉 阿高2式	3・4期 阿高2・3式
807	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 阿高2・3式
808	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
809	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
810	中期末葉 阿高2式	3・4期 阿高2・3式
811	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
		同一個体815
812	中後～後初 宮之迫1～3式	2・3期 宮之迫1・2式
813	中期末葉 阿高2式	2・3期 阿高2・3式
814	中末～後前	4～7期
815	中末～後前	2期 宮之迫1式
		同一個体811
816	中末～後前	縄文時代
817	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
		同一個体780
818	中後～末葉 宮之迫1・2式	3・4期 宮之迫2・3式
819	中後～末葉 宮之迫1・2式	3・4期 宮之迫2・3式
820	中末～後前 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
		同一個体778
821	中末～後前 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
822	中末～後前 宮之迫2～4式	2～5期 宮之迫1～4式
823	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
824	縄文後期	時期不明 底部
825	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
826	中後～末葉 宮之迫1・2式	3・4期 宮之迫2・3式
827	中末～後前	4～7期
828	縄文後期	縄文時代 底部
829	縄文後期	5～8期 底部
830	縄文晩期	晩期後葉 黒川式

番号	52集	訂正後
866	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
871	後期後葉 納屋向式	12期 納曽3式
872	縄文後期	5～8期
873	後期前～中葉	5～8期
874	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
875	後期後葉 丸尾式	10・11期 丸尾式
876	後前～中葉	4～7期
878	縄文後期	時期不明
879	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
880	縄文後期	5～8期
881	後期後葉 納曽式	12・13期 納曽3・中岳Ⅰ
882	縄文後期	5～8期
883	後期前～中葉	5～8期
884	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
885	後初～前葉 宮之迫3・4式	4期 宮之迫3式
886	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
887	縄文後期	5～8期
888	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
889	後前～中葉	5～8期 底部
890	縄文後期	時期不明
891	後前～中葉	5～8期
892	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
893	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
894	後期後葉 丸尾B式	12期 丸尾B式
895	後期後葉 丸尾B式	12期 丸尾B式
896	後前～中葉	5～8期 底部
897	中末～後前 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
899	縄文早期 別府原式	早期前葉？ 別府原式？
900	中末～後前 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
901	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
902	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
903	後前～中葉	5～8期
904	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
905	中末～後前	～8期
906	中末～後前	～8期
907	中末～後前	～8期
908	中末～後前	～8期
909	中末～後前	～8期
910	中末～後前 宮之迫2～4式	4・5期 宮之迫3・4式
911	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
912	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
913	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
914	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式

第５表　出土土器正誤表（５）

番号	52集	訂正後
915	後前～中葉	5～8期
916	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
917	後初～前葉	5～8期
918	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
919	後前～中葉	5～8期
920	中末～後初 宮之迫2・3式	3～5期 宮之迫2～4式
921	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
922	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
923	早期前葉 貝殻文系	早期前葉 加栗山式
924	後前～中葉	5～8期
925	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
926	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
927	中後～後初 宮之迫1～3式	3・4期 宮之迫2・3式
928	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
929	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
930	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
931	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
932	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
933	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
934	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
935	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
936	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
937	後前～中葉	4・5期 宮之迫3・4式
938	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
939	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
940	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
941	縄文後期	時期不明
942	後前～中葉	4～7期
943	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
946	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
947	中末～後初 宮之迫2・3式	4・5期 宮之迫3・4式
948	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期 本野原2・3式
949	後期前葉	5・6期 磨消縄文系
950	後期前葉	5・6期
951	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
952	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
953	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
954	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
955	後期中葉 市来Ⅰ式？	8期 市来Ⅰ式
956	後期中葉 市来Ⅰ式？	8期 市来Ⅰ式
957	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
958	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
959	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式

番号	52集	訂正後
960	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
961	後期中葉 市来Ⅱ(薩摩タイプ)	9期 市来Ⅱ(薩摩タイプ)
962	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ(薩摩タイプ)
963	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
964	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
965	後期後葉 丸尾A式	9期 市来Ⅱ式
966	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
967	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
968	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
969	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
970	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
971	後期後葉 丸尾B式	10期 丸尾A式
972	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
973	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
974	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
975	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
976	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
977	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
978	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
979	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
980	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
981	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
982	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
983	後期後葉 納屋向式	11期 丸尾B式
984	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
985	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
986	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
987	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
988	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
989	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
990	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
991	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
992	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
993	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
994	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
995	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
996	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
997	後期後葉 丸尾式？	10・11期 丸尾式系
998	後期中葉 北久根山式	10期 宮下辛川Ⅰ式
999	後期中葉 北久根山式	10期 宮下辛川Ⅰ式
1000	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1001	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1002	後期後葉 西平式	11期 納曽2式

番号	52集	訂正後
1003	後期後葉 西平式	12期 西平式前期
1004	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
1005	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
1006	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
1007	後期後葉 三万田式	13期 西平式後期
1008	後期後葉 三万田式	13期 西平式後期
1009	後期後葉 三万田式	14期 三万田式
1010	縄文後期	12期 納曽3式
1011	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1012	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1013	後期後葉 磨研土器	13期 中岳Ⅰ式
1014	後期後葉 磨研土器	13期 中岳Ⅰ式
1015	後後～晩前	14期 平畑1先行ﾀｲﾌﾟ
1016	後後～晩前	14期 平畑1先行ﾀｲﾌﾟ
1017	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
1018	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
1019	縄文晩期 黒色磨研土器	晩期中葉 入佐式
1020	縄文晩期 黒色磨研土器	晩期中葉 入佐式
1021	縄文晩期 黒色磨研土器	縄文晩期 黒色磨研土器
1022	後末～晩前 磨研土器	縄文晩期 深鉢
1023	後末～晩前 磨研土器	晩中～後葉 黒川式
1024	後末～晩前 黒色磨研土器	晩中～後葉 黒川式
1025	後末～晩前	晩中～後葉 黒川式
1026	後期中葉	8期 台付皿形土器
1027	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1028	縄文後期	9期 台付皿形土器
1029	縄文後期	8・9期 台付皿形土器
1030	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1031	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1032	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1033	縄文後期	10期 台付皿形土器
1034	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1035	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1036	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1037	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1038	縄文後期中葉 北久根山・西原	9期 台付皿形土器
1039	縄文後期 型式不明	縄文後期 外来系土器
1040	後前～中葉	5～7期
1041	縄文後期	5～8期
1042	縄文後期	5～8期
1043	縄文後期	5～8期
1044	縄文後期	5～8期
1045	縄文後期	5～8期

番号	52集	訂正後
1046	縄文後期	縄文時代
1047	縄文後期	縄文時代
1048	早期前葉 加栗山式	早期前葉 加栗山式
1063	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1064	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1065	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1066	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1067	後期後葉 丸尾B式	10～13期 丸尾・納屋向式
1068	後後～末葉 納曽式	12期 納曽3式
1069	後後～晩前	12～14期
1070	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1071	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1072	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1073	縄文後期	縄文時代 底部
1074	縄文後期	5～8期 土器片加工円盤
1075	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1076	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1077	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1078	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1079	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1080	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1081	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1082	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1083	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1084	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1085	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1086	早期前葉 小牧3A段階	早期前葉 加栗山式
1087	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1088	後前～中葉	5期 宮之迫4式
1089	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1090	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1091	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1092	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1093	後前～中葉	12期 納曽3式
1094	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1095	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1096	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1097	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1098	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1099	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1100	後中～後後 市来～丸尾A	9・10期 市来Ⅱ～丸尾A
1101	後期後葉 納屋向式土器	12・13期 底部
1102	後期後葉 納屋向式土器	12・13期 底部

第６表　出土土器正誤表（６）

番号	52集（48集）	訂正後
1103	後期後葉 納屋向式土器	12・13期 納屋向式
1104	後期後葉 納屋向式土器	12・13期 納屋向式
1105	後期後葉 納屋向式土器	12・13期 納屋向式
1106	縄文後期	5～8期
1107	縄文晩期 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1108	縄文晩期 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1109	晩期前葉 入佐式	縄文晩期 黒色磨研土器
1110	縄文後・晩期	縄文後期 底部
1111	縄文後・晩期	10～13期 底部
1112	縄文後・晩期	10～13期 底部
1113	縄文後・晩期	14期 平畑1先・高野原
1114	縄文晩期 黒色磨研	縄文晩期 黒色磨研土器
1115	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
		1122と同一個体
1116	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1117	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1118	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1119	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
		1121と同一個体
1120	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
1121	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
		1119と同一個体
1122	縄文後期	5～14期 台付皿形土器
		1115と同一個体
1123	縄文時代	縄文時代 用途不明
第48集 P110中	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
第48集 P110下	後期中葉 本野原5式	8期 本野原4式
第48集 P111上	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
第48集 P111中	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
第48集 P111下	後期中葉 本野原4式	5～8期 本野原系
1127	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1128	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1129	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1130	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1131	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3期 宮之迫1・2式
1132	中期後葉	2～4期 宮之迫1～3式
1133	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1134	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1135	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1136	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1137	中期末葉 宮之迫2式	3期 宮之迫2式
1138	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1139	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1140	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1141	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式

番号	52集	訂正後
1142	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
1143	中末～後初 宮之迫2・3式	3・4期 宮之迫2・3式
1144	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1145	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1146	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1147	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1148	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1149	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1150	後前～中葉 本野原式	6期 本野原2式
1151	後期前葉 本野原3式	6・7期
1152	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1153	後期前葉 本野原2式	5期 本野原1式
1154	後期前葉 本野原2式	5期 本野原1式
1155	後期前葉 本野原2式	5期 本野原1式
1156	後期前葉 本野原3式	5期 本野原1式
1157	後期前葉 本野原5式	8期 本野原4式
1158	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1159	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原式
1160	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原式
1161	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原式
1162	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原式
1163	後期中葉 本野原4式	5期 本野原1式
1164	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
1165	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原系
1166	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1167	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原系
1168	後前～中葉 本野原6式	8期 本野原4式
1169	後前～中葉 本野原6式	8期 本野原4式
1170	後前～中葉 本野原6式	8期 本野原4式
1171	後前～中葉 本野原6式	8期 本野原4式
1172	後期前葉 本野原1式	5期 本野原1式
1173	後期前葉 本野原1式	5期 本野原1式
1174	後期前葉 本野原1式	5期 本野原1式
1175	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
1176	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
1177	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
1178	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
1179	後期中葉 本野原4式	6期 本野原2式
1180	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1181	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1182	後期前葉 本野原2式	6期 本野原2式
1183	後期前葉 本野原2式	6期 本野原2式
1184	後期前葉 本野原3式	6・7期 本野原2・3式

番号	52集	訂正後
1185	後期前葉 本野原2式	6期 本野原2式
1186	後期中葉 本野原5式	7期 本野原3式
1187	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1188	後前～中葉 本野原3・4式	6・7期 本野原2・3式
1189	後期前葉 本野原2式	5期 本野原1式
1190	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1191	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1192	後期中葉 本野原4・5式	6～8期 本野原系
1193	後期中葉 本野原4・5式	7期 本野原3式
1188	後前～中葉 本野原3・4式	6・7期 本野原2・3式
1189	後期前葉 本野原2式	5期 本野原1式
1190	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1191	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1192	後期中葉 本野原4・5式	6～8期 本野原系
1193	後期中葉 本野原4・5式	7期 本野原3式
1194	後前～中葉 本野原2～4式	6期 本野原2式
1195	後初～前葉 宮之迫3・4式	4期 宮之迫3式
1196	後期中葉 本野原4・5式	7期 本野原3式
1197	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原系
1198	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1199	後期前葉 本野原2・3式	6期 本野原2式
1200	後前～中葉 本野原3・4式	6・7期 本野原2・3式
1201	後期中葉 本野原4・5式	7期 本野原3式
1202	後期中葉 本野原5式	8期 本野原4式
1203	後期中葉 本野原5式	7期 本野原3式
1204	後前～中葉 本野原式	7期 本野原3式
1205	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1206	後期前葉 本野原2式	6期 本野原系
1207	後期中葉 本野原5式	8期 本野原4式
1208	後期前葉 本野原2式	5・6期 本野原2・3式
1209	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原系
1210	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原系
1211	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原系
1212	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原系
1213	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原系
1214	後期前葉 本野原式	8期 橋牟礼川系
1215	後前～中葉 指宿式模倣土器	8期 橋牟礼川系
1216	後期前葉 本野原2・3式	5期 本野原1式
1217	後前～中葉 本野原式	8期 橋牟礼川系
1218	後期前葉 本野原2・3式	5・6期 D群土器
1219	後期前葉 本野原2・3式	5・6期 本野原系
1220	後期中葉 成川K式模倣土器	6期 成川系
1221	後期中葉 成川K模倣	6期 成川系

番号	52集	訂正後
1222	後期中葉 成川K式模倣土器	6期 成川系
1223	後期中葉 成川K式模倣土器	6期 成川系
1224	後期前葉	5～8期
1225	後前～中葉 本野原式	6期 本野原2式
1226	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1227	後期前葉 本野原3式	6期 本野原2式
1228	後期前葉 本野原2・3式	5～8期
1229	後前～中葉 本野原3・4式	5～8期
1230	後期中葉 本野原4・5式	5～8期
1231	後期前葉 本野原2・3式	6期 D群土器
1232	後期前葉 本野原3式	7期 D群土器
1233	後期前葉 本野原3式	6期 D群土器
1234	後期前葉 本野原3式	6期 D群土器
1235	後前～中葉 本野原3・4式	6期 D群土器
1236	後期前葉 本野原2・3式	5期 D群土器
1237	後前～中葉 本野原3・4式	6期 D群土器
1238	後期前葉 本野原3式	7期 D群土器
1239	後前～中葉 本野原3・4式	7期 本野原3式
1240	後期中葉 本野原4式	7期 本野原3式
1241	後期中葉 本野原4式	6・7期 本野原系
1242	後期前葉 本野原2・3式	6・7期 本野原系
1243	後期前葉 本野原2・3式	6期 成川系
1244	後期前葉 本野原2・3式	6期 成川系
1245	後期前葉 本野原3式	6期 D群土器
1246	後前～中葉 本野原2～4式	7期 浅川牧タイプ
1247	後前～中葉 本野原式	5～8期
1248	後前～中葉 本野原式	5～8期
1249	後期前葉	4・5期 宮之迫3・4式
1250	後期前葉	5・6期
1251	後期前葉 出水式	6・7期 出水式
1252	後期前葉 出水系	6・7期 出水系
1253	後期前葉 可愛４類	5期 門川南町タイプ
1254	後期前葉 福田K2式	4期 中津式末期
1255	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式系
1256	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式系
1257	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式系
1258	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式系
1259	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式
1260	後期前葉 磨消縄文系	5・6期 磨消縄文系
1261	後期前葉 磨消縄文系	5・6期 磨消縄文系
1262	後期前葉 宿毛式	5・6期 磨消縄文系
1263	後期前葉 宿毛式	5・6期 福田K2・宿毛系
1264	後期前葉 宿毛式	5・6期 宿毛式

第７表　出土土器正誤表（７）

番号	52集	訂正後
1265	後期前葉 宿毛式	5・6期 宿毛式
1266	後期前葉 本野原	5・6期 磨消縄文系
1267	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式
1268	後期前葉 本野原式	5・6期 磨消縄文系
1269	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
1270	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式
1271	後期前葉 本野原式	5～7期 磨消縄文系
1272	後期前葉 磨消縄文系	5・6期 磨消縄文系
1273	後期前葉 本野原式	5・6期 磨消縄文系
1274	後期前葉 福田K2式	5・6期 宿毛式
1275	後期前葉 磨消縄文系	5・6期 小池原上層式
1276	後期前葉 磨消縄文系	5・6期 小池原上層式
1277	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
1278	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
1279	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
1280	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
1281	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
1282	後期中葉 縁帯文土器	7・8期 縁帯文土器
1283	後期中葉 鐘崎式	5・6期 福田K2・宿毛式
1284	後前～中葉 磨消縄文系	5・6期 福田K2・宿毛式
1285	後期中葉 鐘崎式？	8期 小池原上層式
1286	後前～中葉	5～7期
1287	後期中葉 鐘崎式	8期 鐘崎式
1288	後期前葉	5～7期
1289	後期前葉	5～7期
1290	後期前葉	5～7期
1291	後期前葉	5～7期
1292	後期前葉	5～7期
1293	後期前葉	9期 北久根山式
1294	後期前葉	4・5期 宮之迫3・4式
1295	後期前葉	5～7期
1296	後期前葉	5～7期
1297	後期中葉 本野原4～6式	7・8期
1298	後期前葉 本野原2・3式	5～7期
1299	後期前葉 宿毛式類似	5・6期 宿毛系
1300	後期前葉 御手洗A類似	4・5期 宮之迫3・4式
1301	後期前葉	5～7期
1302	後期前葉	5～7期
1303	後前～中葉	5～8期
1304	後前～中葉	5～8期
1305	後前～中葉	5～8期
1306	後前～中葉	5～8期
1307	後前～中葉	5～8期

番号	52集	訂正後
1308	後前～中葉	5～8期
1309	後前～中葉	5～8期
1310	後前～中葉	5～8期
1311	後前～中葉	5～8期
1312	後前～中葉	5～8期
1313	後前～中葉	5～8期
1314	後前～中葉	5～8期
1315	後前～中葉	5～8期
1316	後前～中葉	5～8期
1317	後前～中葉	5～8期
1318	後前～中葉	5～8期
1319	後前～中葉	5～8期
1320	後前～中葉	5～8期
1321	後前～中葉	5～8期
1322	後前～中葉	5～8期
1323	後前～中葉	5～8期
1324	後前～中葉	5～8期
1325	後前～中葉	5～8期
1326	後前～中葉	5～8期
1327	後前～中葉	5～8期
1328	後前～中葉	5～8期
1329	後前～中葉	5～8期
1330	後前～中葉	5～8期
1331	後前～中葉	5～8期
1332	後前～中葉	5～8期
1333	後前～中葉	5～8期
1334	後前～中葉	5～8期
1335	後前～中葉	5～8期
1336	後前～中葉	5～8期
1337	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1338	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1339	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1340	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1341	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器？
1342	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1343	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1344	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1345	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1346	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1347	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1348	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1349	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式？
1350	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式

番号	52集	訂正後
1351	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1352	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1353	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1354	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1355	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1356	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1357	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1358	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1359	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1360	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1361	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1362	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1363	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1364	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1365	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1366	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1367	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1368	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1369	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1370	後期中葉 旧草野式	9期 市来Ⅱ(旧草野)
1371	後期中葉 旧草野式	10期 丸尾A(旧草野)
1372	後中～後葉 旧草野式	11期 丸尾B(旧草野)
1373	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1374	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1375	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1376	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1377	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1378	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1379	後期中葉 市来式	9期 市来Ⅱ式
1380	晩期中葉 黒川式	晩期中葉 入佐式
1381	縄文晩期 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1382	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
1383	縄文晩期 黒色磨研	晩期中葉 入佐式
1384	縄文晩期 黒色磨研	縄文晩期 黒色磨研土器
1385	縄文晩期 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1386	縄文晩期 組織痕土器	縄文晩期 組織痕土器
1387	後期中葉	9期 市来Ⅱ式
1388	後期中葉	8期 台付皿形土器
1389	縄文後期	5～11期 台付皿形土器
1390	後中～後葉	10期 台付皿形土器
1391	縄文後期	5～11期 台付皿形土器
1392	縄文後期	5～11期 台付皿形土器
1393	後中～末葉	5～11期 台付皿形土器

番号	52集	訂正後
1394	後後～末葉	10～13期 台付皿形土器
1395	後中～末葉	8～15期 注口土器
1396	後初～中葉	5～9期 鉢形土器
1397	後後～末葉	5～11期 壺形土器
1398	後後～晩前	14期 平畑1先行タイプ
1399	縄文後期	5～12期
1400	後前～中葉	5・6期 本野原系
1403	縄文後期	5～7期
1404	後前～中葉	早期後葉 妙見式
1405	後前～中葉	縄文時代
1406	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
1407	縄文後期	5～8期 底部
1408	縄文後期	5～8期 底部
1409	縄文後期	5～8期 底部
1410	縄文後期	5～8期 底部
1411	縄文後期	5～8期 底部
1412	縄文後期	3～8期 底部
1413	縄文後期	3～8期 底部
1414	縄文後期	3～8期 底部
1415	縄文後期	3～8期 底部
1416	縄文後期	3～8期 底部
1417	縄文後期	3～8期 底部
1418	縄文後期	8・9期 底部
1419	縄文後期	3～8期 底部
1420	縄文後期	3～8期 底部
1421	縄文後期	3～8期 底部
1422	縄文後期	3～8期 底部
1423	縄文後期	5～8期 底部
1424	縄文後期	3～8期 底部
1425	縄文後期	5～8期 底部
1426	縄文後期	5～8期 底部
1427	縄文後期	5～8期 底部
1428	縄文後期	5～8期 底部
1429	縄文後期	5～8期 底部
1430	縄文後期	5～8期 底部
1431	縄文後期	5～8期 底部
1432	縄文後期	5～8期 底部
1433	縄文後期	3～8期 底部
1434	縄文後期	5～8期 底部
1435	縄文後期	5～8期 底部
1436	縄文後期	3～8期 底部
1437	縄文後期	5～8期 底部
1438	縄文後期	3～8期 底部

第８表　出土土器正誤表（８）

番号	52集	訂正後
1439	縄文後期	5～8期 底部
1440	縄文後期	5～8期 底部
1441	縄文後期	5～8期 底部
1442	縄文後期	3～8期 底部
1443	縄文後期	縄文時代
1444	縄文後期	2～8期 脚台付底部
1445	後前～中葉	5～8期 不明土製品
1446	縄文後期	1～14期 土製腕輪
1447	後前～中葉	5～8期 土製腕輪
1466	後期前葉	3～6期
1467	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1468	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1469	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1470	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
1471	後期後葉 西平式	12期 西平式前期
1472	後期後葉 磨消縄文系	8～10期 台付皿形土器
1473	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1474	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1475	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1476	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1477	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1478	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1479	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1480	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1481	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1482	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1483	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1484	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1485	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1486	後後～末葉	12・13期 納屋向式
1487	後後～末葉	14期 高野原Ｔ系
1488	晩期中葉 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1489	晩期中葉 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1490	晩期中葉 黒色磨研	晩中～後葉 黒川式
1491	晩期中葉 黒川式	晩中～後葉 黒川式
1492	後期中葉	9期 台付皿形土器
1493	縄文後期	9期 台付皿形土器
1494	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1495	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1496	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1497	縄文晩期	縄文晩期 底部
1501	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1502	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式

番号	52集	訂正後
1503	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1504	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1505	後期後葉 丸尾式	10期 丸尾A式
1506	後期後葉 丸尾B式	10期 丸尾A式
1507	後末～晩前	14期 平畑1先・高野原
1508	中後～後前	～12期
1509	中後～後前	～12期
1510	中後～後前	5～12期
1511	中後～後前	～12期
1512	中後～後前	5～8期
1513	縄文晩期？	縄文晩期？
1514	中後～後前	4～7期
1515	縄文晩期 黒色磨研	縄文晩期 黒色磨研土器
1516	縄文後期	5～12期
1517	後期後葉 丸尾B式	11期
1518	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾Ｂ式
1519	後期後葉 丸尾B式	9期 市来Ⅱ式
1520	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1521	後期前葉 本野原2・3式	5～8期 本野原式
1522	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期
1523	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1524	縄文後期	10～13期 貝殻文系
1525	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1526	縄文後期	10～13期 底部
1527	後前～中葉	5～8期
1528	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1529	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1530	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1531	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期 本野原1～3式
1532	後前～中葉	5～8期
1533	後期後葉 丸尾A式	10・11期 丸尾式
1534	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1535	後前～中葉	5～8期
1536	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1537	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1538	後期前葉 宿毛式	5期 磨消縄文系？
1539	後前～中葉	5～8期
1540	後前～中葉	4～7期
1541	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1542	後前～中葉	5～8期
1543	早期前葉 加栗山式	早期前葉 加栗山式
1544	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1545	後前～中葉	5～8期 底部

番号	52集	訂正後
1546	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1547	後期前葉	9期 市来Ⅱ式
1548	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1549	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1550	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1551	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1552	縄文後期	時期不明
1553	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1554	縄文後期	5～12期 土器片錘
1555	縄文後期	5～8期
1556	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3式 宮之迫1・2式
1557	中後～末葉 宮之迫1・2式	2・3式 宮之迫1・2式
1558	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1559	後期前葉	5～8期
1560	後期前葉	4～7期
1561	縄文後期	時期不明
1562	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1563	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1564	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1565	縄文後期	9～13期 底部
1566	縄文後期	5～8期
1567	縄文後期	5～8期
1568	縄文後期	5～12期
1569	縄文後期	5～12期
1570	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
1571	縄文後期	5～12期
1575	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1576	後前～中葉	5～8期
1577	後期中葉 市来式	8・9期 市来式？
1578	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1579	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1580	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1581	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1582	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1583	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1584	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1585	後前～中葉	5～8期
1586	後前～中葉	5～8期
1587	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1588	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1589	後前～中葉	5～8期
1590	縄文時代	5～8期
1591	後前～中葉	5～8期

番号	52集	訂正後
1593	早期前葉 加栗山式	8～11期 底部
1594	縄文時代	～12期 底部
1595	縄文時代	早期前葉 加栗山式
1596	縄文時代	～12期
1597	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1598	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1599	早期前葉 加栗山式	早期前葉 加栗山式
1600	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1601	後前～中葉	5～8期
1602	後前～中葉	5～8期
1603	市来中葉 市来Ⅱ式	8・9期 市来Ⅱ式
1604	後期前葉	5～12期 土器片加工円盤
1605	後前～中葉	5～12期 土器片加工円盤
1606	縄文後期	5～8期
1607	縄文後期	5～12期
1608	縄文後期	5～12期
1609	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1610	後前～中葉	5～8期
1611	後前～中葉	5～8期 底部
1612	後前～中葉	5～8期
1614	後前～中葉	5～8期
1615	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1616	後前～中葉	5～8期
1617	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1618	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1619	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1620	縄文後期	5～8期
1621	縄文後期	5～9期
1622	後前～中葉	5～8期
1623	後前～中葉	5・6期
1624	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1625	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1626	後前～中葉	5～8期
1627	後期前葉	5期 宮之迫4式
1628	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1629	後期後葉 丸尾A式	10・11期 丸尾式
1630	後前～中葉	5～8期
1631	縄文後期	6～12期
1632	後期中葉 市来Ⅱ式	8期 市来Ⅰ式
1633	縄文後期	5～13期
1634	縄文後期	5～9期 底部
1635	縄文後期	5～12期
1636	後前～中葉 本野原式	5～8期 本野原式

第９表　出土土器正誤表（９）

番号	52集	訂正後
1637	後前～中葉	5～8期
1638	早期前葉 加栗山式	早期前葉 加栗山式
1639	早期前葉 加栗山式	早期前葉 加栗山式
1640	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1641	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1642	縄文後期	時期不明 底部
1643	後前～中葉 本野原2～4式	5～8期 本野原式
1644	後前～中葉	5～7期 本野原1～3期
1645	後前～中葉	5～12期
1646	後期中葉 市来Ⅱ式	8期 市来Ⅰ式
1647	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1648	後前～中葉	5～7期
1649	後前～中葉	5～8期
1650	後前～中葉	5～8期
1651	後前～中葉	5～8期
1652	後前～中葉	5～8期
1653	後前～中葉	5～8期
1654	後前～中葉	5～8期
1655	後前～中葉	5～9期
1656	後前～中葉	5～8期
1657	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1659	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1660	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
1661	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1662	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1663	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1664	後前～中葉	5～8期
1665	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1666	後前～中葉	5～8期
1667	後前～中葉	5～8期
1668	縄文後期	5～8期 土器片加工円盤
1669	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1670	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1671	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1672	縄文後期	12期 納曽3式
1673	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1674	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1676	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1677	縄文後期	時期不明
1678	後前～中葉	5～8期
1679	後前～中葉	5～8期
1680	後前～中葉	5～8期
1681	後前～中葉 本野原2～4式	6・7期 本野原2・3式

番号	52集	訂正後
1682	縄文後期	5～8期 底部
1683	後前～中葉 本野原式	5～8期
1684	後前～中葉	5～8期
1685	後前～中葉	5～8期
1687	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1688	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1689	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1690	後期前葉	5～8期
1691	後前～中葉	5～8期
1692	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1693	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1694	後期初頭 宮之迫3式	4・5期 宮之迫3・4式
1695	後前～中葉	5～7期
1696	後前～中葉	5～7期
1699	後前～中葉	5～8期
1700	縄文後期	8・12期 本野原4・納曽3
1701	後期中葉 市来Ⅰ式	9期 市来Ⅱ式
1702	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1703	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1704	縄文後期	5～8期 土器片加工円盤
1705	後前～中葉	5～8期
1706	後前～中葉	8期？ 市来Ⅰ式？
1707	縄文後期	5～14期
1708	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1709	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1710	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1711	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾Ａ式
1712	後前～中葉	5～8期
1713	後前～中葉	5～8期
1714	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1715	後前～中葉	5～8期
1716	縄文後期	時期不明
1717	縄文後期	時期不明
1718	後前～中葉	5～8期
1719	後期前葉	5～8期
1720	後前～中葉	5～8期
1721	後期前葉 本野原2・3式	5～7期
1722	後期前葉 本野原2・3式	5～8期
1723	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1724	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1725	後期前葉 宮之迫4式	5期 宮之迫4式
1726	中後～末葉 宮之迫3・4式	2～4式 本野原1～3式
1727	後期後葉 丸尾式	12・13期 納屋向式

番号	52集	訂正後
1729	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1730	縄文後期	4～7期
1731	縄文後期	4～7期
1732	後期前葉	5～7期
1734	後前～中葉	5～8期
1735	後前～中葉	5～8期
1736	後前～中葉	5～8期 底部
1737	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1738	後前～中葉 本野原2～4式	5～8期
1739	後前～中葉	5～8期
1740	後前～中葉	5～8期
1741	後前～中葉 本野原式	5～8期
1742	後前～中葉	8期 市来Ⅰ式？
1743	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1744	後前～中葉	5～8期
1745	後前～中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1746	後前～中葉 本野原式	6・7期 本野原2・3式
1747	後前～中葉 本野原式	5～7期 本野原1～3式
1748	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1749	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1750	後前～中葉	5～8期
1751	後前～中葉	5～8期 土器片加工円盤
1752	後前～中葉	5～8期 土器片加工円盤
1753	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1754	縄文後期	～9期 底部
1755	後前～中葉	5～8期
1756	後期前葉 磨消縄文系	5・6期 磨消縄文
1757	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1758	後期中葉 市来Ⅰ式？	8期 市来Ⅰ式？
1759	後前～中葉	5～8期
1760	後前～中葉	5～8期
1761	後前～中葉	5～8期
1762	後前～中葉 本野原2～4式	5～7期
1764	後前～中葉 本野原式	6・7期
1765	後期前葉 宮之迫4式	5～7期
1766	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1767	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式？
1768	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾Ｂ式
1769	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1770	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1771	縄文後期	時期不明 底部
1772	後期前葉	8期 内面施文土器
1773	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式

番号	52集	訂正後
1774	後前～中葉	5～8期
1775	縄文後期	8～12期 底部
1776	縄文後期	8～12期 底部
1777	後期中葉 市来式	9期 市来Ⅱ式
1778	後初～前葉 宮之迫3・4式	4・5期 宮之迫3・4式
1779	後期中葉 市来Ⅰ式	5～8期
1780	後初～前葉 宮之迫3・4式	8期 市来Ⅰ式
1781	後期前葉	4・5期 宮之迫3・4式
1782	後期前葉	4・5期 宮之迫3・4式
1783	後前～中葉	4・5期 宮之迫3・4式
1785	後前～中葉	4～8期
1786	後期初頭 宮之迫3式	4期 宮之迫3式
1787	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1788	後前～中葉	5～8期
1789	後前～中葉	5～8期
1790	後前～中葉	5～8期
1791	後期中葉 市来Ⅱ式	8期 市来Ⅰ式
1792	後前～中葉	5～8期
1793	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1794	後前～中葉	5～8期
1795	縄文後・晩期	8・9期？ 市来式？
1796	縄文後期	時期不明
1797	縄文後期	5～8期
1798	縄文後期	5～8期
1799	縄文後期	5～8期
1800	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
1801	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1802	後期後葉 丸尾式	10・11期 丸尾式
1803	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1804	後前～中葉	7・8期
1805	縄文後期	時期不明
1807	後期中葉 市来Ⅰ式	8・9期 市来式
1808	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1809	縄文後期	時期不明
1810	後前～中葉	5～8期
1811	縄文後期	8～10期 底部
1812	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1813	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1814	後前～中葉 本野原式	6・7期 本野原式
1816	後前～中葉	5～8期
1817	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
1818	後前～中葉	5～8期
1819	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式

第10表　出土土器正誤表（10）

番号	52集	訂正後
1820	縄文晩期	晩期中葉 入佐式
1821	晩期中葉 黒川式	晩中～後葉 黒川式
1822	縄文晩期 黒色磨研土器	晩中～後葉 黒川式
1825	後前～中葉	5～8期
1826	後前～中葉	5～8期
1827	後前～中葉	5～8期
1828	後前～中葉	5～8期
1829	後前～中葉	5～8期
1830	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1831	縄文後期	11期 丸尾Ｂ式
1832	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1833	後前～中葉	5～8期
1834	後前～中葉	5～8期
1835	後前～中葉	5～8期
1836	縄文晩期 黒色磨研土器	縄文晩期 黒色磨研土器
1837	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1839	後前～中葉	5～8期
1842	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1843	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1844	後前～中葉	5～12期 土器片加工円盤
1845	縄文後期	5～8期 土器片加工円盤
1846	後期前葉 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
1847	後期中葉 市来Ⅰ式	9期 市来Ⅱ式
1848	後期中葉 鐘崎式	8期 鐘崎式
1849	縄文後期	時期不明
1850	後前～中葉	5～8期
1851	縄文後期	5～12期
1852	縄文後期	10～13期 底部
1853	後前～中葉	5～8期
1854	後期後葉 丸尾式	10・11期
1855	後期後葉 丸尾式	10・11期
1856	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1857	後前～中葉	5～8期
1858	後前～中葉	5～8期
1859	縄文後期	8～12期 土器片加工円盤
1860	後前～中葉	5～8期
1861	後前～中葉	5～12期
1862	後期後葉 丸尾B式？	11期 丸尾Ｂ式？
1863	後前～中葉	5～12期
1864	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1865	後前～中葉	5～8期
1866	後前～中葉	5～8期
1867	後期後葉 丸尾式	10・11期 丸尾式

番号	52集	訂正後
1868	後前～中葉	5～8期
1869	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾Ａ式
1870	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1871	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1872	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1873	後前～中葉	5～8期
1874	後前～中葉	5～8期
1875	後期中葉 市来Ⅰ式	5～8期
1876	縄文後期	縄文時代
1877	後期中葉 市来Ⅰ式	9期 市来Ⅱ式
1878	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
1879	後期初頭 宮之迫３式	3・4期 宮之迫2・3式
1880	後初～前葉	5～8期
1881	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1882	後期後葉 納屋向式	11期 丸尾Ｂ式
1883	後初～前葉 宮之迫３・４式	5期 宮之迫4式
1884	後期後葉 丸尾式	10・11期 丸尾式
1885	後前～中葉	5～8期
1886	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1888	中後～後前	5～8期
1889	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 土器片加工円盤
1890	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1891	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
1892	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1893	後前～中葉	5～8期
1894	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1895	後前～中葉	5～8期
1896	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
1897	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1898	縄文後期	5～8期
1899	後期中葉 市来Ⅰ式？	8期？ 市来Ⅰ式？
1900	後期中葉 市来Ⅰ式？	8期？ 市来Ⅰ式？
1901	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1902	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1903	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1904	後前～中葉	5～8期 底部
1905	後前～中葉	5～9期 底部
1906	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1907	縄文後期	5～8期
1908	縄文後期	5～8期
1909	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
1910	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
1911	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式

番号	52集	訂正後
1912	縄文後期	5～8期
1913	後期中葉 市来式	8期 市来Ⅰ式
1915	縄文後期	5期 宮之迫4式
1916	後期前葉	5～7期
1917	後前～中葉 本野原２～４式	5～8期
1918	縄文後期	縄文晩期 黒色磨研土器
1919	縄文後期	8・9期 市来式
1920	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
1921	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
1922	縄文後期	5～7期
1923	縄文後期	5～8期
1924	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
1925	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
1926	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
1927	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
1930	縄文晩期	後期末葉 御領式併行？
1931	縄文晩期 黒色磨研土器	刻目突帯文期 黒色磨研土器
1932	後期後葉 丸尾Ａ式	10期 丸尾Ａ式
1933	後期後葉 丸尾Ｂ式	11期 丸尾Ｂ式
1934	後期後葉 丸尾Ａ式	10期 丸尾Ａ式
1935	後期後葉 丸尾Ａ式	10期 丸尾Ａ式
1936	後期後葉 丸尾Ａ式	10期 丸尾Ａ式
1937	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
1938	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
1939	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1940	縄文後期	縄文時代
1941	縄文後期	縄文時代
1942	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
1943	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1944	後前～中葉	5～7期
1945	後前～中葉	5～8期
1946	後前～中葉	5～8期
1947	後前～中葉	5～8期
1948	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1949	後前～中葉	5～8期
1950	縄文後期	時期不明
1951	後前～中葉	4～7期
1952	早期前葉	早期前葉 加栗山式
1953	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
1954	後初～前葉	5～7期 土器片加工円盤
1955	縄文後期	時期不明
1956	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津式類似
1957	後初～前葉	4～7期

番号	52集	訂正後
1958	縄文後期	時期不明
1960	中末～後前	2～5期
1961	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
1962	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
1963	後前～中葉	4～8期
1964	後前～中葉	5～7期
1965	縄文後期	縄文時代
1966	縄文後期	縄文時代
1967	後前～中葉	5～8期
1968	縄文後期	5～7期
1969	中後～後初 宮之迫１～３式	2～4期 宮之迫1～3式
1970	後前～中葉	5～7期
1971	後前～中葉	5～7期
1972	後初～前葉 宮之迫３・４式	3・4期 宮之迫2・3式
1973	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1974	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1975	縄文後期	5～12期
1976	後前～中葉	5～7期
1977	後前～中葉	5～8期
1978	後前～中葉	5～7期
1979	後期前葉 本野原２・３式	5～7期
1980	後前～中葉	5～7期
1981	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1982	後前～中葉	5～8期
1983	後前～中葉	5～7期
1984	後期中葉 市来Ⅱ式	8・9期 市来式
1985	縄文後期	5～8期 底部
1986	後前～中葉	4～7期
1987	後初～前葉 宮之迫３・４式	4～7期
1988	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
1989	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1990	後初～前葉 宮之迫３・４式	5期 宮之迫4式
1991	後初～前葉 宮之迫３・４式	3～5期 宮之迫2～4式
1992	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
1993	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
1994	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1995	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
1996	縄文後期	縄文時代
1997	縄文後期	縄文時代
1998	後初～前葉 宮之迫３・４式	4～7期
1999	後前～中葉	4・5期 宮之迫3・4式
2000	縄文後期	5～8期
2001	縄文後期	時期不明 底部

第11表　出土土器正誤表（11）

番号	52集	訂正後
2002	縄文後期	時期不明
2003	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
2004	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
2005	後前～中葉 本野原２～４式	5～7期
2006	後前～中葉	5～7期 本野原1～3式
2007	後前～中葉	5～8期
2008	後前～中葉	5～8期
2009	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
2010	後前～中葉	5～7期
2011	縄文後期	5～8期 底部
2012	後前～中葉	5～7期
2013	縄文後期	縄文時代
2014	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
2015	縄文後期	5～8期
2016	後前～中葉	5～8期
2017	後前～中葉	5～8期
2018	後前～中葉	5～8期
2019	後前～中葉	6・7期 本野原2・3式
2020	中後～末葉 宮之迫１・２式	2～4期 宮之迫1～3式
2021	後前～中葉	5～8期
2022	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
2023	縄文後期	時期不明
2024	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
2025	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2026	縄文後期	時期不明
2027	縄文後期	時期不明
2028	後前～中葉	5～8期
2029	後前～中葉	8期 市来Ⅰ式
2030	縄文後期	時期不明
2031	後初～前葉 宮之迫３・４式	5期 宮之迫4式
2032	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2033	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
2034	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2035	後期前葉 宿毛式	5期 宿毛式
2036	縄文後期	時期不明
2037	後前～中葉 本野原２～４式	5～7期
2038	縄文後期	時期不明 底部
2039	後初～前葉 宮之迫３・４式	5期 宮之迫4式
2040	縄文時代	時期不明
2041	後前～中葉 本野原２～４式	6・7期 本野原2・3式
2042	後前～中葉	5・6期
2043	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
2044	後初～前葉 宮之迫３・４式	5期 宮之迫4式

番号	52集	訂正後
2045	後期中葉 市来Ⅱ式	8・9期 市来式
2046	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2047	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2048	縄文後期	5～12期 土器片加工円盤
2082	早期前葉 貝殻文系	早期前葉 貝殻文系底部
2083	早期前葉 別府原式	早期前葉 別府原1式
2088	早期後葉	早期後葉 妙見式底部
2089	縄文前期 曽畑式	前期中葉 曽畑式
2090	縄文前期 羽島下層式	前期前葉 西川津Ⅰ式
2091	縄文前期 尾田式	前期前葉 西川津Ⅰ式
2092	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
2093	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
2094	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
2095	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
2096	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
2097	縄文前期 尾田式	前期後葉 尾田式
2098	縄文中期 轟B類似土器	中期前葉 上水流Ⅲ類
2099	縄文中期 轟B類似土器	中期前葉 上水流Ⅲ類
2101	縄文後期 南福寺式	5期 南福寺式
2102	縄文後期 南福寺式	5期 南福寺式
2103	後期前葉 出水式系	3期 阿高2式
2104	中期後葉 宮之迫１式	2期 宮之迫1式
2105	中期後葉 宮之迫１式	2期 宮之迫1式
2106	中末～後初 宮之迫２・３式	3・4期 宮之迫2・3式
2107	中期後葉 宮之迫１式	2期 宮之迫1式
2108	中期末葉 宮之迫２式	2・3期 宮之迫1・2式
2109	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2110	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2111	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2112	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2113	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2114	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2115	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2116	中後～末葉 宮之迫１・２式	2・3期 宮之迫1・2式
2117	中後～末葉 宮之迫１・２式	2～4期 宮之迫1～3式
2118	中末～後初 宮之迫２・３式	4・5期 宮之迫3・4式
2119	中末～後初 宮之迫２・３式	4・5期 宮之迫3・4式
2120	中期末葉 宮之迫２式	3期 宮之迫2式
2121	中期末葉 宮之迫２式	3期 宮之迫2式
2122	中期末葉 宮之迫２式	3期 宮之迫2式
2123	中期末葉 宮之迫２式	3期 宮之迫2式
2124	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
2125	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式

番号	52集	訂正後
2126	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
2127	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
2128	後期前葉 宮之迫４式	5期 宮之迫4式
2129	後初～前葉 宮之迫３・４式	4・5期 宮之迫3・4式
2130	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
2131	後期初頭 宮之迫３式	4期 宮之迫3式
2132	後期前葉 宮之迫４式	5期 宮之迫4式
2133	後期前葉 宮之迫４式	5期 宮之迫4式
2134	後初～前葉 宮之迫３・４式	5期 宮之迫4式
2135	後期前葉 本野原１・２式	5期 本野原1式
2136	後前～中葉 本野原１～４式	6期 本野原2式
2137	後前～中葉	5期
2138	後前～中葉	5期
2139	後期前葉 本野原２・３式	5・6期 本野原式
2140	後期前葉 本野原２・３式	5・6期 磨消縄文系
2141	後期前葉 宮之迫４式	8期 浅川牧タイプ
2142	後前～中葉 本野原３・４式	6・7期 D群土器
2143	後前～中葉 本野原２～４式	7期 本野原3式
2144	後前～中葉 本野原３・４式	7期 D群土器
2145	後前～中葉 ２～４本野原式	6期 成川Ka類似
2146	後前～中葉 本野原２～４式	7期 本野原3式
2147	後前～中葉 本野原３・４式	6期 本野原2式
2148	後前～中葉 本野原２～４式	7・8期 本野原3・4式
2149	後前～中葉 本野原２～４式	7期 本野原3式
2150	後前～中葉 本野原２～５式	8期 本野原4式
2151	後前～中葉 本野原２～４式	6・7期 宮之迫2・3式
2152	後前～中葉 本野原２～５式	6・7期 宮之迫2・3式
2153	後前～中葉 本野原３・４式	6期 成川Ka類似
2154	後前～中葉 本野原３・４式	6期 本野原2式
2155	後前～中葉 本野原４式	7期 本野原3式
2156	後前～中葉 本野原３・４式	5～8期
2157	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2158	後期中葉 内面施文土器	8期
2159	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2160	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2161	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2162	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2163	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2164	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2165	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2166	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2167	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2168	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式

番号	52集	訂正後
2169	後期中葉 市来式	8・9期 市来Ⅰ・Ⅱ式
2170	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2171	後期中葉 市来Ⅰ式	8・9期 市来Ⅰ・Ⅱ式
2172	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2173	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2174	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2175	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2176	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2177	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2178	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2179	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2180	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2181	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2182	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2183	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2184	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2185	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2186	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2187	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2188	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2189	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2190	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2191	後期中葉 市来式？	8・9期 市来式？
2192	後期中葉 市来式？	8・9期 市来式？
2193	後期中葉 市来式？	8・9期 市来式？
2194	後期中葉 市来式？	8・9期 市来式？
2195	後期中葉 市来式？	8・9期 市来式？
2196	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
2197	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
2198	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
2199	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
2200	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
2201	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
2202	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
2203	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2204	後期後葉 丸尾B式	11期 丸尾B式
2205	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2206	後期後葉 納屋向式	12期 納曽3式
2207	中期末 矢部奥田類似	3期 磨消縄文系
2208	後初～前葉 磨消縄文系	5期 磨消縄文系
2209	後期前葉 福田K２式	5・6期 宿毛式
2210	後期前葉 宿毛式	5・6期 宿毛式
2211	後期前葉 コウゴー松類似	4・5期 コウゴー松類似

第12表　出土土器正誤表（12）

番号	52集	訂正後
2212	後期前葉 宿毛式	5・6期 磨消縄文系
2213	後期中葉 小池原上層式	7期 小池原上層式
2214	後期後葉 北久根山式	8期 鐘崎式
2215	後期後葉 北久根山式	10期 宮下辛川Ⅰ式
2216	後期中葉 鐘崎式	10期 宮下辛川Ⅰ式
2217	後期後葉 西平式	10期 宮下辛川Ⅰ式
2218	後期後葉 西平式	10期 納曽1式
2219	後期後葉 西平式	11期 辛川Ⅱ式
2220	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2221	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2222	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2223	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2224	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2225	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2226	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2227	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2228	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2229	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2230	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2231	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2232	後期後葉 西平式	12・13期 西平式
2233	後期後葉 西平式	12期 納曽3式
2234	後期後葉 西平式	13期 西平式後期
2235	後期後葉 西平式	11期 納曽2式
2236	後期後葉 西平式	13期 西平式後期
2237	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2238	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2239	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2240	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2241	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2242	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2243	縄文晩期 黒色磨研土器	晩期中葉 入佐式
2244	晩期前葉 入佐式	晩中～後葉 黒川式
2245	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2246	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2247	晩期前葉 入佐式	縄文晩期 黒色磨研土器
2248	晩期前葉 入佐式	縄文晩期 黒色磨研土器
2249	縄文晩期 黒色磨研土器	晩期中葉 入佐式
2250	縄文晩期 黒色磨研土器	晩期中葉 入佐式
2251	縄文晩期 黒色磨研土器	縄文晩期 黒色磨研土器
2252	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2253	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式
2254	晩期前葉 入佐式	晩期中葉 入佐式

番号	52集	訂正後
2255	縄文晩期 黒色磨研土器	刻目突帯文期 黒色磨研土器
2256	縄文晩期 黒色磨研土器	刻目突帯文期 黒色磨研土器
2257	縄文晩期 黒色磨研土器	縄文晩期 黒色磨研土器
2258	縄文晩期 黒色磨研土器	縄文晩期 黒色磨研土器
2259	縄文晩期 黒色磨研土器	晩中～後葉 黒川式
2260	縄文晩期 黒色磨研土器	晩中～後葉 黒色磨研土器
2261	縄文晩期 黒色磨研土器	刻目突帯文期 刻目突帯文
2262	縄文晩期 黒色磨研土器	刻目突帯文期 刻目突帯文
2263	縄文晩期 黒色磨研土器	晩中～後葉 黒川式
2264	晩期中葉 黒川式土器	晩中～後葉 黒川式
2265	縄文晩期 黒色磨研土器	縄文晩期 黒色磨研土器
2266	後期後葉 三万田式土器	14期 三万田式土器
2267	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2268	縄文晩期	晩中～後葉 黒川式
2269	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2270	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2271	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2272	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2273	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2274	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2275	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2276	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2277	縄文晩期	晩中～後葉 黒川式
2278	縄文晩期 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式
2279	晩期後葉 無刻目突帯文	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2280	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2281	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2282	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2283	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2284	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2285	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2286	晩期中葉 孔列文土器	晩中～後葉 黒川式(孔列文)
2287	晩期中葉 孔列文土器	刻目突帯文期 刻目突帯文
2288	晩期中葉 組織痕土器	晩中～後葉 組織痕土器
2289	縄文後期	5～14期
2290	後前～中葉	6～8期
2291	縄文晩期	縄文晩期
2292	縄文後・晩期	時期不明 壷形土器
2293	後前～中葉	5～7期
2291	縄文晩期	縄文晩期
2292	縄文後・晩期	縄文時代 壷形土器
2293	後前～中葉	5～7期
2294	後前～中葉	5～7期

番号	52集	訂正後
2295	縄文後・晩期	耳環
2296	後期前葉	耳環（再利用）
2297	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2298	後期中葉	5～13期 台付皿形土器
2299	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2300	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2301	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2302	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2303	後期中葉	9期 台付皿形土器
2304	後期中葉	9期 台付皿形土器
2305	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2306	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2307	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2308	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2309	後期中葉	8期 台付皿形土器
2310	縄文後期	5～13期 台付皿形土器
2479	中後～末葉 宮之迫２・３式	2～4式 宮之迫1～3式
2480	後期前葉 本野原２・３式	6・7期 本野原2・3式
2481	後期前葉	5期
2482	後前～中葉 本野原式	5～7期 本野原1～3式
2483	後前～中葉 本野原式	5～7期
2484	後前～中葉 本野原２～４式	9期 市来Ⅱ式
2485	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2486	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2487	後期後葉 丸尾A式	10期 丸尾A式
2488	後期後葉 丸尾Ｂ式	12・13期 納屋向式
2489	後期後葉 納曽式	12・13期 納屋向式
2490	後期後葉 納曽式	12・13期 納屋向式
2491	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2492	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2493	後期後葉 納曽式	12期 納曽3式
2494	後期後葉 納屋向式	12・13期 納屋向式
2495	縄文後期	5～14期
2496	縄文後期	8～14期 台付皿形土器
2499	後前～中葉 本野原２～４式	6・7期 本野原2・3式
2500	後前～中葉	6～8期 本野原2～4式
2501	後前～中葉	6～8期 本野原2～4式
2502	後前～中葉 本野原２～４式	6・7期 本野原2・3式
2503	後期中葉 内面施文土器	8期 内面施文土器
2504	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2505	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2506	後期中葉 市来Ⅱ式	9期 市来Ⅱ式
2507	後期中葉 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式

番号	52集（48集）	訂正後
2509	後期中期 市来Ⅰ式	8期 市来Ⅰ式
2510	後期後葉 丸尾B式	10・11期 丸尾式
2511	後前～中葉	5～8期
2512	後前～中葉	5～8期
2513	後前～中葉	5～8期
2514	後前～中葉	5～8期
2515	後前～中葉	5～8期
2517	後前～中葉	5～8期 底部
2518	後前～中葉	5～8期
2519	後前～中葉	5～8期 底部
第48集 奥付上	縄文後期 鹿頭形土製品	犬頭形土製品

第13表　出土土器正誤表（13）

第Ⅱ章　調査区内の基本層序

「本野原遺跡一」において、層序についての記述が欠落していたため、ここで補足を行うと共に、台地内の堆積状況を復元したい。

Ⅰ層：耕作土層（10YR黒褐2／3）

台地全体に認められた。非常に軟質であり、粘性に富む。開墾時の整地や、再堆積した盛土遺構の破壊、更にB区では縦横にトレンチャーが行われたことにより、層中には下層の粒子や小ブロックが多く混入する。厚さは通常30cm程度である。

Ⅱ層：文明降下軽石層（10YR黒褐2／3）

窪地遺構内に限って確認された。厚さは10～15cmである。砂粒大の軽石によって構成されており、硬く締まっているが、移植ゴテで削るとシャリシャリと崩れる。層中は、炭の小片が僅かに認められる。遺物は含まない。

Ⅲ層：高原スコリア層（10YR褐4／4）

窪地遺構内に限って確認された。厚さは10cm程度である。層は基本的にⅣ層と同じであり、層中に2mm以下の、褐色の粒子が中量含まれる。下層との境界は曖昧である。

Ⅳ層：褐色土層＝古代遺物包含層（10YR褐4／4）

窪地遺構内と、E区の南西端部の一角で確認された。厚さは20cm前後である。軟質で、粘性は僅かにある。層中には、阿多火砕流に伴う大小の角礫が少量混入する。古代の土師器、布痕土器が多く出土したほか、縄文後期土器の小片も多く認められた。

Ⅴ層：黒色土層＝縄文後・晩期遺物包含層（10YR黒褐2／3）

B区北部、C・D区の窪地遺構外、E区、F区から確認された。厚さは30cm前後であるが、東側住居群では50cm以上に及ぶ。硬く締まっており、粘性に富む。層中には、ガラス質の粒子を微量、阿多火砕流に伴う大小の角礫を少量含むほか、層下端の境界はアカホヤ火山灰の粒子が多く混入する。縄文後期の土器が多く出土したが、殆どが小片である。

Ⅵ層：窪地遺構底面堆積層＝縄文後・晩期遺物包含層（10YR黒褐2／3）

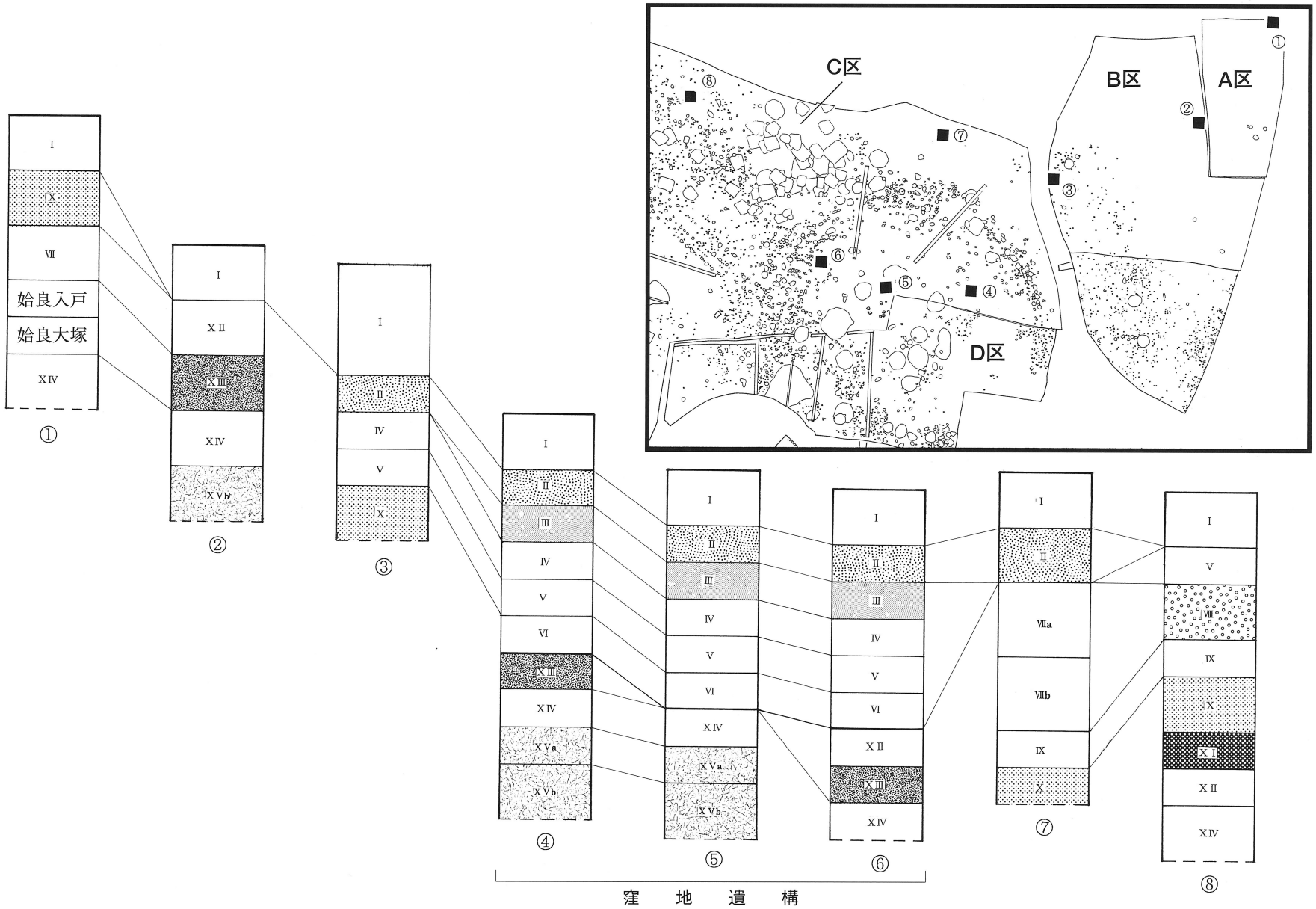
窪地遺構内で確認された。硬く締まっており、粘性に富む。層は、阿多火砕流や粘質土の粒子が若干多い以外、Ⅴ層と殆ど見分けがつかない。厚さは、窪地遺構中心部では30cmであるが、外縁では60cm近くあり、一様ではない。層中に、縄文後期後葉～晩期後葉の土器が多量出土した。

Ⅶa層：二次堆積層＝縄文後期遺物包含層（10YR黒褐2／3を基本とする）

堆積は、南東部土器廃棄場に限定される。層は、Ⅷ層の御池火山灰、ⅩⅡ層の縄文早期ローム、ⅩⅣ層の粘質土など、各種の小ブロックが混在した状況である。多くの層のブロックで構成されているため、土質は省略した。なお、層中には炭の小片や骨粉らしき白色粒子も多く検出された。それと共に縄文後期の土器・石器も多く出土したが、土器は小片であることが多く、Ⅶb層のような良好な残存状況を示すものはごく僅かである。また、土器は後期中葉の市来式以降を主体とする。

Ⅶb層：二次堆積層＝縄文後期遺物包含層（10YR黒2／1）

堆積は、南東部土器廃棄場に限定される。硬く締まっており、粘性に富む。層中には、ガラス質粒子が少量混入する程



第１図　本野原遺跡土層柱状模式図

度である。また、宮之迫2式から本野原式に至る土器が膨大な量出土した。多くは小片であるが、極めて残存の良好な個体も多い。

Ⅷ層：御池火山灰層（10YR黒褐2／3）

B区北端部、E区の南西端部、C区北東部で確認された。厚さは、B区やE区では20cm程度だが、台地北部ほど厚く、C区北東部の斜面では30～50cmに及ぶ。層は硬く締まっており、粘性に富む。層中に、1～2mm大の軽石が多量含まれるほか、スコリアや炭の小片も少量含む。

Ⅸ層：黒色土層（10YR黒2／1）

A区、B区南部、C区中央部、C・D区の窪地遺構内を除いた全面で確認された。厚さは10cm程度と薄い。軟質であり、粘性に富む。層に混入物は認められず、遺物も含まれない。

Ⅹ層：アカホヤ火山灰層（10YR明黄褐5／8）

A区西部、B区南部、C区中央部、C・D区窪地遺構内を除く全面で確認された。厚さは15～30cmである。軟質で粘性あり。乾燥するとサラサラと崩れる。層中には、ガラス質の粒子を多く含む。遺物は認められなかった。

ⅩⅠ層：牛のスネローム層（10YR黒2／1・黒褐2／3）

A区西部、B区南端、C区中央部、C区窪地遺構内を除く全面で確認された。厚さは一定して20cm程度であった。層は黒2／1を基調としながら、黒褐2／3が入り、斑紋を形成する。極めて硬く、粘性に富む。層中には、1cm大の白色粒子、2mm大のスコリア、ガラス質の粒子をそれぞれ少量含む。遺物は認められなかった。

ⅩⅡ層：縄文早期ローム層＝縄文早期遺物包含層（10YR黒褐2／3）

A～C区のみ堆積の有無を確認し、C区の窪地遺構中心部を除く全面で確認された。堆積は一定して約50cmである。層は硬く締まっており、粘性に富む。層中には、1mm以下の白色粒子を少量、ガラス質粒子を微量含む。遺物は、A・B区では早期中葉の桑ノ丸式、押型文土器、後葉の妙見式が、C区では早期前葉の前平式、加栗山式が出土した。

ⅩⅢ層：小林降下軽石層（10YR褐4／4）

窪地遺構内や台地北端部の急斜面で堆積を確認したが、C区北部の遺構壁面では確認されなかったため、台地北部では欠落しているようである。ただし、台地北端部の急斜面から、僅かに堆積が認められた。層は非常に硬く締まっているが、堆積は10cm程度と薄く、層状と言うよりも、拳大のブロックが、粘質土中に広がった状態である。そのためか、一般に宮崎県内で確認される小林降下軽石よりも色調が明るく、粘性に富む。層中は、ガラス質粒子が混入するが、遺物は認められなかった。

ⅩⅣ層：粘質土層（10YR褐4／3）

窪地遺構中央部と、C区北部の遺構壁面で確認できた事から、少なくとも台地東側全域に堆積する層と考えられる。堆積は、窪地遺構内では10cm前後に留まるが、C区北部では30cm以上に達しており、南側により分厚くなる傾向が見られる。層は硬く締まっており、粘性に富む。層中に、ガラス質粒子を少量、白色粒子を微量含む。遺物は認められなかった。

なお、A区北東部壁面では、層中にオレンジ色の帯が2本確認された。古環境研究所の分析の結果、上は姶良入戸火砕流、下は姶良大塚火山灰であることが分かった。層の広がりは、A区北東部壁面の一角に限定されるため、基本層序には含めなかった。なお、C区北東部の斜面上からは、流出した姶良入戸火砕流または姶良丹沢火山灰が、粒子として確認されている。

ＸＶa層：阿多火砕流漸移層（10YR褐4／4）

C区において10cm前後の堆積を認めたが、D区では確認できなかったことから、堆積は調査区東部に限定されるようである。層は粘性に富み、硬く締まっているが、風化すると至って軟質である。層中に、ガラス質粒子を中量含む。

ＸＶb層：阿多火砕流（10YRにぶい黄褐5／4）

B区南壁、窪地遺構中央部、台地北端の断面から確認された。堆積は南側ほど厚く、２ｍ以上に達している。層は粘性が僅かにあり、硬く締まっているが、風化すると非常に軟質となる。層上位には、火砕流により巻き上げられた角礫が多く含まれる。このほか、ガラス質粒子も多量確認された。

ＸＶｂ層以下は、調査区内では確認されていないが、露頭より礫層の堆積が認められた。以上の土層から堆積状況を復元すると、以下の通りとなる。

1・11万～10万5千年前[1]、礫層により形成される台地に阿多火砕流が分厚く降灰する（ＸＶb層）。この時、巻き上げられた礫は層上位に広がる。
2・阿多火砕流漸移層（ＸＶa層）、及び粘質土層（ＸⅣ層）が形成される。粘質土層は、台地北側ほど分厚く堆積する。なお、この層の形成中に、古い方から鬼界葛原火山灰、姶良福山火山灰、霧島イワオコシ、霧島アワオコシ、姶良深港火山灰、姶良大塚火山灰、姶良丹沢火山灰が降灰する。しかし、姶良深港火山灰までは全て調査区外に流出したと思われる。また、姶良大塚火山灰等も、A区北東の一角を残して流出する。
3・約１万６千年前、小林降下軽石（ＸⅢ層）が降灰する。下層の影響を受けたためか、一般的に知られる小林降下軽石より色調が明るい。なお、当初は調査区全面に堆積したのであろうが、C区北側は流出する。
4・早期ローム層（ＸⅡ層）が形成される。
5・約7,400～8,300年前、霧島嫁坂軽石の降灰により、牛のスネローム層（ＸⅠ層）が形成される。
6・約6,300年前、鬼界カルデラを起源とするアカホヤ火山灰（Ｘ層）が調査区全体に降灰する。
7・アカホヤ火山灰の上位に黒色土（Ⅸ層）が形成される。
8・約4,200年前、御池火山灰が降灰（Ⅷ層）。ほどなくして、尾根上に積もった火山灰は東側の斜面に流れたため、斜面上に分厚く堆積する。
9・縄文中期後葉に出現した集落が末葉に拡大。窪地遺構の構築が始まる。遺物の一括廃棄も併行して行われる（Ⅶb層）。
10・縄文後期中葉、土器の小片と共に窪地遺構外側の堆積が進む（Ⅶa層）。
11・縄文後期後葉～晩期にかけて、窪地遺構内に遺物包含層が形成される（Ⅵ層）。
12・９～11に併行して、窪地遺構外に遺物包含層が形成される（Ⅴ層）。
13・窪地遺構内を中心として、古代の遺物包含層が形成される（Ⅳ層）。
14・10～13世紀、高原スコリアが降灰（Ⅲ層）。
15・1471年、文明降下軽石（Ⅱ層）が降灰。
16・開墾により、腐植土が耕作土となる。高さを整えるため、削平や盛土が顕著に行われる。

本野原遺跡の立地する台地の基本層序の特徴は、南九州一円に分厚く降灰し、台地の基盤となる姶良丹沢火山灰層が、流失し殆ど残らないことである[2]。概要報告では、この堆積を本野原台地特有の傾向としたが、比較的平坦な高野原台地でも、同様に姶良丹沢火山灰の欠落が認められ[3]、別府田野川対岸の中渡瀬地区も、阿多火砕流中が40～60cm堆積する一方で、姶良丹沢火山灰は完全に消失していた[4]。元野地区の姶良丹沢火山灰の堆積は、二次堆積や、谷の埋没層中で確認されることが殆どである[5]。よって、台地上における姶良丹沢火山灰の消失は、田野盆地西南部一帯の一般的傾向と理解すべきであろう。

なお、10～12の、人為的削平に伴う堆積状況は、第Ⅶ章　検出遺構の項で説明したい。

(註)

1：『田野町文化財調査報告書　第48集　本野原遺跡一』では、阿多火砕流の年代は9万5千～10万としたが、ここでは、「新編　火山灰アトラス」の表記に従った。

2：逆に言うなら、阿多火砕流が残存していることも特徴と言えよう。田野町北東部にあたる鹿村野地区では、姶良丹沢火山灰以下は礫層→宮崎層群となり、旧期テフラ及びその間層は全て消失していた。

3：隣接する高野原遺跡Ｅ～G区において姶良丹沢火山灰と説明した火山灰層は、実際は阿多火砕流であった。ここに訂正したい。

4：平成12年に、一帯の試掘調査が行われた際に確認された。

5：二次堆積＝元野河内遺跡C・D区、谷の埋没層＝黒草第２遺跡ａ区

第Ⅲ章　土器型式の設定

本野原遺跡を考察するにあたり、集落の変遷は不可欠である。そのためには、遺構の構築時期を推定する必要がある。

本来ならば、遺構の切り合いと、遺構内出土土器を基に作業を進めるべきだが、本遺跡では、覆土による前後関係の把握が極めて困難であったため、土器に力点を置かざるを得ない。ところが南九州では、縄文中期後半～後期末葉の土器編年は未だ不充分な状況である。故にここで土器群を再編し、必要ならば型式設定を行いたい。なお、考察するに当たっては、これまで南九州で調査された出土土器も踏まえたい。

第１節　岩崎式・綾式土器を巡る諸問題

１・岩崎式・綾式土器研究史

第Ⅰ期（1916～1952）

綾式の標識遺跡である尾立遺跡が初めて調査されたのは1916年である。この出土土器は、指宿市指宿遺跡（現橋牟礼川遺跡）の報告の際に、一部が類似資料として掲載された。報告を行った浜田耕作氏は、二遺跡の出土土器が類似していると述べた上で、「指宿下層式」と命名した。たしかに類似する資料も含まれるが、掲載された土器の大半は、今日では指宿式に先行する資料である（**浜田・島田　1921**）。

1939年、小林久雄氏は、九州の縄文土器を考察する上で、綾村尾立遺跡の出土資料を分類し、貝殻腹縁刺突を行ったものを綾村B式、行わないものを綾村A式とした。小林氏は、浜田氏の設定した指宿下層式は綾村A式であり、阿高式よりも相当後出の、指宿式の影響を受けた土器とする一方、綾村B式については、器面に認められる貝殻腹縁刺突を擬似縄文とし、加えて焼成が良好であるため、磨消縄文系土器の影響を受けた土器とした（**小林　1939**）。

第Ⅰ期は、九州における縄文研究の黎明期にあたるため、同一型式の範疇が広いなど、まだ粗い印象を受ける。その中にあって、小林氏が綾村式を理解する際に用いた在地的要素と外来的要素は、綾式土器に留まらず、九州の縄文研究の基本概念となった。

第Ⅱ期（1953～1964）

1953年、河口貞徳氏によって岩崎遺跡の調査結果が公表された。河口氏は、第二層出土土器が下層と上層で異なる点に着目し、口縁部における波状の切り込みや把手状の突起からの平口縁化、文様における頸部凹線文の消失と曲線文化、胎土における雲母の喪失等を挙げ、前者を岩崎下層式、後者を岩崎上層式と設定し、これを同系統における前後関係と位置付けた。また、上層の土器は、磨消縄文と共伴関係にあることや、型式内容の類似から、指宿式土器への変遷を想定した。河口氏が提示した岩崎下層式は、口縁部直下が凹点状を呈する一方で、胴部の施文は細沈線によって構成されるなど、今日的視点に立った岩崎式の典型例とはかなり異なるものである。一方、岩崎上層式も、入組文の存在から、今日では指宿式の一種に含まれるものであろう。ともあれ、この論文で、岩崎式の骨格は完成したと言える（**河口　1953**）。

河口氏は、2年後、岩崎下層式と阿高式が多くの点で類似することを指摘し、岩崎下層式を中期後葉、岩崎上層式を後期初頭とした（**河口　1955**）。更に1957年には、有明海地域と大隅地域の土器型式を纏めた有名な編年案が提示された。内容は下記の通りである（**河口　1957**）。

南福寺式 —— 出水式
阿高式　<　　> 市来式 — 草野式 — 黒川式
岩崎下層式 —— 岩崎上層式 — 指宿式
中　期　|　後　期　|　晩期

1962年、田中熊雄氏は綾町尾立遺跡の調査結果を発表した。田中氏は小林氏の見解を吟味し、綾村Ｂ式の焼成が必ずし

も良好ではないと述べている（**田中　1962**）。

第Ⅱ期は、九州の縄文土器研究が飛躍的に進んだ時期である。岩崎式も、河口氏を中心に次々と論考が発表され、短期間で目覚ましい進展が見られた。岩崎式の基本的枠組みは、この段階で既に完成の域に達した感がある。

第Ⅲ期（1965～1981）

1965年、渡辺誠氏は、綾町尾立遺跡出土土器を観察し、綾B式の成立は瀬戸内より福田K２式が直接伝播し、綾A式と接触した結果であるとした。綾式土器の解釈は小林久雄氏のそれと同じであるが、磨消縄文系土器の広域伝播と言う視点を踏まえた意義は大きい（**渡辺　1965**）。

1966年、前川威洋氏は、修士論文において、磨消縄文系土器との相関を認めながら、岩崎下層式を阿高式の後続関係に置き、岩崎上層式を小池原貝塚下層土器や南福寺式と共伴とした一方、綾式については、A式とB式の差異は少ないと一括し、指宿式に併行する宮崎県央平野部の土器とした。更に、九州を包括した編年表を提示し、土器型式の推移を概観している（**前川　1966**）。前川氏の説は、乙益重隆氏との共著によって、広く知られる事になった（**前川・乙益　1969**）。

前川氏の説を更に発展させたのは田中良之氏である。田中氏は、細かな属性分析を通し、Ⅱ式まで東九州を除く九州全域に分布した阿高式が、西北九州外海部は坂ノ下Ⅰ式、南九州東部は岩崎下層式に分解するとした。この説は、九州の縄文中期を理解する際の礎となった（**田中　1979　1981**）。

第Ⅲ期は、岩崎式そのものというよりも、阿高式や磨消縄文系土器との関係が脚光を浴びた。これは、当時良好な遺跡が調査されなかったことも一因しているのであろう。

第Ⅳ期（1981～　）

1981年、末吉町教育委員会から宮之迫遺跡の報告書が刊行された。出土土器の施文は多くのバリエーションが認められた。これらの土器群について、報告書では岩崎式、阿高式、出水式、綾式に類似するものに分け、当時の土器群のあり方は複雑であったとしている。中でも岩崎式は多種多様であったため、これまでの基準では分類不可能な個体が多かった。（**末吉町教育委員会　1981**）。

続いて1985年には、志布志町教育委員会から中原遺跡の報告書が刊行された。出土土器の殆どは後に指宿式とされる一群であったが、凹線文が密集する土器も一部含まれている。調査を担当した新東晃一氏は、それらをⅡ類とし、更に３細分した。特筆すべきは、細沈線化と平行沈線化が進行したⅡＢ類を、擬似縄文等は認められないものの、磨消縄文系土器の影響と述べていることである（**志布志町教育委員会　1985**）。

新東晃一氏は、宮之迫遺跡、中原遺跡から得られた成果を、1988年の考古学ジャーナル紙上で纏めている。新東氏は「太型凹文」が胴部下半まで行われ、無文部に粗い条痕文を残した宮之迫遺跡出土土器を「宮ノ前式土器（仮称）」とし、口縁直下に貝殻刺突文を巡らせ下位に太型凹文を行うものを「（仮称中原土器）」とした。型式の変遷は一貫しており、正式な型式設定に至らなかったことは惜しまれる。もう一点、「東南沿岸部の大隅半島においてはかなり早い段階において在地型の阿高式系土器に変化していることが判明した」と、田中氏とは異なる編年観を示唆していることも重視されよう（**新東　1988**）。

1989年、松永幸男氏は、田中氏の属性分析を南九州の土器にも行い、岩崎下層式･上層式を「ローカルな阿高式系土器」と定義付けた上で、阿高式から情報伝達が円滑に行われなくなったために派生した岩崎式が、田中氏が阿高―中津式間で想定したような精粗土器の受容差を構築することはなかったとした。そして、岩崎下層式から指宿式への変遷は、レベル差を構築することなく、ポリセティックに磨消縄文系土器を受容した結果とした（**松永　1989**）。

1993年、水ノ江和同氏は、九州における磨消縄文系土器の波及を論じる中で綾式土器についても触れている。意義深いのは、それまで貝殻腹縁刺突が行われてきたもの全てを綾Ｂ式と呼称していたが、文様モチーフや施文部位や文様構成において明らかに宿毛式の影響を受けたと考えられる資料を「中原ⅣＢタイプ」とし、時期差を見出したことである。また、これまで指宿式とされてきた、山川町成川遺跡で出土した一群を「成川タイプ」とし、阿高系土器の系譜上に位置付けたことも特筆される（**水ノ江　1993**）。

1994年、徳永貞紹氏は、新東氏の説を更に発展させ、並木式の成立や併行時期について論じた際に、並木式と大平式の分布差を指摘した上、大平式の分布域からは典型的な阿高式の出土がないことにも触れ、大平第Ⅰ類（並木式併行）→宮

ノ前式（阿高式併行）→岩崎下層式という編年観を提示した（**徳永　1994**）。

1996年、三輪晃三氏は、宮之迫遺跡の出土資料を１～３段階に細分し、宮之迫1段階を、大平式に後続し、阿高式の初源期（１期）と併行関係にあるとした。これは、新東氏と徳永氏の主張を具体化させたことになる。また、成川遺跡出土土器について、水ノ江氏の概念を踏襲し、説明を行った（**三輪　1996**）。なお、三輪氏はその後、成川タイプを「成川Ｋ式」と設定、岩崎下層式に併行すると共に、岩崎下層式と指宿式の移行的型式とした（**三輪　1998**）。三輪氏の著した二本の論文は、土器型式を再構築した意味で、大きな成果があった。ただ、提示された資料が少なかったため、一般化が困難であったのは惜しまれる。

2003年、山崎真治氏は、西日本全般の縁帯文土器を包括した論考を発表した。南九州の項目では、南郷町崩野遺跡に注目し、出土土器について、沈線を密に何本も重ねるものと、二本の併行沈線を基本とする、磨消縄文系土器の影響を強く受けたものの二者があることを指摘し、前者を岩崎上層式、後者を中原ⅣＢ群とし、後者は小池原下層式（古）の影響が見られるとした。また綾式を、小池原下層式の系統であると共に岩崎上層式の祖型の一つであるとした（**山崎　2003**）。

同年、荒木隆宏氏は、阿高式の文様帯に注目し、１～３式に細分した。岩崎式の観点から注目すべきは、宮ノ前式は阿高1式に、岩崎下層式は阿高2式に、岩崎上層式は阿高3式に、それぞれ併行関係するとした事と、阿高３式と中津式を併行関係とした事である（**荒木　2003**）。

第Ⅳ期は、岩崎式＝阿高式の派生型式という、旧来の先入観に捕らわれない論考が多く登場した。これは、志布志湾沿岸の調査成果が影響しているのは言うまでもない。

２・問題点の抽出

岩崎式の編年的位置は、分布的観点から、阿高式併行が妥当であろう。最大の問題は、土器論の洗練が不足している点である。既に述べた通り、河口氏の岩崎下層式・上層式の概念は、今日の調査成果には対応できない。また、その後に設定を行った新東氏や三輪氏の細分も、上述の理由から一般化には至っていない。つまり、これまでの成果を反映し、かつ多くの事例を参考に、型式設定を行う必要がある。

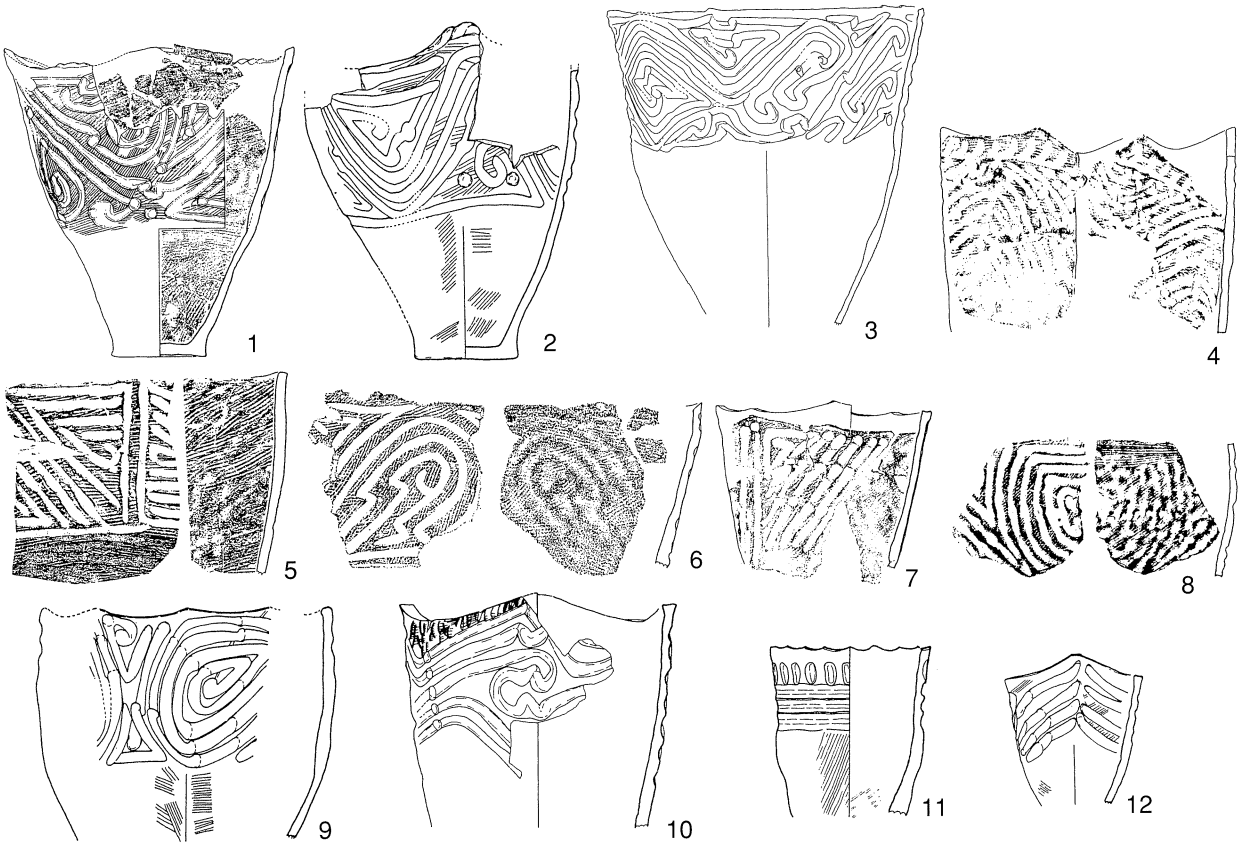
３・分類

本書は、宮之迫遺跡の出土資料を基準とする。時期に直すと、三輪氏の提示した第３段階を二分し、４つの段階を提示したい。また、それぞれの資料は一定のまとまりが認められるため、「段階」ではなく、宮之迫１式、２式…とそれぞれ呼称する。なお、型式の内容が後続型式に対し隔たりのある１式以外は、文様の変遷が系統付けられるものが多いため、これを「群」という概念の基に括った上で、型式の流れを説明したい。

宮之迫１式（第２・３図）

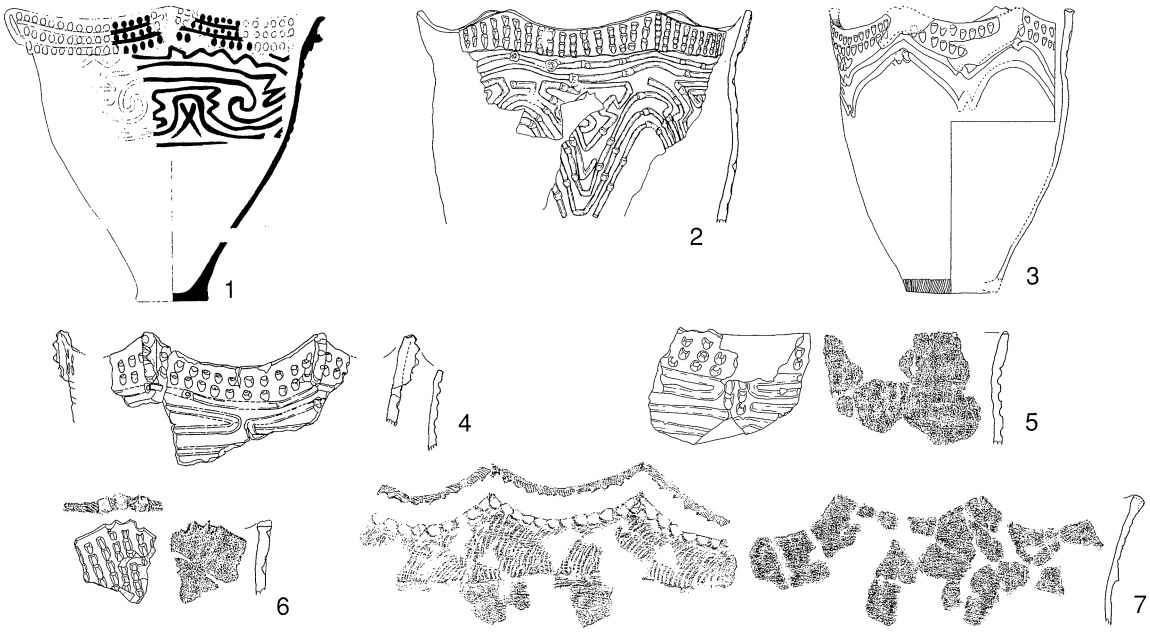
新東氏がかつて宮ノ前式（仮称）や、三輪氏が宮之迫１段階とした一群である。口縁部文様帯を殆ど持たず、下端線を持つ文様帯に、凹線が密に施文されるものである。凹線は内面の調整をほぼ終えた状態で行うため、外面の施文が内面にまで浮き出ているものが多い。文様モチーフの多くは渦巻文であるが、渦巻の区画は第２図１・２・５・６・９のように三角形を呈するもの，３のように三角形と菱形により構成されるもの、４のように不明なものがある。渦巻文は規格性に乏しい。なお、中には７のようにただ右上がりの波状を描く凹線が巡るものもある。また、11は凹点の下位を平行凹線が数条巡るが、これも凹点や凹線から１式と認識した。口縁部形態は、平口縁は少なく、幾つかの単位を持ちながら軽く波状を呈するものが多い。なお、１・２のように波頂部、波低部に突起が貼り付けられるものも見られる。また、４・10は口縁部に貝殻腹縁刺突や凹点が行われるものも、僅かであるが含まれるようである。

なお、第３図の土器も1式と認識したい。この型式のメルクマールは、口縁部に肥厚帯を設け、凹点が数列行われるものである。中には、５・６のように肥厚帯を形成しないものもある。また、肥厚帯中には凹点が横位に行われるものや、３・７のように、沈線や貝殻腹縁刺突を行うものもある。このほか、肥厚帯の下位が鋸歯状になるよう、凹点を行うものもある。口縁部の施文には多くのバリエーションがあるが、凹点が内面に影響しなかったり、凹点が沈線化したり、貝殻腹縁刺突が１列、等間隔で施文されるようになると１式よりも後出であると考えている。胴部文様は第２図と大きく変わ



第2図　宮之迫1式（1）

上牧第2：1・7・10，宮之迫：2・4・8・9・12，崩野：3，倉園A：5・11，右葛ヶ迫：6



第3図　宮之迫1式（2）

宮ノ前：1，上牧第2：2，白ヶ野第2・第3：3・5～7，右葛ヶ迫：4

らないが、１や４のように沈線が若干細いものもある。なお、１式は平口縁であることは稀であり、大抵は波状である。また、６単位の波状口縁が多いのも特徴といえる。この口縁部肥厚帯は、何から影響を受けたのかは不明である。

宮之迫２～４式

Ａ群（第４図）

波頂部下位、若しくは一定間隔で渦巻文を形成する一群である。文様の源流は宮之迫１式の渦巻文に系譜を求めることができる。施文は凹線よりもやや細いものから、通常の沈線まである。口縁部は幅狭の無文帯、もしくは貝殻腹縁若しくは連点による刺突が巡り、その下位の渦巻文はくびれ部の下半部より下位に及ぶものは稀である。渦巻文は一筆書きであり、入り組みを形成するものはない。渦巻間は平行する沈線が連絡するが、渦巻が大きかった場合、渦巻による沈線が流れない空白部に、２にあるように三角形の区画を行うものもある。なお、渦巻は時期が下ると共に11・12・21のように圧縮される傾向にある。３式以降は、９～11のように、渦巻文に共通する二本の平行沈線を、貝殻腹縁刺突で充填するものも認められる。一方、15・16のように渦巻が小さく、下位に沈線が数条、渦巻文の影響を受けずに施文されるものもある。この２点は口縁直下に肥厚帯ではなく刻目を有する隆帯が巡っている。この2点はえびの市の遺跡であることから、Ａ群は山間部ではやや異なる変化を遂げたと考えられる。Ａ群に見られる渦巻文は、後続する本野原式にも一部認められるが、その渦巻文はＡ群とは隔たりがあるため、直接後続したものではないようである。

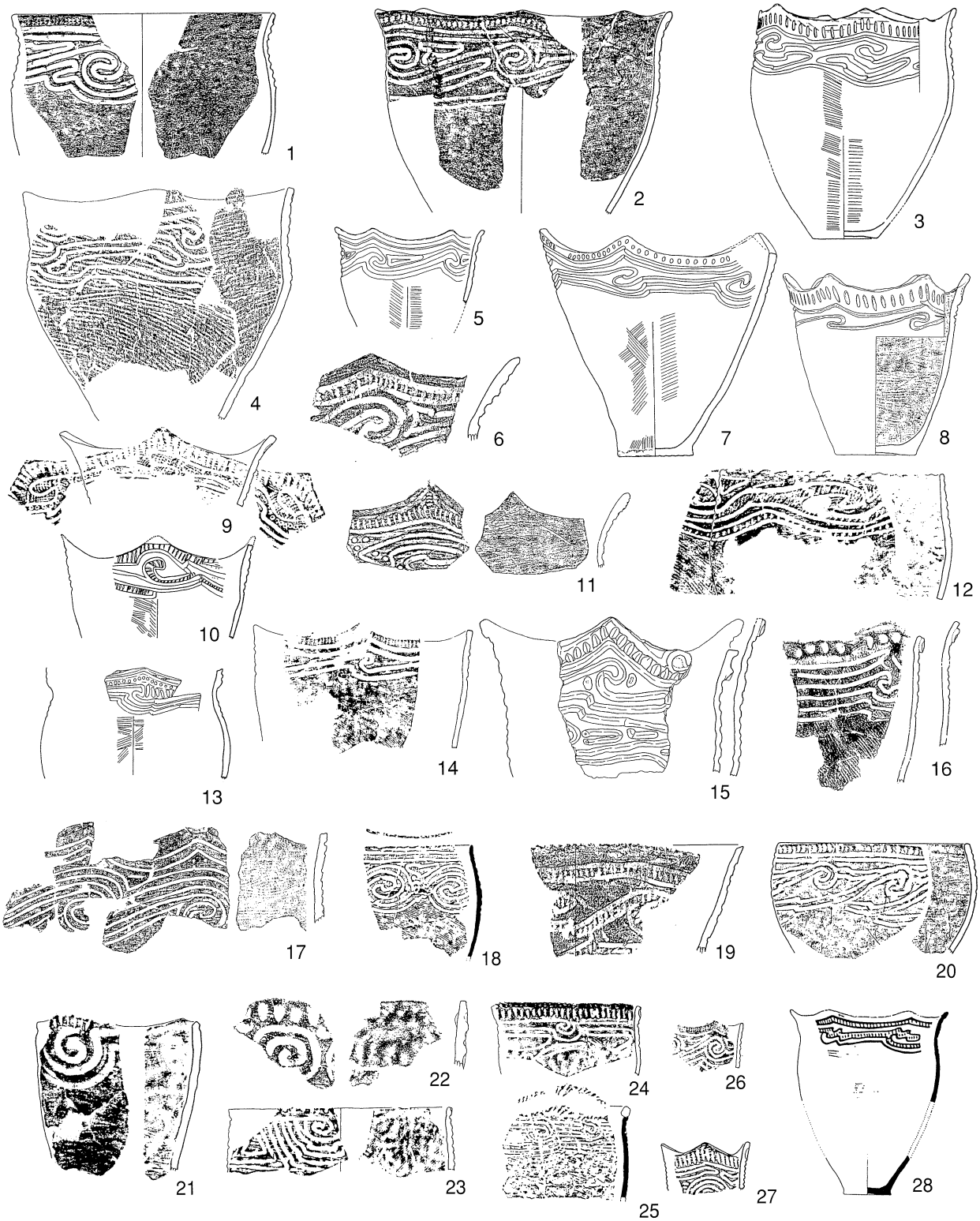
17以下は、渦巻文の中でも傍流に位置付けられるものである。17は、渦巻上位の沈線が通常よりも多いものである。18・28は、綾B式の標識資料とされた土器である。渦巻間の空白の埋め方がやや独自であり、渦巻も変形しているが、モチーフはＡ群が最も近いと判断した。なお、これらの資料が出土した尾立遺跡は、宮之迫式が主体的に出土する地域より北に外れているため、このように変容したと考えられる。19・20は蕨手状の渦巻文を行う一群である。21・23は口縁部文様帯を置かない点で宮之迫1式の可能性も考えられるが、沈線の太さからこの類に含めた。

Ｂ群（第５図）

右上がりの波状沈線が斜位に展開する一群である。文様の源流は宮之迫１式にはなく、恐らくＡ群から渦巻文を消失することで成立したと考えられる。口縁部の径は大きいものが多く、口縁部で僅かにくびれ、胴部がやや膨らむ。平口縁が多い。口縁部は貝殻腹縁刺突が主体であり、口縁部と胴部の間は、沈線により区画されるものが多い。その区画線と、最上列の波状沈線の間は三角形の空白部が生じる。Ａ群にも共通するが、その空白に三角形の区画を行うものは古い傾向といえる。３式以降は、凹線が沈線化すると共に平行沈線化が進む。３式の後半は、平行沈線を貝殻腹縁刺突によって充填するものも現れる。また、11・15のように、波状沈線が小さいものも一部存在する。この類は、凹線の沈線化と共に、宮崎平野や志布志湾から姿を消す。しかし南薩では根強く残存し、後に発生する成川Ｋ式の基盤となった。

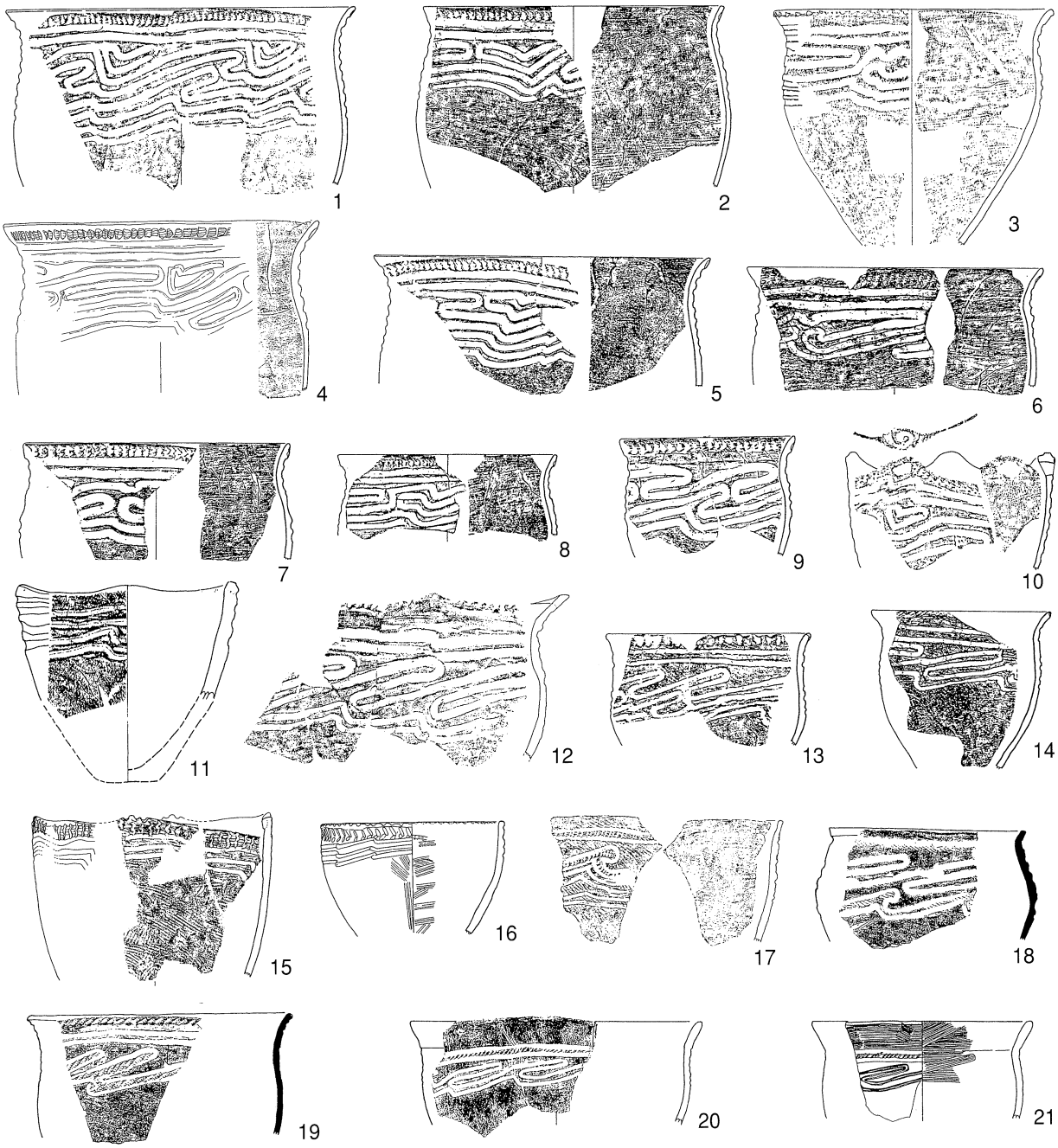
Ｃ群（第６図）

菱形、若しくは三角の文様が横位に展開する一群である。平口縁が少なく、波状若しくはさざなみ状を呈するものが多い。口縁直下は貝殻腹縁刺突、若しくは連点を行うこともあるが、口唇部刺突による鋸歯状口縁も多い。文様は、宮之迫１式の主体を占める渦巻文に由来すると考えられる。１はＡ群の渦巻文にも類似するが、渦巻が未発達であるためこの類に含めた。また、10～14は三角形のモチーフが施文されたものである。２・５・８・９は菱形モチーフを基本とする。３・６・７も菱形区画文を行うが、菱形の頂点ないし上下の突出部は、東北九州のコウゴー松式の文様構成に認められる、菱形モチーフ＋Ｊ字文が変形した突出部に類似しており、それがＣ群土器と融合し成立したと考えられる。この一群は、モチーフを描出するために多くの沈線を必要としたためか、沈線文化がいち早く行われたようである。それと共に、４・８・13・14のように貝殻腹縁の擬似縄文化も進行し、やがては沈線の本数も疎らになる。この一群は、主に宮崎平野や志布志湾を主体に分布するが、沈線の過疎化に対応できず、徐々に出土量を減らし、本野原式まで後続することなく４式で終末を迎えたと考えられる。



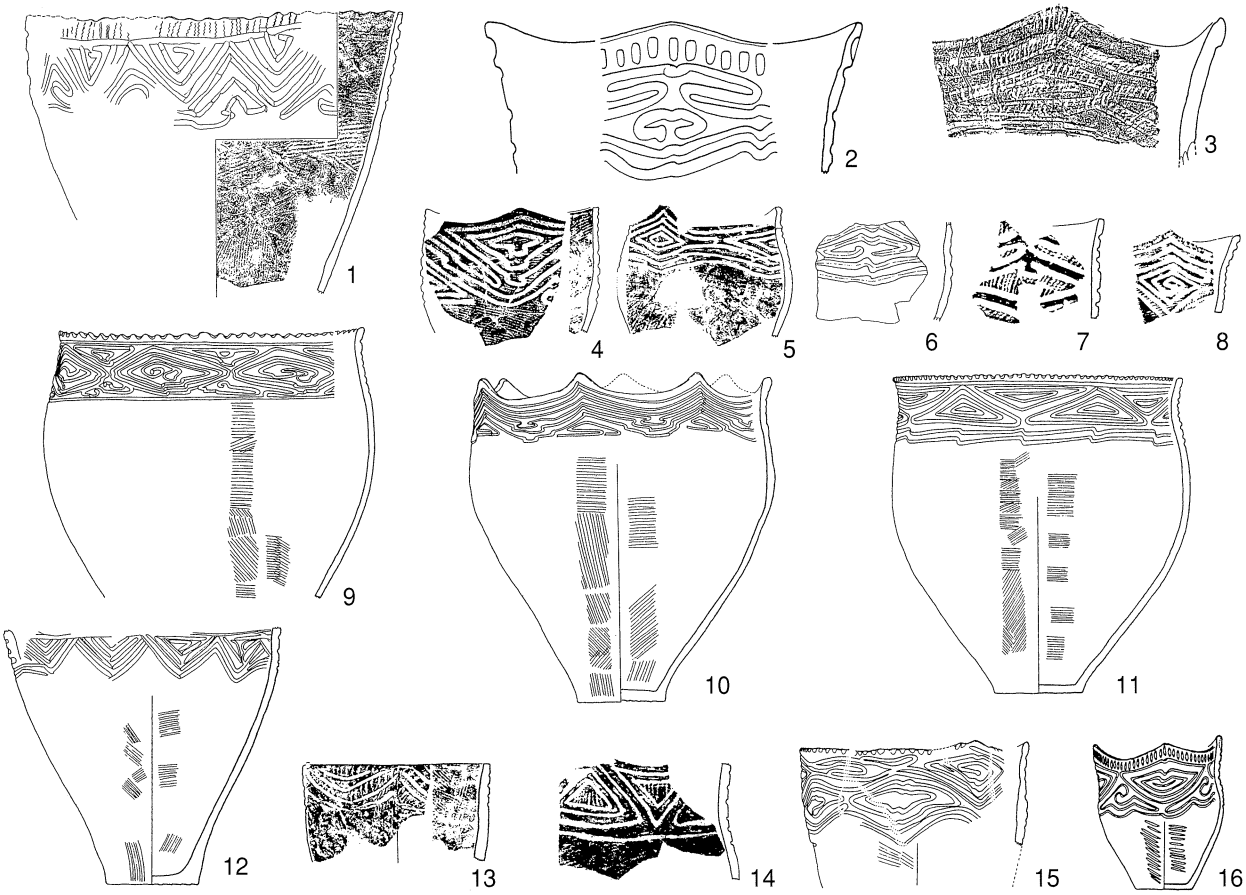
第４図　宮之迫２～４式（Ａ群）

中原：1・2・20・27，宮之迫：3・5・7・9・10・12～14・21・23・24・26，中ノ原：4
尾立：6・18・19・25・28，崩野：8・11・17，上田代：15・16，橋山第１：22



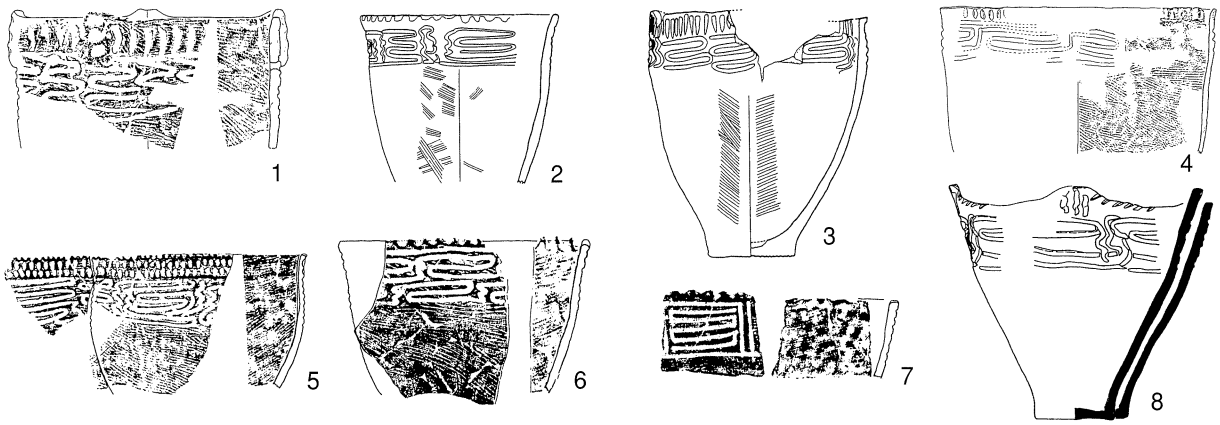
第５図　宮之迫２～４式（Ｂ群）

中原：1・2・5～10・13・14，中ノ原：3，崩野：4，青木：11，野久尾：12
右葛ヶ迫：15，宮之迫：16，海蔵寺：17，武貝塚：18・19，上田代：20・21



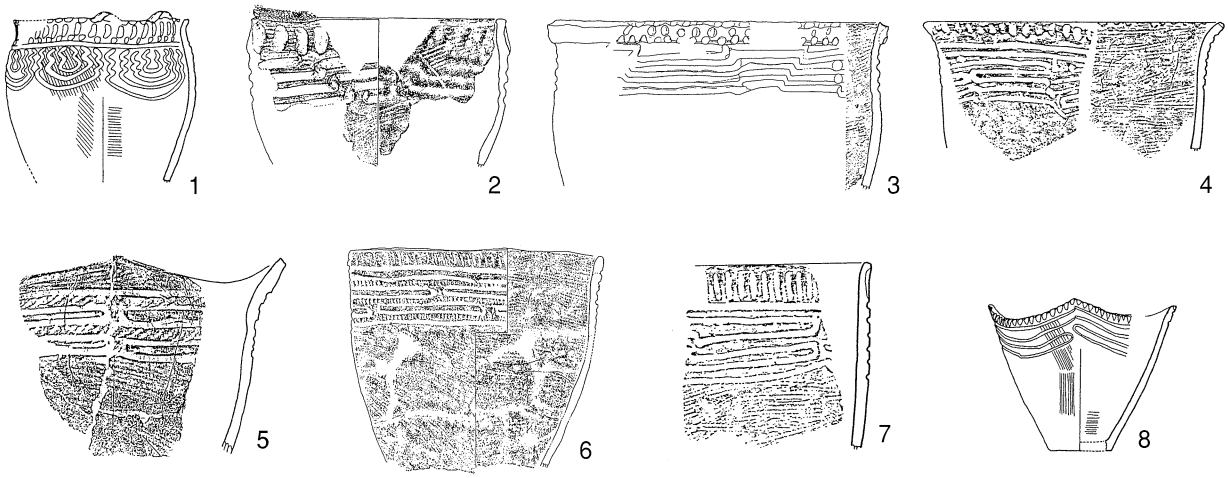
第6図　宮之迫2～4式（C群）

崩野：1，宮之迫：2・4・5・7～16，尾立：3，上田代：6



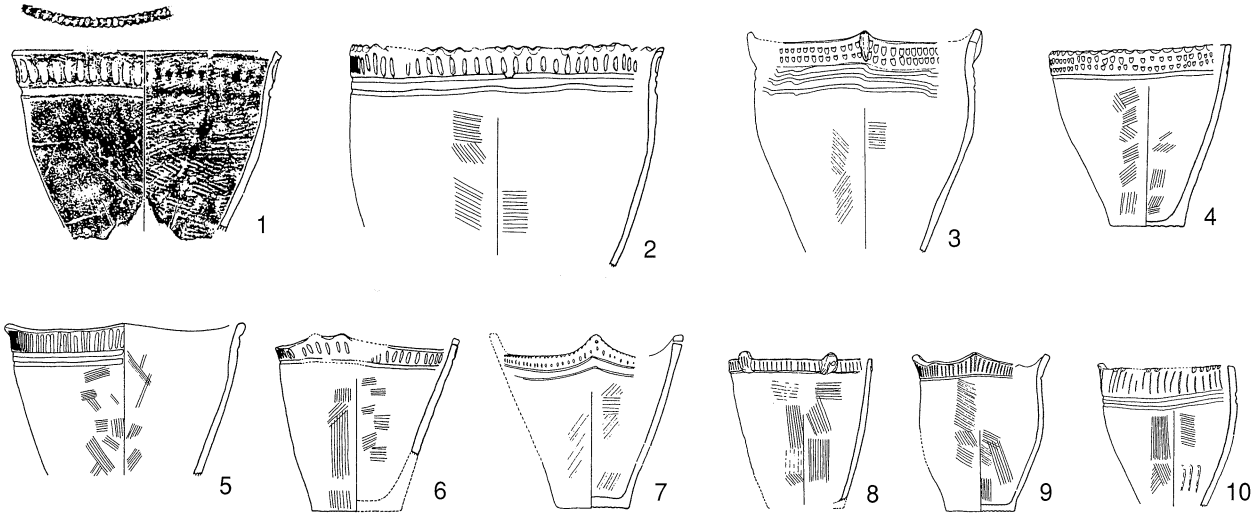
第7図　宮之迫2～4式（D群）

榎木原：1，宮之迫：2・3・5～7，崩野：4，武貝塚：8



第8図　宮之迫2～4式（E群）

宮之迫：1・8，崩野：2・3，中原：4・7，尾立：5，丸野第2：6



第9図　宮之迫2～4式（F群）

橋山第1：1，宮之迫：2～10

D群（第7図）

S字状の文様が連続的に横位に展開する一群である。文様の源流は宮之迫1式の第3図1に見られる、左右に大きく揺れる垂下沈線と思われる。口縁は平口縁が圧倒的に多い。器形は寸胴形のものが多く、頸部がくびれるものは少ない。1は口縁部に凹点が巡り、4単位で縦位の刻目を伴う突帯が貼り付けられるものであるが、このような口縁部はごく僅かである。2・5は幅広と幅狭のS字状文が一列毎に行われるものである。2は口縁部の刺突列はなく、口唇部に刺突による刻目が行われ、僅かに鋸歯状を呈するのみである。5は口縁部に肥厚帯があり、連点が2列，口唇部にも1列行われる。3はD群初期の典型的な文様構成であり、刺突列下位のS字状文の一つ一つが独立しており、一定間隔で施文される。D群は、3式以降S字の区画が崩れ、4・6のように周辺の区画と融合する傾向にある。3の文様構成は中九州～西九州に分布する南福寺式に類似するほか、7は東北九州に分布する西和田下層式にも類似していることから、この類はそれら周辺の土器との関わりを示している。しかし、このモチーフは貝殻腹縁による擬似縄文化に対応できなかったためか、平行沈線化と共に、数を激減させる。

E群（第8図）

横位の平行沈線を基本とし、一定間隔で沈線が上下し、モチーフを形成する。器形は寸胴形の深鉢形であるが、口縁の外反や胴部の張り具合は一定しない。口縁は平口縁を主体とし、口縁直下には基本的に貝殻腹縁刺突や連点が巡る。この類の源流は1式の第2図5のように、渦巻文の上半部が胴部文様帯の区画によって消失しているものであったと考えられる。そのため、当初は1のような文様であったと予測されるが、2式の早い段階で2へと移行し成立したと考えられる。この類は、単純なモチーフであったために、沈線の過疎化、文様帯の縮小化の中でも恒常的に出土し続け、やがて4・7のように縦位の区画線が現れ、長方形が横位に展開する文様へと変化するようになる。このモチーフは、5・6のように貝殻腹縁による擬似縄文にも対応が可能であったため、細線化をとげながら存続することになる。この類は、宮崎平野と志布志湾で根強く残存する。ただ、時期の推移と共に器形、施文共にF群に接近する傾向にある。

F群（第9図）

口縁部に刺突列を持ち、その下位に横位の沈線が数条巡る一群である。口縁部は平口縁を主体とし、一部緩やかな波状を呈する。この土器は第2図11に源流を求めることができる。1の口縁部刺突は凹点であり、凹凸が内面にまで影響していることから、より古い土器と考えらえる。2は単位部に縦位の突帯が貼り付けられたものである。2・4は口縁部が軽く鋸歯状を呈する。口縁部の刺突は4が2列、2が1列である。5・6の口縁は緩やかな波状であり、口縁直下の刺突は短沈線状である。7の口縁部刺突は細い棒状工具で行われており、規模は小さい。8～10は貝殻腹縁刺突を行う。口縁直下の刺突は必ず行われるものの、時期が下るに従って凹点から連点へと次第に規模が小さく、施文も疎らになる傾向にある。この類は、恒常的に、そしてどの遺跡からも安定して出土する傾向が見られる。また、小さい口径や大きさ、器形はどれも類似する。これは、この土器が何らかの用途を伴っていたためと考えられる。

4・編年

第10図では、前述のA～F群を4段階に並べた。それぞれの段階をまとめ、ここで宮之迫1～4式土器として設定を行う。これを見ると、2式は1式以来の系譜である凹線の密集が残存するが、3式では沈線化が進み、施文が疎らになると共に、貝殻腹縁による擬似縄文化が進む。そして4式では文様帯が狭まり、沈線が更に細くなる、という変遷が想定できる。

宮之迫式の前段階には、徳永氏の指摘どおり、大平式が挙げられよう。しかし、大平式と宮之迫1式の間にはヒアタスが存在することから、阿高1式も深く関わったと考えられる。宮之迫式の施文部は、その後も阿高式と歩調を合わせて推移することから、両型式は分布域こそ異なるものの、密接な関係にあったと考えられる。しかし3式以降、B群が南薩や山間部で卓越する一方、C群以下が志布志湾や宮崎側に偏るなど、後に成川K式と本野原式に分化する兆候を認めることができる。なお、後半期に沈線化した原動力は、これまで多くの研究者に指摘されてきたように、磨消縄文系土器の影響であろう。本書では、影響が見られるのは宮之迫3式以降とした。これは、阿高式が磨消縄文化した時期にも対応している。また、宮之迫式の下限は、えびの市馬場田遺跡[1]や本遺跡から[2]、福田K2式で見られる突起を持つ宮之迫4式が出土している事から、福田K2式併行と考えたい。

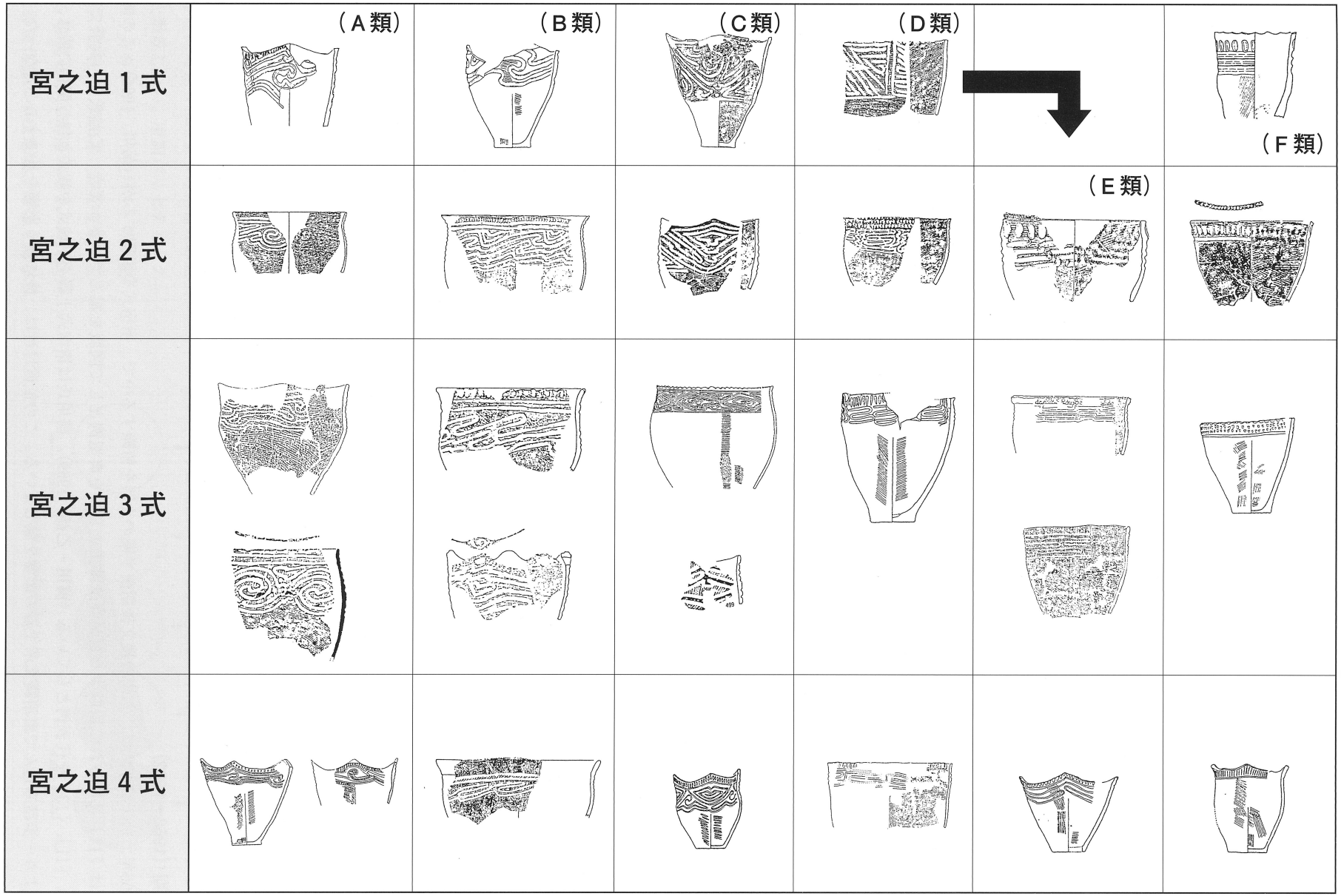
なお、標識となった宮之迫遺跡出土土器の文様は、上述の基準では分類不可能なほど多くのバリエーションを有する。宮之迫遺跡の立地する都城盆地一帯に、東西から様々な情報が入ってきたために起きた現象であろう。

5・課題

今回型式設定を行った宮之迫式は、文様の変化のみを根拠としており、層位的検討を一切伴っていない。そのため、当面は型式の変遷が層位的に把握可能な調査例が最も望まれよう。

また、宮之迫式の後半は、宮之迫3式－後期初頭－中津式併行、宮之迫4式－後期前葉－福田K2・宿毛式併行とした。しかし、これは中津式が九州へ伝播するまでの時期や、中津式から福田K2式への移行期を考慮していないため、今日的編年と比較した場合、まだ粗い印象を拭えない。今後は、更なる細分を試みる必要があろう。

もう一点、宮崎平野や日南海岸の宮之迫式のうち、貝殻腹縁刺突による擬似縄文を行うものの中には、文様モチーフが、



第10図　宮之迫式変遷予想図

明らかに中津式や宿毛式の影響を受けたものが存在しており[3]、宮之迫式に含めるには違和感がある。現時点では問題提起を行うに留めるが、類例が増加した段階で、中原ⅣB類との関係を見定めつつ分離するのが適切であろう。

(註)

1）：（**えびの市教育委員会　2002**）の、馬場田遺跡の89のことである。

2）：（**田野町教育委員会　2005**）の、2134のことである。

3）：大分県日田市教育委員会の、今田秀樹氏のご教示による。

第2節　指宿式土器を巡る諸問題

1・指宿式土器研究史

第Ⅰ期（1916～1951）

橋牟礼川遺跡は1916年に調査が行われた。浜田耕作氏は、成果を報告する中で、火山灰の下層から出土する土器を「指宿下層式」とした。その上で、綾町尾立遺跡出土資料との関連性に触れている（**浜田・島田　1921**）。

1939年、小林久雄氏は、この一群を綾村A式（指宿下層式）として説明を行い、阿高式より距離を置いて後出する土器型式との見解を示している（**小林　1939**）。1943年、寺師見國氏は、鹿児島の縄文土器を概観する中で、始めて指宿式の名称を用いている（**寺師　1943**）。

指宿式の標識である橋牟礼川遺跡は、縄文時代と古墳時代の層位的上下関係が初めて明らかとなった調査として意義が強調されたため、土器研究としては不十分な部分があった。また、浜田氏が指宿下層式との類似点を指摘した尾立遺跡の出土資料の大半や、小林氏の「綾村A式（指宿下層式）」、寺師氏の「指宿式」は、細めの沈線が胴部にまで及ぶもの一般を指していたために、今日では岩崎式、本書の宮之迫式の範疇に含まれる。

第Ⅱ期（1952～1957）

1952年、河口貞徳氏は、草野貝塚の出土資料を検討する過程で、指宿式の出土層位が市来式よりも古いことを発見し、指宿式→市来式の変遷を提唱した。また、型式学的検討も加え、指宿式の平行曲線文が平行線文となり、結節点や渦文部が爪形や点として残ることにより市来式に変遷するとした（**河口　1952**）。

河口氏は翌年、木ヶ暮遺跡の報告を行うなかで、指宿式の文様を抽出した。その上で、指宿式が岩崎式に後続することを確認し、岩崎式→岩崎上層式→指宿式の変遷を想定した（**河口　1953**）。以後河口氏は、この時掲載した3（以下「3」とする）と4（以下「4」とする）の2点を、指宿式の代表例として、図版等に用いるようになる。

1955年、河口氏は春日町遺跡の調査報告を行った。出土土器のうち、第二層上部土器群Ⅰとした中に、後に前川威洋氏により指宿式の典型とされる土器が2点掲載される。13（以下「13」とする）は靴形文が展開するものであり、河口氏は以前から指宿式の範疇に含めていたものである。また11（以下「11」とする）は、波頂部から垂下する2本の沈線が、胴部文様帯を区画し、区画内は平行沈線が入組文を形成する。この2点について、河口氏は文中でどの型式なのか説明を行っていない（**河口　1955**）。同年の論考では、「11」の写真が、他の指宿式と同じ写真の中にあることから、典型例ではないにせよ、指宿式の一種と認識していたようである（**河口　1955**）。

第Ⅱ期をリードしたのは河口氏である。多くの調査事例を背景に、多くの出土資料が図示され、指宿式研究の骨格を作り上げた。これにより、指宿式は周辺型式も含めた土器編年の中で語られることが可能となった。

第Ⅲ期（1966～1992）

1966年、前川威洋氏は、九州の縄文後期前半期の土器を俯瞰する中で、指宿式を説明するが（**前川　1966**）、この時前川氏は「11」及びそれに類似する福昌寺遺跡出土資料を典型例として図版を組んでいる。また、乙益氏との共著では、「4」、「11」、「13」を代表例としている（**前川・乙益　1969**）。前川氏は指宿式土器を平城式や綾式と併行関係に置き、河口氏より一歩踏み込んで磨消縄文系土器の影響を論じている。この位置付けは、後に強く影響を及ぼすこととなった。

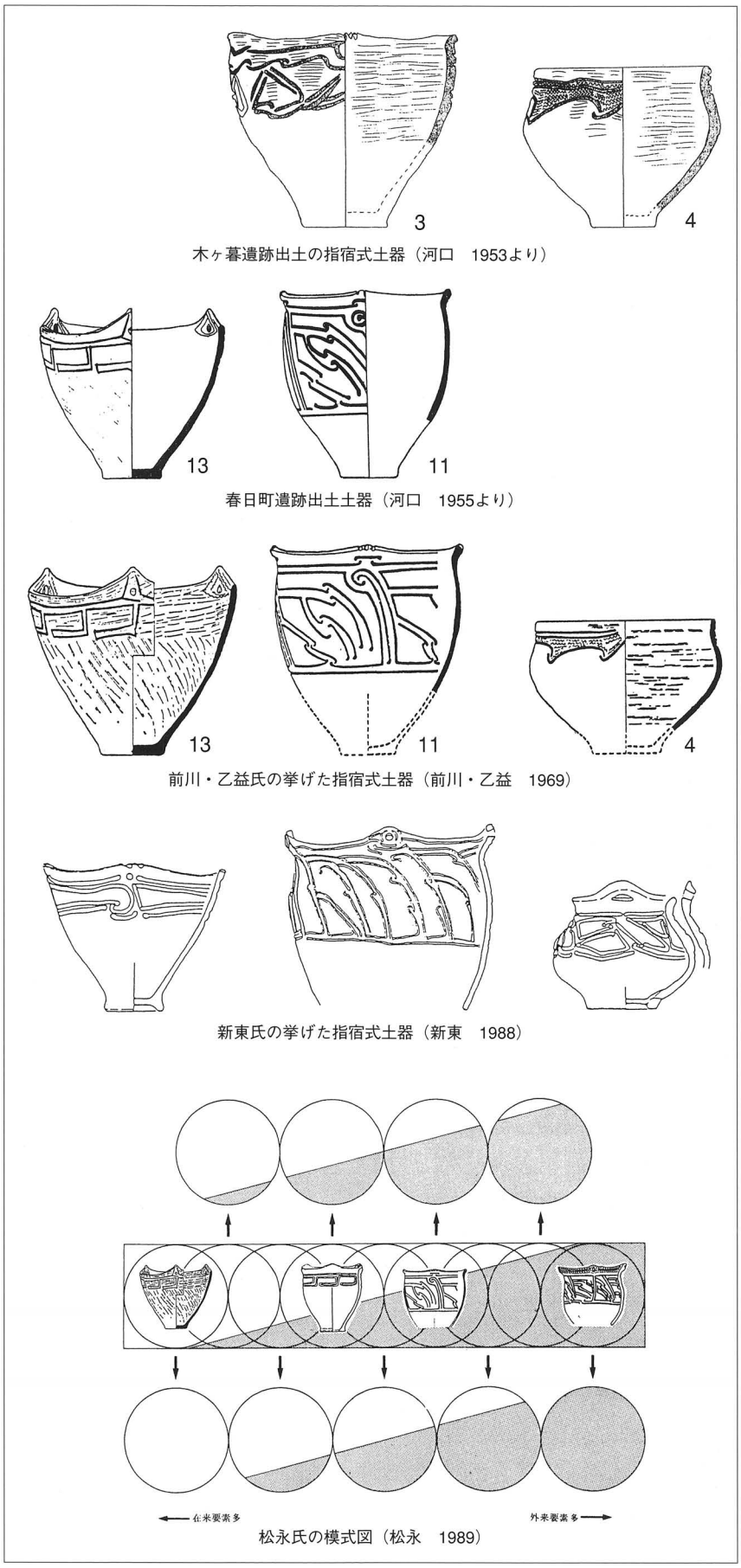
1983年、本田道輝氏は、川辺町田中堀遺跡の出土遺物に着目し、松山式の口縁部形状が3種に分かれることから、これ

を指宿式が強い外的影響を受け変容した結果とした。これは、河口氏の提唱する指宿式→松山式→市来式の変遷を発展させたものである（**本田　1983**）。

同年、鹿児島県教育委員会から成川遺跡の報告書が刊行された。主体を占めたのは、鉢形を呈す口縁部ないしは胴部上半に二本平行の長靴形の文様が横位に連続するものであり、一部入組文を取り入れたものも認められた。「13」に類似することから、この土器は指宿式とされた（**鹿児島県教育委員会　1983**）。加えて1985年、志布志町教育委員会から中原遺跡の報告書が刊行された。遺物の主体は、「11」に類似するものであったため、これも指宿式の範疇で捉えられた（**志布志町教育委員会　1985**）。二冊の報告書により、指宿式の文様の種類は急激に増加した。

1988年、新東晃一氏は考古学ジャーナルの紙上連載で指宿式を取り上げた。図版に掲載された3点の遺物は、中原遺跡の出土土器であった（**新東 1988**）。

1989年、松永幸男氏は、指宿式の属性を細かく分類し、南九州における異系統土器の受容形態を探っている。その結果を、阿高式で田中良之氏が行った成果と重ね合わせ、岩崎下層式から指宿式への変遷は、阿高式からの流れを汲む岩崎式の伝統を受け継いだ一群と、磨消縄文系土器に類似した一群が同時に存在し、次第に施文手法を受容するとした。そして、その変遷は阿高―中津間で見られたような精粗の枠組みを形成しない、所謂ポリセティックなあり方を示すという見解を、模式図と共に提唱し、外来系土器が在来系土器を凌駕せずに変遷するあり方は、「土器文化圏の中核地域とはなり得なかった地域における土器様式の変化」



木ヶ暮遺跡出土の指宿式土器（河口　1953より）

春日町遺跡出土土器（河口　1955より）

前川・乙益氏の挙げた指宿式土器（前川・乙益　1969）

新東氏の挙げた指宿式土器（新東　1988）

松永氏の模式図（松永　1989）

第11図　指宿式概念変遷図

が原因であるとした。土器の詳細な観察から様式構造にまで踏み込んだ松永氏のアプローチは多大な意義があったが、指宿式のもつ地域差の視点が不足している面は否めない（**松永　1989**）。なお松永氏は、この中で河口氏や本田氏の提唱する指宿式→市来式の変遷を想定しているが、後に器形の類似性から、市来式土器を阿高式系土器に含め得る土器との認識に改めている（**松永　1994**）。

第Ⅲ期は、出土遺跡や出土資料が飛躍的に増加したために、型式の把握が困難になったことを示している。松永論文で抽出された多種の文様は、それを具体的に表していると言える。

第Ⅳ期（1993～）

1993年、水ノ江和同氏は、九州の縁帯文土器を概説した中で指宿式についても触れている。水ノ江氏は、中原遺跡の出土資料に着目し、報告書分類を用いてⅣBタイプ→ⅣAタイプ→ＶＡ群・春日町タイプ→ＶBタイプ→橋牟礼川タイプの変遷を提唱している。そして、ⅣBタイプを宿毛式併行、ⅣAタイプを小池原下層Ⅰ式・御手洗A式、中原ＶBタイプを小池原下層Ⅱ式、橋牟礼川タイプを小池原上層式が、それぞれ併行関係あるとした編年案を作成した。これは、磨消縄文が受容され、次第に縄文部が消失する様を再現する意図が込められているが、後に山崎真治氏も指摘するように、ＶBタイプは胴部文様のみで区別することは困難であり、一時期と捉えられるのか疑問が残る。また、中原遺跡と橋牟礼川遺跡の土器群を時間差と捉えたために、鹿児島湾と宮崎平野で、遺跡分布が入れ替わるという問題も残した。ただし意義深いのは、成川遺跡出土土器群を「成川タイプ」と一括し、この土器群を指宿式とは別型式としたことである。これにより、指宿式の再編への動きが加速することとなった（**水ノ江　1993**）。

1996年、三輪晃三氏は、南九州の中期後半から後期前半の土器を俯瞰する中で、水ノ江氏が分離した成川タイプを宮之迫３段階に後続し、宿毛式と併行関係に置いた一方、中原Ｖ類・指宿式を松ノ木式、三里式らと併行に置き、指宿式の後半を平城Ⅰ式に併行させている（**三輪　1996**）。更に1998年の論考では、成川タイプを成川K式と改称し、独立型式とした後、南薩（成川遺跡）と鹿児島湾（武貝塚）、志布志湾（中原遺跡）で地域色が存在すると述べている。また、沈線間の刺突など、成川K式と指宿式が共通性を持つことから、併行関係としている（**三輪　1998**）。三輪氏の分類は、近年の成果を考慮すると、最も支持できる内容と言えるだろう。

2003年、山崎真治氏は、西日本全般の縄文後期前半の土器を俯瞰する中で、指宿式土器についても言及している。山崎氏は、中原遺跡出土の土器を主に考察を行い、三輪氏の言う成川K式が、沈線末端が入り組むなどの特徴から指宿式と時期が重なることを挙げ、指宿式に再び含めた一方で、中原ＶＢ群を新しい様相であるとする水ノ江氏の説に疑問を呈し、指宿式土器として、中原遺跡の出土資料と、草野貝塚から出土した、やや広めの口縁部文様帯を有する波状口縁の深鉢を挙げている（**山崎　2003**）。

2005年、黒川忠広氏は、指宿式土器の中に、赤紫色・紫色・青紫色・桃色など特有の発色を呈する土器群があることに着目し、胎土が指宿市の温泉変質土であることを突きとめた。このなかで注目されるのは、中原ＶB類にはこの胎土が認められないとした点である。これは、文様だけでなく、胎土からも両者が別系統であることを示していよう（**黒川　2005**）。

第Ⅳ期は、前段階で一型式としてのまとまりが危うくなったことを受け、細分を試みる論考が多く登場したことが特徴である。

２・問題点の抽出

指宿式最大の問題点は、あまりに多くの文様要素を抱えていることだろう。今日、成川Ｋ式は指宿式と分離されつつあるが、両者の中間的な型式も存在しており、その作業は決して簡単ではない。分類に際しては、宮之迫式で用いた「群」の概念を用いながら、根本的に再分類を行う必要がある。

3・分類

A群（第12・13図）

a類（1～17）は、いわゆる靴形文を行う一群である。1は、口縁に縦横のアーチのかかった突起を一箇所持つ。2・3は、口縁に筒状把手を1箇所持つ。2は口縁が直口するが、3は頸部で括れるため外反気味となる。4～6は緩やかな波状口縁を呈し、単位部の内面に短沈線が施される。4・5は靴形のモチーフが細い。7は強い波状口縁を呈し、波頂部の下位には穿孔が行われる。靴形のモチーフが太い。8は口縁が大きく内湾する。9・11は口縁が直口する。靴形のモチーフは太めである。12は波状口縁であり、頸部で僅かに括れる。施文部は比較的狭い。13は、沈線の継ぎ目や靴形の間隔にばらつきが見られる。14・15は、口縁直下の平行沈線が省略されている。14は口縁部の外反が強く、他とは器形が異なる。16・17は靴形文の下位に施文が行われる。16は波状沈線、17は入組文である。

a'類（18～25）は、a類に類似しながらも、靴形文が行われない一群である。18は、靴形の「つま先」と「かかと」が結合され、施文部内を長方形の区画が巡る状態である。19・21は平行沈線により工字状のモチーフが描かれる。20は、平行沈線間を刺突文で充填する。口縁はほぼ直口する。22は、施文部が広く、平行沈線が階段状に下がる文様を施す。沈線は細い。器形は、胴部から口縁部にかけて、ほぼ変化なく外反する。23は、直線文による渦巻が一定間隔で施文される。24は、それが2列行われており、25は沈線間を刺突で充填する。胴部は大きく張り出す。

b類（1～17）は、いわゆる音符文を行う一群である。1はその典型例であり、音符文の間を横走する入組文で繋ぐ。2は音符文が小さくなり、代わりに入組文が音符文下位にも行われる。3・4は、音符文が比較的希薄である。5は音符文がやや崩れ、入組文で繋ぐ部分にも音符文が行われる。6は、音符文が連続し、下位を沈線が区切れながら横走する。9・12は入組文が発達し、音符文の一部を吸収する。10・11・16・17は、入組文が省略され、音符文間は沈線で連絡される。7は音符文が左右に、しかも蕨手状に伸びる。8は音符文が解体され、退化した入組文が文様の空白部を埋める。13は、入組文が発達するが、比較的典型例に近い。14・15は13よりも入組文が弱く、音符文の下位に平行沈線が見られる。

b'類（18～27）は、音符文の崩れた一群である。18は、音符文のみが連続し、連絡する沈線はない。19は音符文下位の沈線が施文部の下端線であり、音符文が吸収されつつある。20は音符文が入組文を行う際の基本モチーフに留まっている。21は、音符文に著しい退化が認められる。22～25は、沈線が密集する中で施文部を斜位に区画する以上の意味を成さない。26は、入組文は認められず、二本の平行沈線が忠実に守られる。沈線間は刺突が行われる。27はそれが更に極端になったものであり、渦巻状の文様や連絡する線の全てが区画され、区画内に刺突が行われる。

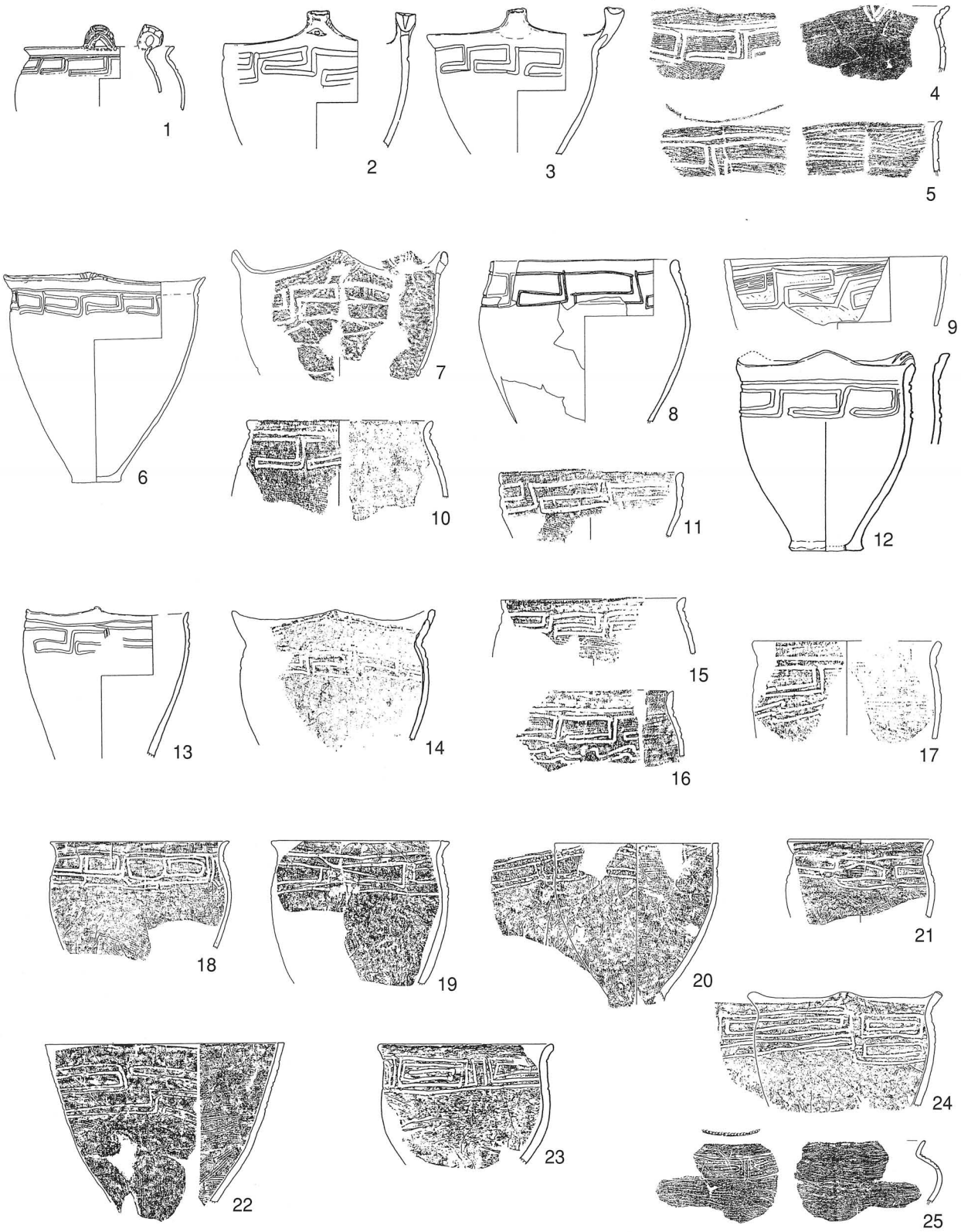
B群（第14図）

細い、曲線状の沈線により、記号化されたモチーフが施される一群である。1は、筒状の突起が4単位設けられ、波頂部の下位に渦巻文が施文され、左右に伸びた沈線が「弓」字状のモチーフを描きながら垂下する。3は筒状の突起が省略されながら設けられたものである。2は、波頂部に穿孔を伴う橋状把手が設けられる。4は、波頂部から平行曲線が斜行し、「Λ」字が縦位に連続する。5・6・8は、波頂部直下の渦巻文と共に「↑」字状のモチーフが描かれる。7は斜位に下がる沈線が途中でカーブしており、「古」字状を呈する。9は渦巻文がモチーフの制約を受け三角形状を呈する。12・13は渦巻文が消失し、空白となっている。14は波頂部とモチーフが一致しない。15は渦巻文が完全になくなっており、「Λ」字状の文様が縦位に連続する。16は、「仝」字状のモチーフとなる。17は、渦巻文が縦位に連続し、渦巻を頂点とする菱形のモチーフが描かれ、その横には平行沈線がクランクしながら垂下する。19・21には、「王」字状のモチーフが描かれる。22は「只」字状のモチーフである。楕円形の区画は渦巻文の退化形態であろうか。23のモチーフは「土」字状、24はそれが連続し「圭」字状を呈すると予想される。25は波頂部に「Λ」字状のモチーフを施し、その下位に三角形状のモチーフが、退化した渦巻文と入組文を取り込みながら横位に展開する。27は、平行しない曲線文が施文される。

C群（第15・16図）

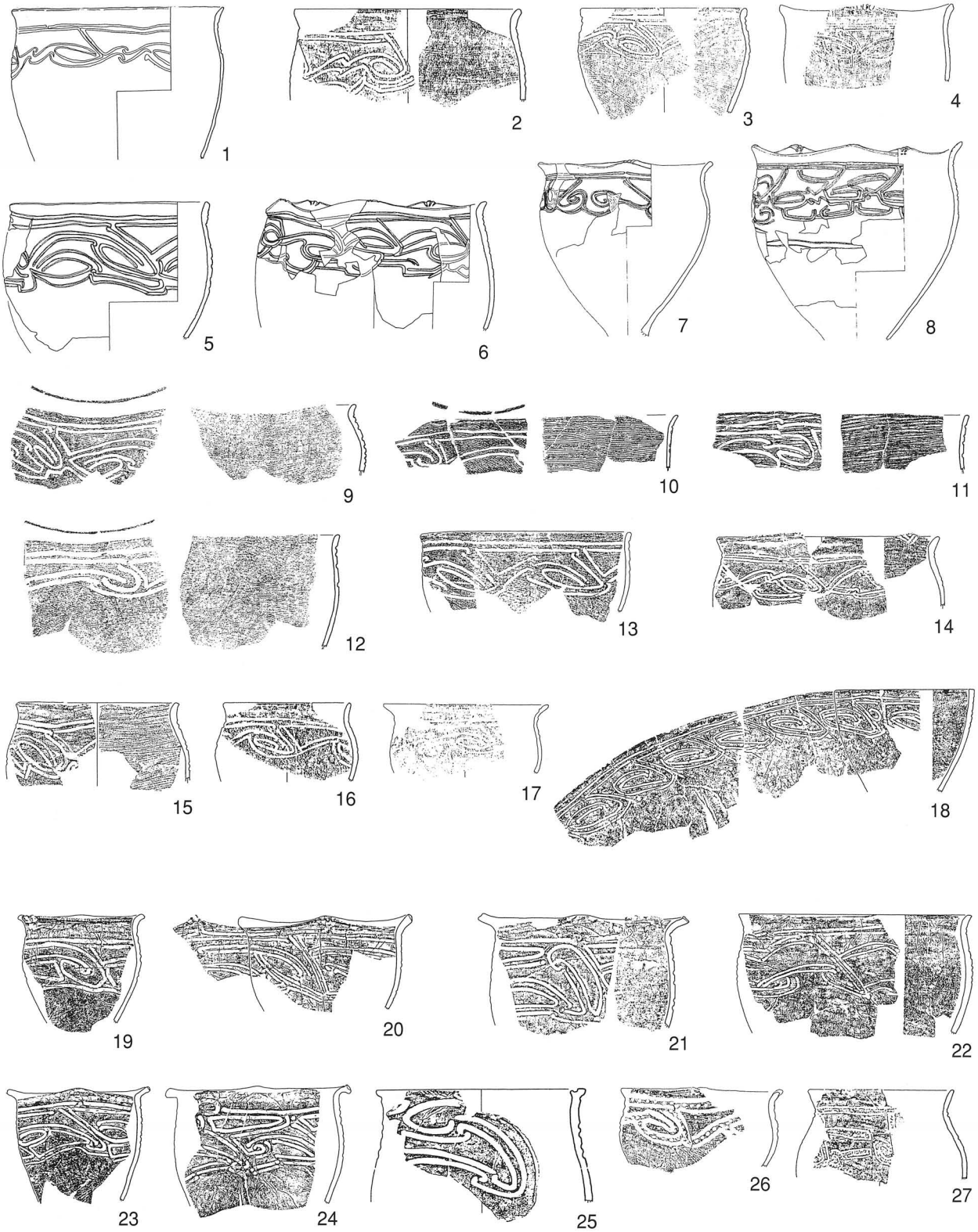
入組文や曲線文による沈線が密集するものである。円文を伴う肥厚帯、若しくは、口唇部に沈線が行われるものが多いのもこの群の特徴である。

a類は、胴部文様帯を、縦位、若しくは斜位に区画した一群である。1は、胴部が平行沈線と斜行する平行沈線によって台形に区画され、その中を平行沈線が入組みながら充填される。2は、区画線と入組文の分離が未発達であるため、1



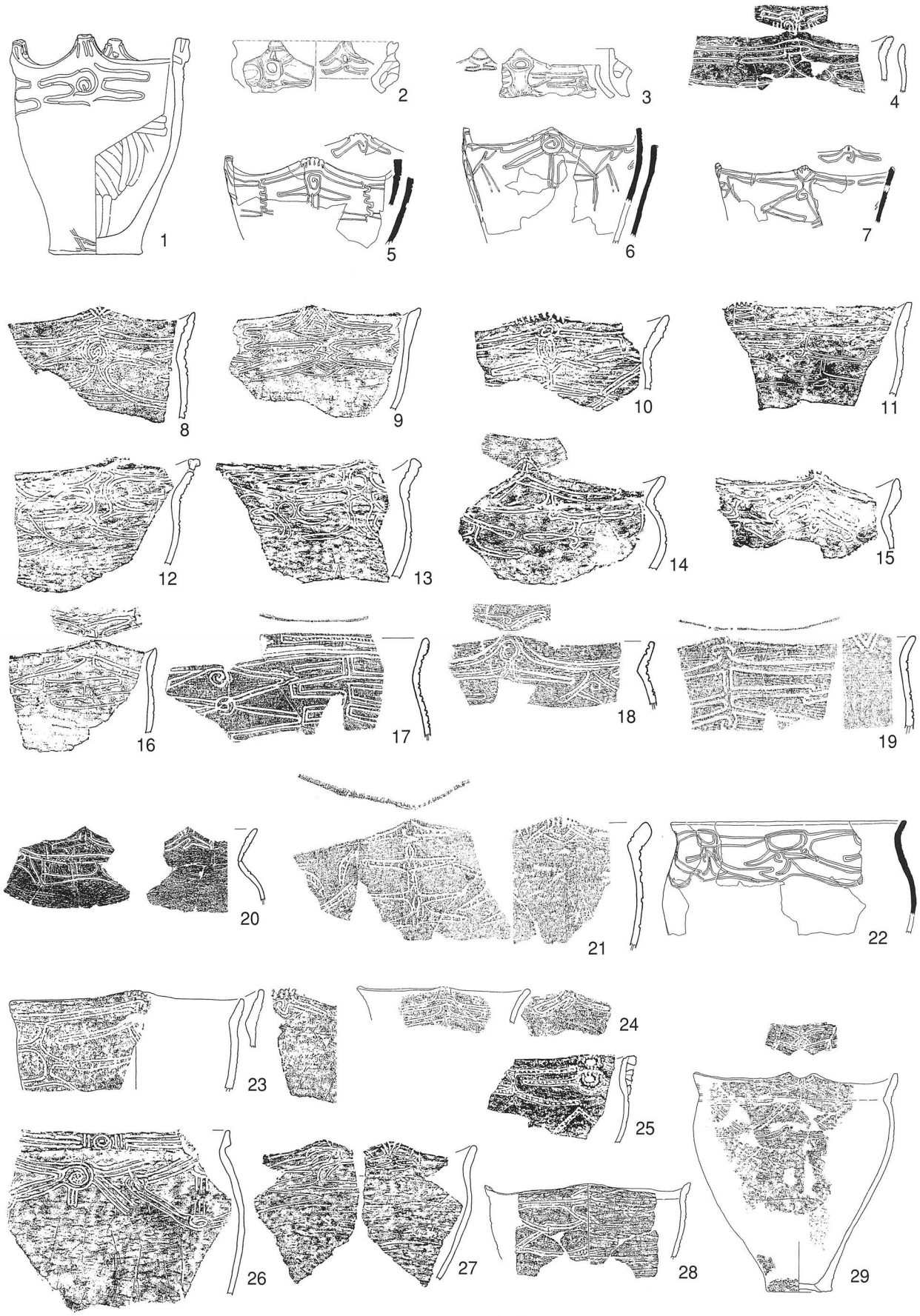
第12図　A群土器（a類：1～17，a'類：18～25）

成川：1～3・6・10～17，前田：4・5・8・25，帖地：7，大龍：9，中原：18～24



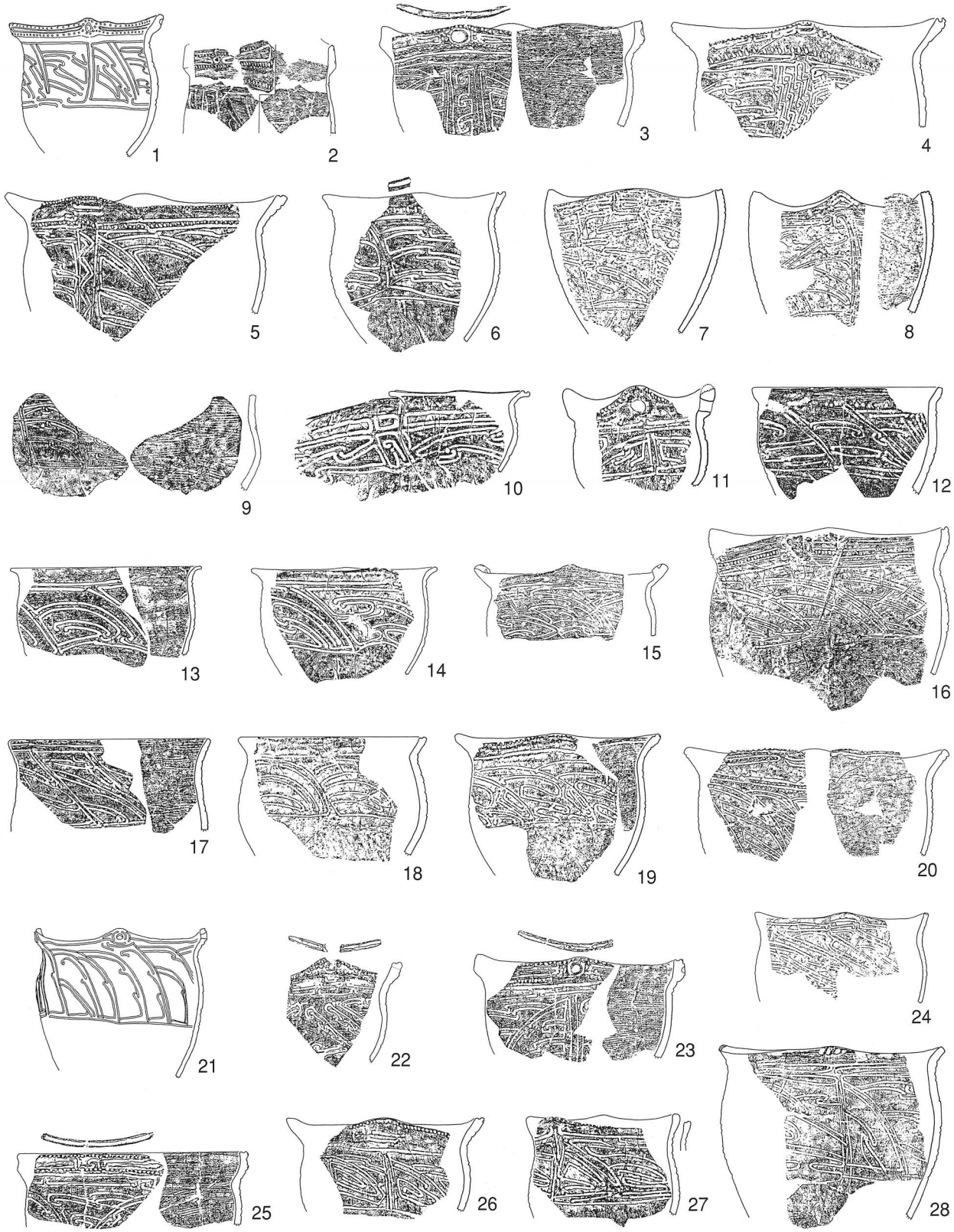
第13図　A群土器（b類：1～17，b'類：18～27）

成川：1～4・16・17・27，前田：5～12，帖地：13・26，立神：14・15，中原：18～25



第14図　B群土器

大龍：1～3，田中堀：4，武貝塚：5～7・22，草野貝塚：8～16・25～27，前田：17～21
帖地：23・24・29，上焼田：28



第15図　C群土器（a類）

中原：1・3～8・10～28，右葛ヶ迫：2，丸野第2：9

に先行すると考えられる。3～5・11は、縦位の区画線が発達した一群である。区画線間は、斜行する平行沈線が入組みながら連絡する。6は、入組文が弧を描きながら横位に連絡する。7・8は、区画線間の充填が入組文を伴わない平行沈線によって行われており、平行沈線は明らかに区画線よりも後で行う。9は、入組文を省略させた「豚鼻状」のモチーフで平行沈線を連結する。11は区画線内に蕨手状のモチーフが施される。13～23は、区画線が斜行する一群である。13は区画線間の入組文が弧を描きながら伸びる。14・15は入組文が顕著に行われる。18～20は、13の文様モチーフを省略させたものである。区画線の間隔は狭まる。21・22は、連結する入組文を消失した代わりに、下位の区画線が入組文を伴うものである。23・25は縦位と斜位の区画線の両方が行われたものである。26の区画下位には三角形の渦巻文が施文される。27は、退化しつつあるが、斜位の区画線の痕跡らしき平行沈線を認めることができる。内容は一筆書きによる「弓」字状であり、入組文を失いながらも充填させたと考えられる。28は、細沈線によって施文されるが、基本モチーフは1と同じである。

b類は、a類の施文帯が圧縮された一群である。1は、区画線の痕跡は認められるが、連絡線との分離が困難である。また、文様も波頂部と連動しない。2・3の波頂部から斜行する平行沈線も、区画線としての影響力を失っている。5は波頂部が不明であるが、どの平行沈線も区画線と判断するには至らない。6～8は、区画線を完全に消失しているばかりでなく、入組文も著しい退化が認められる。ただし、モチーフを観察すると、平行沈線は認識しているようである。9～13は、その平行沈線さえ退化した一群である。11～13の口縁部は、9のような縁帯気味の口縁が存在したと予想されるが、施文部は胴部に集約される。14・16は平口縁を呈する深鉢であり、口縁直下に圧縮された施文部を持つ。17は入組文が施文される。15は平行する波状沈線が横位に展開する。これらは、C群の中でも特殊な土器といえる。

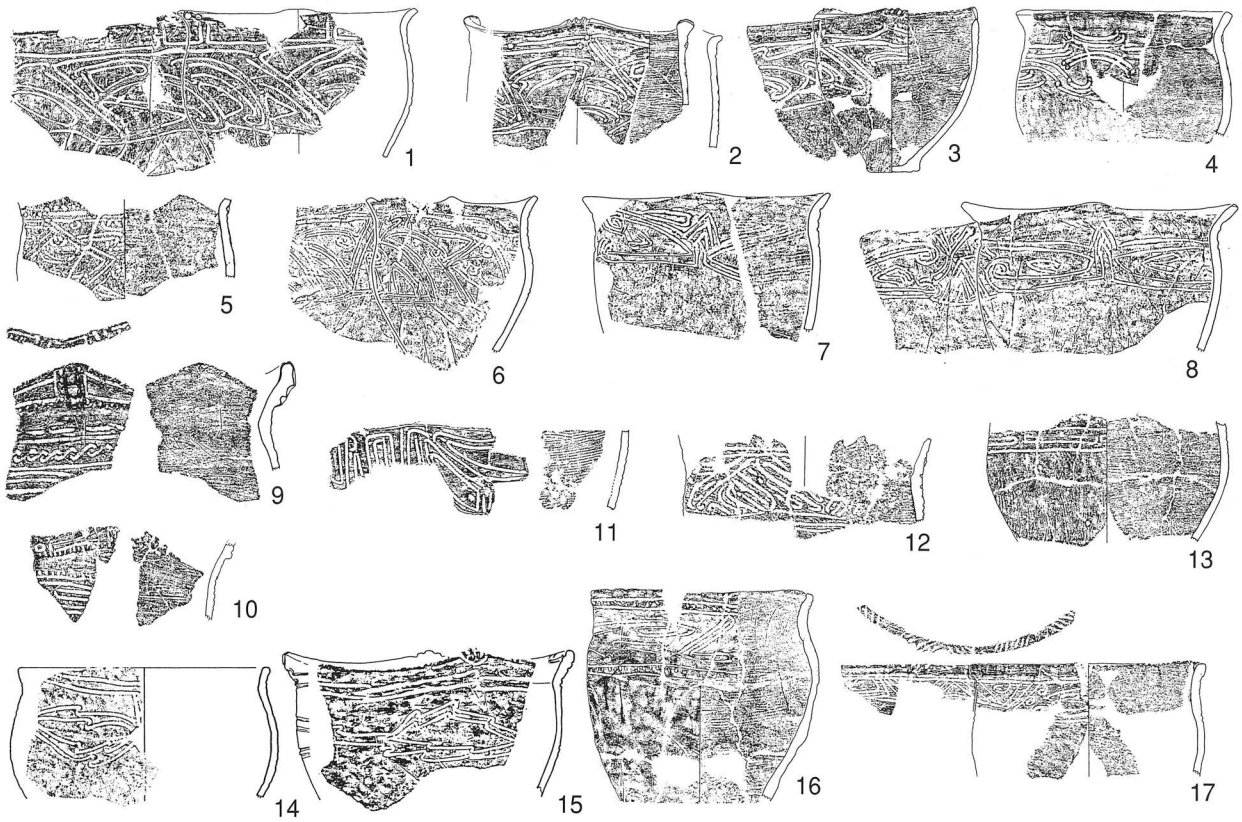
D群（第17図）

幾何学文を行う一群である。1は、施文部内に三角形の区画を作り、その内部に沈線をV字または折帯気味に施す。2も三角形の区画を持ち、内部は三角形の文様を充填させる。3は施文部が圧縮されており、斜行する沈線により、三角形の区画を展開させる。4は、1～3の下端線が三角形の区画に連動したものである。5は、波状口縁に沿って菱形のモチーフが連続する一群である。6は、4の三角形の区画が下位にも連続するものである。7は、円文、若しくは弧状の平行沈線により区画される。沈線内は、刺突によって充填される。8は、鋸歯状を描きながら垂下する沈線が連続する。平行沈線は行われない。10は、5の文様がやや崩れた状態である。また、沈線の始点・終点には刺突が行われる。11～13は、5や9の文様が規則的に整備され、沈線間に刺突を伴うものである。14も沈線間に刺突を行うが、波頂部に渦巻文、波低部には四角形の渦巻文が施文される。

4・土器型式の設定

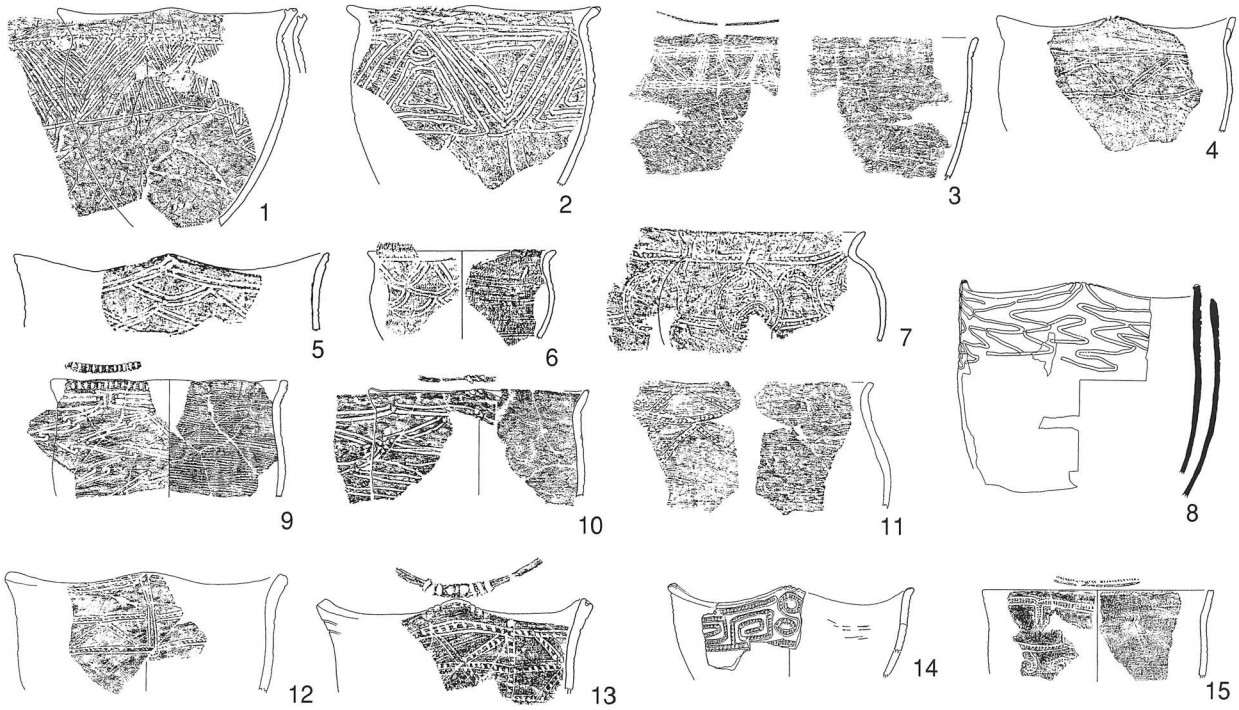
A群のうち、a・b類はいわゆる成川K式である。a類の文様が宮之迫式B群から来ていると考えられることから、宮之迫式に直接後続することになろう。また、曲線のモチーフや入組文を多用するb類は、a類より後出と考えられることから、a類→b類への変遷を想定することが可能である。なお、a類土器の成立は、宮之迫式B群のみとは限らない。何故なら、a類の2・3に行われる突起は、磨消縄文系土器に認められる筒状突起であるし、そもそも靴形文は、中津式に伴う沈線文土器（幸泉満夫氏の言う沈線文系1類）の中にも存在するためである（**幸泉　2001**）。a類の文様の地盤は、宮之迫式の段階で既に存在していたのであろうが、この土器群の存続を助けたのは磨消縄文系土器であったと考えられる。また、b類の入組文は、志布志湾との交流の結果もたらされたと考えられる。

次にa'・b'類である。土器の分布を見ると、a・b類が鹿児島湾を主体とするのに対し、a'・b'類は志布志湾沿岸を主体とする。双方が出土する根占町前田遺跡が、両地域の中間にあたることを考えれば、a'類はa類と同時期、b'類はb類と同時期の志布志湾沿岸の土器と考えるのが妥当であろう。しかし、a'類は文様として不安定であり、あくまでa類の模倣と考えられるのに対し、b'類は入組文など、在地の文様要素を積極的に駆使し、b類との差もa類とa'類より小さくなっている。これは、b類で述べた交流の拡大化によるものであろう。なお、b'類の26・27は、沈線間の刺突という特徴から、D群土器の影響も考えられる。



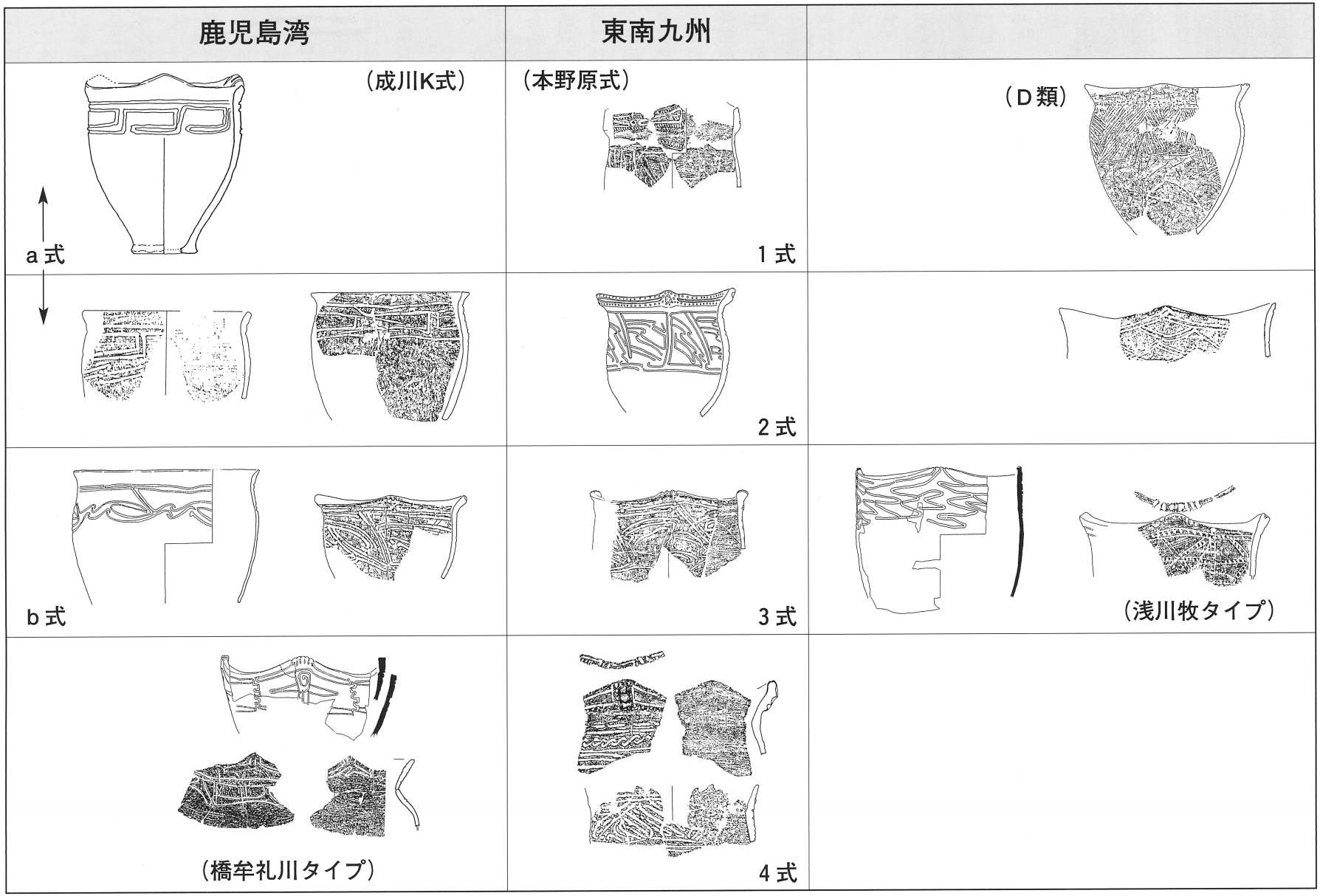
第16図　C群土器（b類：1～8，c類：9～13，d類：16・17，e類：14・15）

中原：1・6～8，右葛ヶ迫：2～5・9・11～13・16・17，丸野第2：10，成川：14，草野貝塚：15



第17図　D群土器（a類：1～10，b類：11～15）

中原：1・2，前田：3，成川：4～7，武貝塚：8，右葛ヶ迫：9・10，藤田小田：11・12，浅川牧：13～15



第18図　成川K式・本野原式変遷予想図

A群は、以前設定された「成川K式」を用いるのが妥当であろう。前後関係を表す時には、成川Ka式、Kb式としたい。

B群は、記号化された文様のバリエーションは多いものの、波頂部を中心にした文様構成や、内面施文から、1つの群と認識しうると判断した。分布を見ると、A群同様鹿児島湾一般に及んでいることが分かる。成川K式が宮之迫式に後続するものと考えるなら、この一群は成川K式に後続すると考えるべきであろう。なおB群は、水ノ江氏により「橋牟礼川タイプ」と称された経緯があるため、その名称を尊重したい。

C群a類に見られる区画線は、遠く堀之内1式から間接的に影響を受けたと考えられる[4]。b類では、区画線が消失していることから、a類からb類へ、という変遷を辿ることができる。なお、縁帯気味の口縁は、この中でもごく一部に限られるばかりでなく、胴部文様は区画線消失後もあることから、C群を通して普遍的に存続したと考えられる。なお、口縁部形態は、a類の4・10・26のように、口唇部に沈線を行い、口縁が大きく外反するものは古手に限られ、b類2・3のように、波頂部に簡単な刻目を行うものは後出の傾向が認められる。

さて、C群は、提示した資料の殆どが中原遺跡出土である。しかし、後に述べるように、中原遺跡の出土資料は、決して典型的なあり方ではなく、むしろ2つの分布圏の境界に特有の様相を示している。現時点で、最も良好な出土資料を包括するのは本野原遺跡である。そのため、C群は「本野原式」と新たに設定したい。なお、下端線なし（1式）→下端線の出現・区画と入組みの差が明瞭（2式）→区画線と入組文の区別が消滅（3式）→施文部の圧縮化・平行沈線の消失（4式）という型式の変遷も、ここで提示したい。

D群のうち1は、松ノ木遺跡から出土した土器に類似する[5]。4～6はA群の、14はB群の影響が見られる。なお、11～15は、これまでの指宿式の概念から大きく外れる文様構成である。この一群が種子・屋久地域から出土していることを考えると、当該地域による特殊性を垣間見ることができる。なお、この地域では市来式も独自性のある文様が行われた一群が存在するが[6]、こうした特殊性も、この時期に形成されたと考えられる。

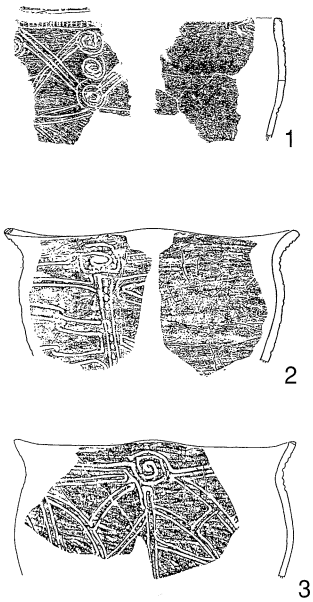
D群は、南九州に一部存在した文様の一要素であるが、種子・屋久地方に進出することで、新たに一群を成すことになった。ただし、その個体は現時点ではまだ少量である。よって、11～15は、良好な出土を示す浅川牧遺跡の名を用いて「浅川牧タイプ」としたい。また、それ以前の土器は一型式と呼ぶには躊躇を覚える事から、ここではD群と仮称したい。

5・考察

さて、このような過程を経て作成した変遷図が第18図である。宮崎平野では本野原式が、鹿児島湾では成川式→橋牟礼川タイプが、種子・屋久では後半からD群→浅川牧タイプが、それぞれ主体的に分布したと考えられる。

このうち本野原式は、宮之迫式に後続しながら、調整は、刷毛目状工具などによるナデを基本とするなど、磨消縄文系土器にも似た属性を有している。また、本野原式に伴う無文土器は、先行する宮之迫式にも、併行する成川K式にも認められないことから、宿毛式から影響を受けたことを意味すると共に、本野原式が、東南九州において成立した「磨消縄文を伴わない磨消縄文系土器」であったことを物語る。ただし、宿毛式と本野原式の間にはヒアタスが存在することも確かであり、宿毛式を製作した集団が直接移動して製作したのではなく、あくまで間接的影響によって成立したと考えられる。

もう一点注目されるのは、志布志湾沿岸に位置する中原遺跡のあり方である。前半は、本野原1・2式がそのまま出土する一方で、成川K式はa式とは内容が大きく異なるa'式が少量出土するのみであり、宮崎平野の影響が強く認められる。a'式に見られる入組文も、本野原式に由来する。ところが、成川式が音符文を成立させると、中原遺跡は、音符文と本野原式の区画文を置換し、成川Kb式に近いb'類を成立させる。宮崎平野で、区画線を持たない本野原式が



第19図　その他の土器
前田：1，中原：2・3

出現したのは、この成川Ｋｂ'式の影響であろう。つまり、志布志湾は、相互に文様要素を影響させた中継地であったと考えられる。これは、それまで大きく影響を及ぼした西南四国からの情報流入が縮小した事も関わっているのであろう。その後、南九州は市来式へと変遷するが、これは単なる在地系土器の変遷ではなく、影響が少なくなった西南四国から脱却し、新たに南九州的土器を確立した姿と見ることができるだろう。

６・課題

上記の編年について、今後に向けての課題を挙げたい。

まず、橋牟礼川タイプの問題である。ここではＡ群よりも後出としたが、本当に妥当であろうか。例えば、第19図の１は前田遺跡出土資料である。３つの渦巻文が縦位に並び、三本単位の沈線が斜位に伸びる文様構成は、堀之内1式に由来するように思えてならない。また、２・３は、渦巻文を伴う本野原式である。この文様構成は、区画文と連結線の関係が明瞭である事から、古手に位置付けられる。橋牟礼川タイプが成川式に後続するのであれば、このような状況は成立しない筈である。更に、橋牟礼川タイプを象徴する渦巻文の系譜を辿れば、西南四国の三里式が挙げられよう。しかし、本書で提唱した編年では、時間的ヒアタスが存在する。ならば、鹿児島湾では成川Ｋ式と橋牟礼川タイプは時間的に併行したのであろうか。いずれにしろ、更なる検討が必要と思われる。

また、縁帯気味の口縁を呈する本野原式の変遷にも問題が残されている。この類の土器は、本野原式を通して存在すると述べたが、３式にあたるものは現時点ではまだ確認されていない。縁帯気味の口縁は、本当に恒常的に存在するのだろうか。間接的ながら、平城式の編年論争にも影響するため（**犬飼　2001、千葉　2005**）、今後の報告例が注目されよう。

（註）

４）：（**石井寛　1993**）の、Ｂ群土器のことである。

５）：（**本山町教育委員会　1992**）の、67のことである。

６）：（**南種子町教育委員会　2002**）の、７類土器のことである。

第３節　丸尾式土器を巡る諸問題

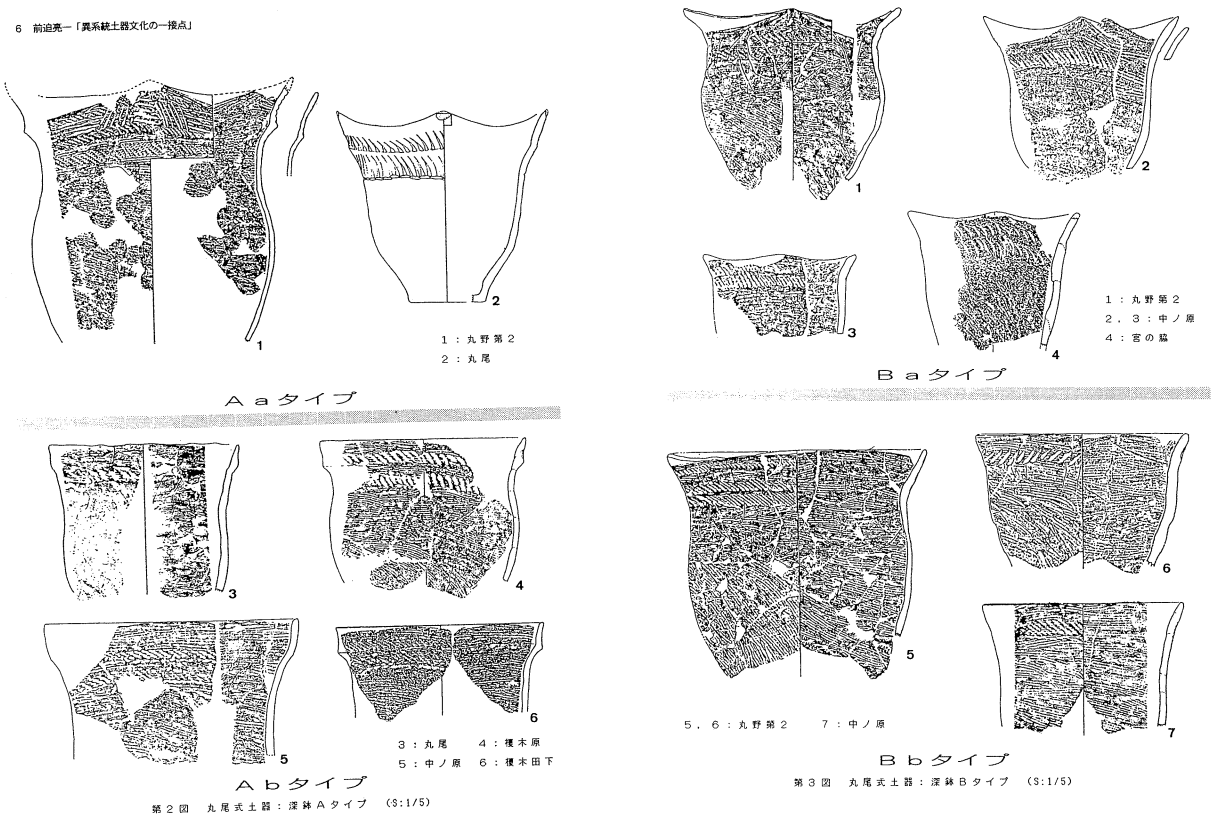
１・丸尾式土器研究史

設定から日が浅いため、型式設定以前に関わりがあると判断したものも記したい。研究史も一括して行う。

1978年、本田道輝氏は、納曽遺跡の発掘調査を報告する中で、層位的出土状況から市来式の口縁部断面形について、河口貞徳氏の変遷を追認し、具体的な図を提示した（**上村・本田　1978**）。

1989年、本田氏は更に考えを進め、市来式をⅠ～Ⅲ式に分類し、対応する図を提示した。Ⅲ式とされた一群は、今日の丸尾式にあたる。また、草野式が市来式内に含まれるという認識が、市来式の後続型式を考える上で転換点になったのは言うまでもない。更に、市来Ⅲ式の隣に一湊式が位置付けられたことも注目されよう（**本田　1989**）。本田氏の一連の研究により、それまでの市来式→草野式の見直しが行われ、口縁部断面形がくの字形を呈する市来式が、市来式の後期に位置付けられ、Ⅲ式と認識されるに至った。なお、本田氏はⅢ式を北久根山式後半期～西平式成立期としている。この認識は、現在の丸尾式の位置付けと殆ど変わらない。

本田氏の考えを更に発展させたのは前迫亮一氏である。1992年、本田氏が分類した口縁部断面形の５細分のうち、4・5に当たるものを「丸尾式土器」と設定した。前迫氏は、更に丸尾式の分布が市来式よりも一回り狭まる点に触れ、市来式土器”様式”が終息して行く様を追った。単なる土器型式の考察だけでなく、分布や様式の動態まで見据えた前迫氏の論考により、丸尾式の概念や位置付けはほぼ完成されるに至った（**前迫　1992b**）。なお、2002年に発表された論文では、干迫遺跡の出土土器を説明するなかで、貝殻文系土器と磨消縄文系土器の変遷を示す表を提示した（**前迫　2002**）。この表は、その後更なる改良が加えられている（**前迫　2004**）。



第20図　丸尾式の細分案（前迫　1993より）

2・問題点の抽出

前迫氏が2004年に作成した表を見ると、丸尾式が第4段階・第5段階（納曽式・辛川Ⅱ式）とされており、対象時期は幅広い。文様や特徴に乏しいため困難も伴うが、可能なら細分を行うべきであろう。

3・検討

丸尾式は、前迫氏によって設定時に細分されている。つまり、口縁部の屈曲の有無により深鉢A，Bに二分する案である。前迫氏は、それぞれAタイプ、Bタイプと呼称している。両者の前後関係は述べていないが、Aタイプ→Bタイプとして頸部より上位の変化を追うと、市来式（強く屈曲し、やがてくの字に屈曲。頸部が外反）→丸尾Aタイプ（くの字に屈曲。頸部が外反）→丸尾Bタイプ（口縁部が外反）→納屋向タイプ（僅かに外反、若しくは殆ど変化なし）と、違和感なく進む。また、口縁部～頸部における文様帯において沈線が消失し、貝殻腹縁刺突も２列→１列へと主流が変遷する傾向も窺える。よって、これは丸尾A式、B式とし、継続した流れにあると考えるのが妥当であろう。

なお、前迫氏はA，Bタイプ以外に、波状口縁をa，平口縁をbと細分するが、これは市来式と同様に、一型式内のセットと考えられる。なお、その場合 Aタイプに比較的多い波状口縁が、Bタイプで少なくなり、殆どが平口縁となる納屋向タイプへの漸移的傾向が考えられる。

丸尾A式とB式は、分布上大きな変化はない。市来式より始まった九州西南部における、磨消縄文系土器の貝殻文系土器の侵食は、この時期は沈静したと考えられる。その中で、丸尾A式の出土しなかった日向灘沿岸に、丸尾B式が分布することは興味深い現象である。

4・課題

更なる細分の余地が残されている。例えば本野原遺跡の966（第44図）は沈線が残存しており、頸部の外反が強いなど、

丸尾A式の中でも市来式の残滓をより強く残しているため、丸尾遺跡から出土した標準資料よりも古手に位置付けられよう。同様の資料は丸野第2遺跡でも認められるほか、干迫遺跡からは、平口縁も含め多量に出土する。資料数がまだ少ないため、一時期を与え得るとは限らないが、出土量が増加するのであれば設定する必要も出て来よう。

第4節　納屋向タイプを巡る諸問題

1・納屋向タイプ研究史

1974年、松添貝塚の報告書が刊行された。この中で「貝殻文系土器」と紹介された一群は、今日で言う納屋向タイプである。報告を行った野間重孝氏は、西平Ⅱ式（本書では納曽2式）や黒色磨研と伴っていることから、「市木（ママ）式から草野式への展開の延長線上にある一群の貝殻文土器」とし、「地域的な性格を示すもの」と述べている。出土資料が少ない当時の状況を考慮すれば、正鵠を射た野間氏の鋭い視点に驚くほかない（**宮崎市教育委員会　1974**）。

1985年、菅付和樹氏は、平畑遺跡の出土遺物を整理する中で、貝殻文系土器とその後続型式について述べ、松添貝塚の出土資料を市来系土器の終末とした（**菅付　1985b**）。この見解は、1989年、桒畑光博氏も肯定した上で、変化の背景に西平式の影響があったことを付け加えている（**桒畑　1989b**）。

1988年、宮崎県史が刊行され、納屋向遺跡の出土資料の一部が掲載された。資料の中には松添貝塚から出土した「貝殻文系土器」もあり、改めて、宮崎平野沿岸部に分布する土器として認識されることになった（**宮崎縣　1988**）。

1992年、前迫亮一氏は、丸尾式を設定する際に後続型式としてこの土器群に触れ、始めて「納屋向タイプ」と呼称した。また、器面にナデやミガキが行われている点に注目し、「南九州在地の土器群が汎九州的なものの中に含まれていく過程を示す現象」と位置付けた。この指摘によって、納屋向タイプは土器群として確たる時間的位置が与えられることとなった（**前迫　1992b**）。

2・問題点の抽出・型式の設定

納屋向タイプの提唱後、宮崎ではこの土器群の出土が相次いだ。特に清武町竹ノ内遺跡では、膨大な量が確認されている（**宮崎県埋蔵文化財センター　2000c**）。本野原遺跡の出土遺物も含めると、もはや型式的まとまりが存在し、一時期一地方を占めた土器型式であることは疑う余地はない。よって、ここに納屋向式土器と設定する。

納屋向式土器の分布は、宮崎のみならず、鹿児島湾の干迫遺跡や、屋久島の一湊松山遺跡にも及ぶ（**三友　河口　国分　1953**）。しかし、主体的に出土し、かつ一定量のまとまりのある地域は宮崎平野に限られる。丸尾B式から更に分布が縮小する傾向は明瞭に見て取れることから、前迫氏の言うように「貝殻文系の最後を飾る一群」と位置付けられよう。

3・課題

納屋向式は、西平式に併行する時期とした。しかし、西平式の細分が進む中、納屋向式の前後関係については定かでない。前迫氏は、納屋向タイプを提唱する中で、施文部や頸部の括れ具合から二分し、前後関係の可能性を示唆しているが、実際に分類を行ってみると、口縁部の外傾が弱いのに胴部に施文を行うものも多く、両者の区分は非常に困難である。故に、本書では一型式を設定するに留め、細分は今後に委ねたい。

第5節　納曽式土器を巡る諸問題

1・納曽式土器研究史

Ⅰ～Ⅳ期に分けて説明を行いたい。

Ⅰ期（1978～1981）

納曽式は、1978年に納曽遺跡の調査成果が記されたことに始まる。出土土器を担当した本田道輝氏は、主体を成す第一類土器を納曽式と設定し、「西平文化が市来文化と接触し、その姿をやや変容させながらも次第に南九州に根を下ろすと

いう現象が、南島にまで波及したことを物語るもの」と位置付けている。また、「南九州における市来文化の終息と西平文化の定着化と言う時間的変化を物語るものと思われる」という表現には、市来式→納曽式→西平式という変遷を窺わせる。これは、当時丸尾式が設定されていなかったことを考えると、妥当な判断と言える[7]（**上村・本田　1978**）。本田氏は、大龍遺跡の報告書でも、同様の見解を示している（**鹿児島市教育委員会　1979**）。

本田氏は、更に1981年、市来式土器について執筆する中でも同様の説を述べているが、この時は納曽式土器と中岳Ⅰ式を「在地土器文化との融合状態を示すもの」として並べて紹介している。

第Ⅰ期は、本田氏により位置付けが行われてきた。しかし暫くは、納曽式について取り沙汰されることはなく、土器編年からも置き去りにされてきた感が強い。その一番の理由は、本田氏が望んだ追加資料に恵まれなかったためであろう。

Ⅱ期（1989～1992）

納曽式の名が再び登場するのは1989年である。鹿屋市中ノ原遺跡から出土したⅨ類について納曽式としている。うち2点は良好な残存状態であった。この資料が、土器集中区において、後に丸尾式と設定される土器と共に出土していたことも、大きな影響を与えたと言えよう（**鹿児島県教育委員会　1989**）。

1992年、前迫亮一氏は、九州東南部の西平式を集成する中で、納曽式の存在についても言及し、丸尾式（当時は丸尾タイプ）と西平式の古いタイプと納曽式が、時間的に極めて近い関係にあるとしている。また、納曽式が、前川氏が北久根山第二型式とした大渡遺跡出土の北久根山式に類似していると指摘した上で、「北久根山式の新しいタイプ（在地型）と考えられる納曽式土器」と記していることは、大いに注目すべき点である（**前迫　1992a**）。

同年末、前迫氏は丸尾式を型式設定した中で、再び納曽式について説明した。そのなかで、納曽式の時期について、前述の大渡遺跡出土資料との類似性と、西平式に後続するとされる中岳Ⅰ・Ⅱ式の存在から「北久根山式土器の終末期（西平式土器の前段階）」とし、具体的には辛川Ⅱ式土器の名称を挙げ、時間的関係を想定している（**前迫　1992b**）。

Ⅱ期は、前迫氏によって大きく進展することになった。前迫氏の功績により、納曽式の位置付けが、磨消縄文系土器の融合と言うだけでなく、貝殻文系土器群との関わりの中で捉えることが可能となった。

Ⅲ期（1993～2002）

1993年、市来（川上）貝塚の21Tから、胴部がやや膨らんだり、文様帯を有したりする一群がまとまって出土したが、報告書中では、これを納曽式としている。また、「層位的に西平式より古く、北久根山式の影響を受けた在地の土器であり、納曽式と市来式丸尾タイプはほぼ同時期」と、前迫氏の編年を追認している。ただし、施文は沈線間を貝殻腹縁刺突が充填するパターンを基本としており、器形も、北久根山式や辛川式に類似するものもあれば程遠い土器があるなど、多くのバリエーションが存在する。この時点で、納曽式の認定基準に幅が生じたことになった（**市来町教育委員会　1993**）。

1997年、南九州の縄文後期観を大きく変えることになった干迫遺跡の報告書が刊行された。報告を担当した前迫氏は、この遺跡でⅡ－8類とした土器を納曽式としているが、これは市来貝塚出土の納曽式に近いものが主体であった（**鹿児島県立埋蔵文化財センター　1997**）。

2000年、縄文後期後半を主体とする清武町竹ノ内遺跡の報告書が刊行された。報告書を担当した山田洋一郎氏は、出土した資料について納曽式の名称を与えている。確かに納曽式として設定された納曽遺跡出土土器の中には、このような一群が存在しており、これを納曽式と解釈するのは妥当であろう。しかし平行沈線を基本とする施文は、市来・干迫遺跡出土資料とはかけ離れており、異質な印象を受けざるを得ない。この資料の追加により、鹿児島と宮崎の納曽式土器の違いは決定的となったといえる（**宮崎県埋蔵文化財センター　2000 c**）。

2002年、南種子町藤平小田遺跡では、9類とした一群を納曽式としている。一部は市来・干迫遺跡出土資料に類似するものが含まれていたが、主体は竹ノ内遺跡の出土資料に類似していた（**南種子町教育委員会　2002**）。

Ⅲ期は、各地で納曽式土器の出土が報告され、飛躍的に類例が増加した時期である。しかし、類例が増加すると同時に、文様などのバリエーションも増えた点は否めない。

Ⅳ期（2002～　）

2002年、『四国とその周辺の考古学』が刊行された。この中で、前迫氏は干迫遺跡出土の納曽式について「言わば北久

根山第二型式の南九州タイプ」とし、磨消縄文系土器と貝殻文系土器の相関図の中で、納曽式を宮下タイプと一括し、（北久根山第二型式）と記すなど、これまで以上に踏み込んだ論及を行っている（**前迫　2002**）。同書に掲載された林潤也氏の論考でも、納曽式は辛川Ⅰ式や宮下式同様、地域分化を果たした北久根山第二型式の南九州版と捉えられている（**林 2002**）。

2005年、前迫氏は南九州における北久根山式を考察する中で、納曽式と、第二型式に含まれる宮下式や辛川Ⅰ式との類似性について述べており、より積極的に北久根山式の後半期の土器と結論付けている。そのため、前迫氏が2002年に著した縄文後期土器の相関図で貝殻文系土器と磨消縄文系土器の中間にあった納曽式は、磨消縄文系土器に含まれることになった（**前迫　2005**）。

Ⅳ期は、前段階における資料の増加や、80～90年代にかけて進展した北久根山式土器研究に呼応したものであろう。その結果、納曽式は北久根山式の在地化という文脈の中で理解されるようになった。

2・問題点の抽出

納曽式土器は、型式設定からまだ30年を経ないにも関わらず、活発な研究が行われてきた。特に90年代以降の、前迫氏による急速な進展には目を見張るものがある。その結果、今日では北久根山式の一種という理解が浸透しているようだ。

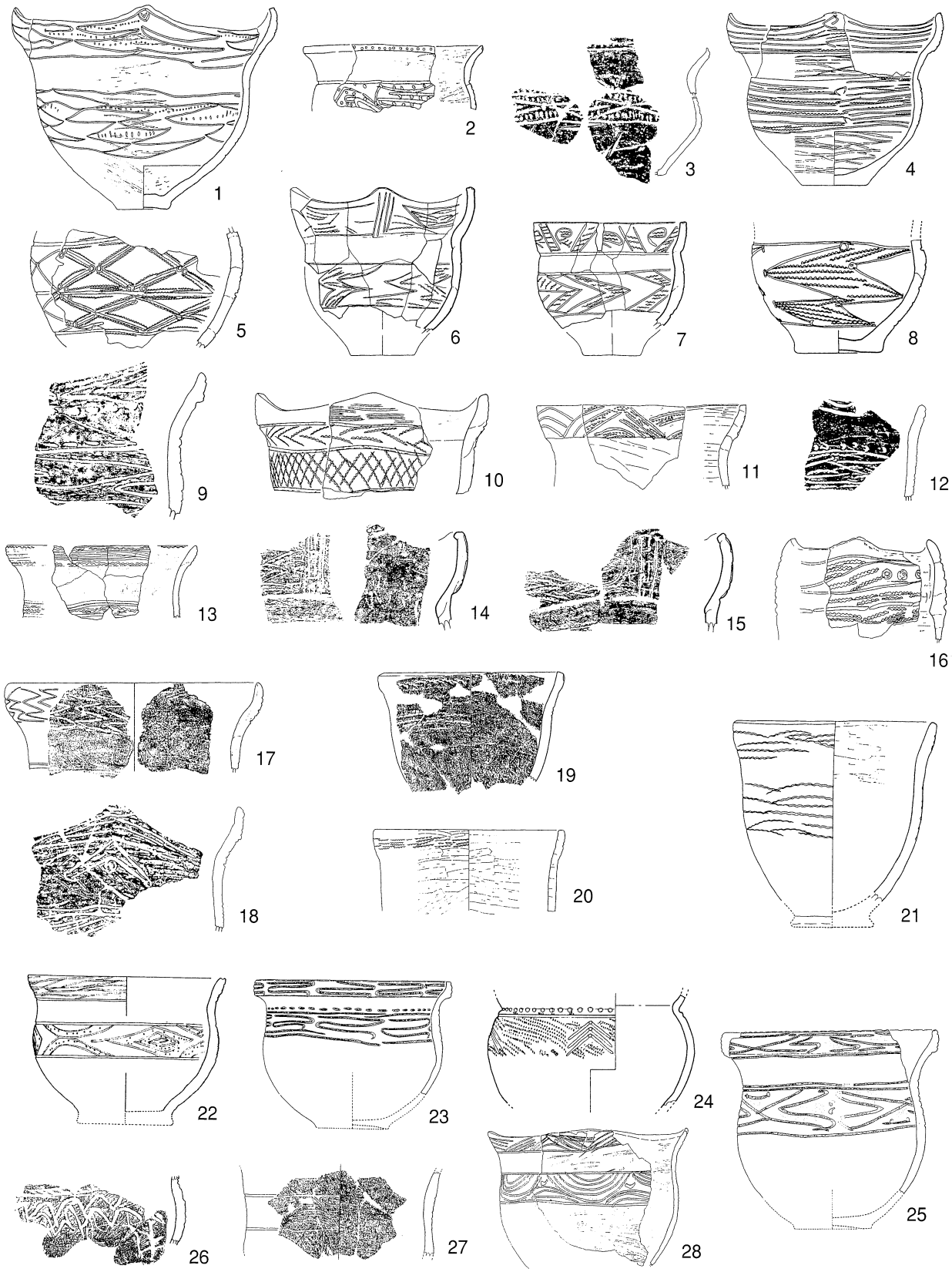
たしかに、市来貝塚の出土状況を見れば、その位置付けは特に問題ないように思える。しかし、そこで論じられる納曽式そのものについて、議論が不足しているように思われる。既に述べたように、市来貝塚や干迫遺跡から出土した、貝殻腹縁刺突を擬似縄文とする一群と、竹ノ内遺跡や藤平小田遺跡から出土した、平行沈線を主体とする一群との間には、文様も器形も大きな隔たりがある。後者の諸属性を見ると、北久根山第二型式よりも、かつて本田氏が述べたように、西平式との関係の方がより密接に思える。その場合、中岳Ⅰ式の存在も気になる。よって、考察を進めるにあたっては、これまで確認されている各地の納曽式を抽出する必要があろう。

3・分類

第21・22図は、各地の納曽式のうち、良好なものを抽出したものである。これを基に考察を進めて行きたい。

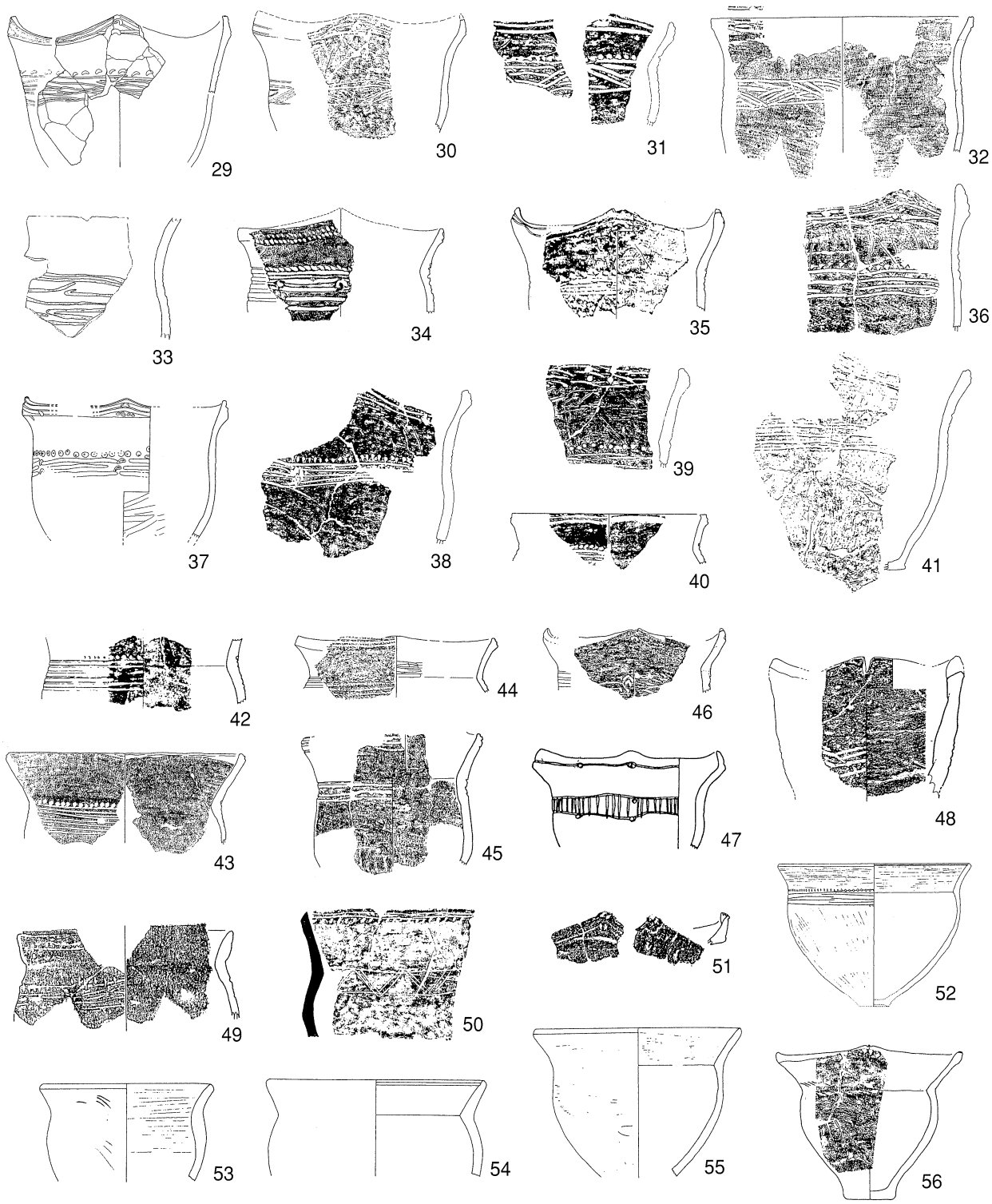
第21図１～３は、沈線により施文を行った後、刺突を行って擬似縄文としたものである。２は、口縁部文様帯が狭い上に、胴部文様帯も刺突によるネガ－ポジの関係を喪失しており、簡略化が窺える。４～16は、沈線と貝殻腹縁刺突が行われるものである。貝殻腹縁刺突は、６～９については擬似縄文の役割を果たしているが、４・12・13・16ではネガ－ポジの関係なく施文されており、５・10では沈線の補助的役割となっている。なお16は内面こそ頸部－胴部の括れがあるものの、外側は全く表現されておらず、他の納曽式とは異質な印象を受ける。17，18は沈線のみによって施文されるものである。18は、口縁部－胴部の文様帯を逸脱して、頸部にまで施文が行われている。19～21は、貝殻腹縁刺突のみで施文されるものである。20は、胴部文様帯を喪失している。22は、２に似るが、胴部文様線が規則的である。23は、刺突文の下位に行われる胴部文様帯は沈線のみである。24～26は縄文が施文される。24は沈線と刺突によりΛ形のモチーフが縦位に連続する。25は22に類似した文様が施文される。26は縄文後に波状沈線が横位に展開する。27・28は胴部の膨らみが弱い一群であり、三角形の区画内に沈線が連続する。

第22図29～32は、胴部文様帯が沈線主体であるものの、平行沈線以外の施文もある一群である。29は、胴部の施文が不規則であるものの、器形や口縁部文様帯の幅や屈曲は西平式そのものであり、縄文を喪失しただけである。30・31は、胴部文様帯に三角形の区画が行われている。32はやや崩れて折帯文に近い文様が描かれる。33～45の胴部文様帯は平行沈線が連続する。うち43までは上位に刺突が行われる。34は口縁部に刺突が行われるほか、胴部にも爪形の刺突を行う。39の口縁部文様帯には貝殻腹縁刺突が行われる。47の胴部文様は沈線と刺突によって構成される。口縁部はくの字状に屈曲する。48は厚手であり、口縁部から胴部にかけて寸胴であるが、波頂部の刻目のみ誇張される。49～52は、鋭利な沈線が施文された一群である。49の口縁部には肥厚帯が認められる。50は厚手であり、三角形の区画が行われるものの、胴部文様は幅狭である。52は口縁部文様帯を喪失しており、胴部文様帯も幅狭である。53～55は、中岳洞穴から出土した無文の一群である。56はやや径が小さいものの、口縁部の外反や胴部の膨らみなど、磨消縄文系土器の器径に近いため掲載した。



第21図　納曽式土器（1）

川上（市来）貝塚：1・2・4・5・8・10・11・16・17・20・21・28，納曽：3・12・18，干迫：6・7・14・15
大龍：9，藤平小田：13，竹ノ内：19・27，丸尾：22，中ノ原：23・25，桑ノ丸：24，松山：26



第22図　納曽式土器（2）

藤平小田：29・30・32・37，納曽：31・36・38・39・41，松山：33，黒草：34，平畑：35・42
大泊貝塚：40，桐木：43，田代ヶ八重：44，竹ノ内：45・46・48，松添：47，宝財原：49・51
片野：50，中岳：52～55，納屋向：56

施文は頸部下位に貝殻腹縁刺突が行われるのみである。

このうち、第21図1～21は、口縁部文様帯の幅が広く、胴部の外反が弱いことや、文様や器形のバリエーションが多いことから、他の納曽式より古く位置付けられる。市来貝塚の出土状況から、前迫氏や林氏が述べたように北久根山第二型式に比定されよう。また第21図22～28は、胴部の膨らみが一定化し、胴部施文のパターン化が進むことから、先の１～21よりも後出であろう。幅広な文様帯から、辛川Ⅱ式（中ノ原タイプ）に相当しよう。第22図29～48は、文様や器形が類似している事から、西平式の前半期に併行すると考えられる。第22図49～52は、文様帯の幅狭化や器形から、西平式の中でも後半に併行すると考えられる。第22図53～56は無文であるが、器形の類似性から、報告どおり52と共伴関係にあると考えたい。

上記のように、納曽式は、貝殻腹縁刺突を多用し、文様のバリエーションの多いⅠ期、沈線と擬似縄文化が進み、器形も規格性が高まるⅡ期、胴部文様の幅が狭まり、擬似縄文が消え、平行沈線化が進むⅢ期、細い沈線のみで構成され、無文土器も出現するⅣ期という流れで推移する。Ⅰ期を納曽１式、Ⅱ期を納曽２式、Ⅲ期を納曽３式としたい。なお、Ⅳ期については、既にある中岳Ⅰ式（**末吉町教育委員会　1980**）の名称を尊重したい。

４・納曽式土器の位置づけ

第29・30図は、納曽式のそれぞれの段階を図示したものである。これを見ると、納曽１式は竹ノ内遺跡、納曽遺跡に飛び地があるものの、おおよそ北薩～鹿児島湾に分布が集中する。一方、２式は主に大隅地方に分布するほか、内陸部からも確認されている。３式は主に島峡部と宮崎平野に集中する。また、中岳Ⅰ式は宮崎県南部に散在するのみである。このように、納曽式土器は、時期が下るに従って、北薩・鹿児島湾→大隅→宮崎へと分布が移動する。この分布は、１式は北久根山第二型式と丸尾Ａ式の、２式は辛川Ⅱ式と丸尾Ｂ式の、３式及び中岳Ⅰ式は西平式と納屋向式の分布の境界付近にある事が分かるだろう。また、上の原第２遺跡では、40号竪穴より納曽３式と納屋向式が出土しており、共伴関係にあったと考えられる。つまり、納曽式は北久根山式のローカルタイプとして北薩で成立したが、その後は磨消縄文系土器の先駆けとして、集団と地域を移動しながら存続した土器型式といえる。

５・その後の展開　－平畑遺跡出土土器を中心として－

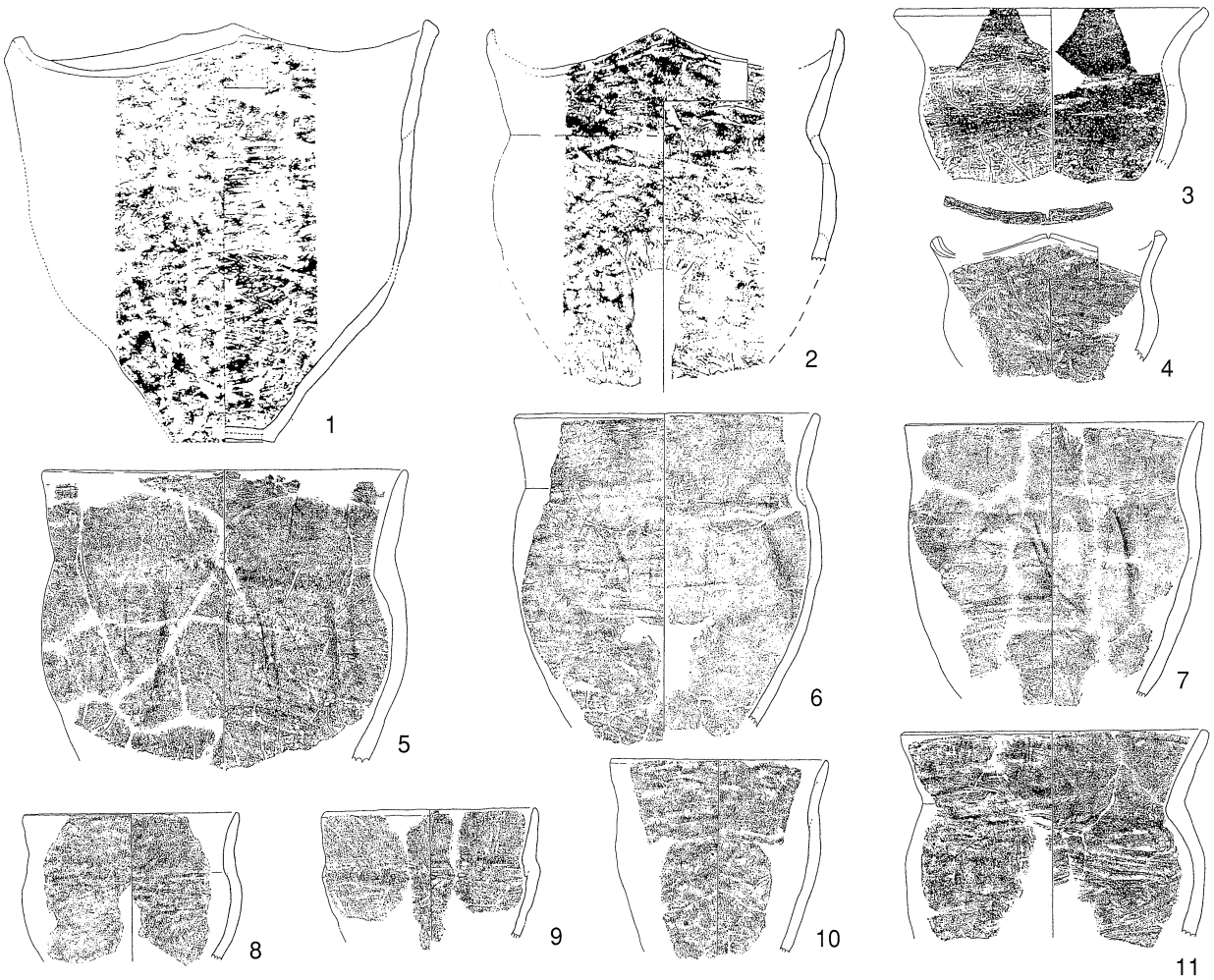
集落の変遷上影響してくるため、中岳式以降の展開についても簡単であるが論じたい。

中岳Ⅰ式に後続する中岳Ⅱ式は、三万田式～御領式期に相当し、都城盆地で主体的に出土する（**桒畑　1989a**）。一方、宮崎平野の平畑遺跡から出土した中岳Ⅱ式は、後述する平畑第１段階先行期や高野原タイプ期に共伴し、同一器形の無文土器を派生させながら上加世田式期まで残存する（**桒畑1999**）。

三万田式期の宮崎平野では、納屋向式に代わって、頸部内器面で大きく抉れ、ナデを主体とした無文土器が成立する（第23図）。恐らく、三万田式における深鉢の一器種[8]を模倣したのであろう。最も多く出土した平畑遺跡では、深鉢Ｃ－３ｂ・ｃのうち（**菅付　1985a**）、頸部内器面に稜の入るものとして一群を成す。元野地区では、本野原遺跡から少量、高野原遺跡から中量確認されていることから、本野原遺跡→高野原遺跡の集落移動期に相当すると考えられる。この一群は、他に竹ノ内遺跡[9]、学頭遺跡[10]でも認められる。本書では、桒畑氏の平畑遺跡４段階区分と区別し、暫定的に「平畑第１段階先行タイプ」と称したい。なお、図面では深鉢形のみ掲載したが、これに伴う浅鉢は、現時点では不明である。

平畑第１段階先行タイプと第１段階の中間には、田野町高野原遺跡から主体的に出土した一群が挙げられる（**田野町教育委員会　2004**）。三万田式でも新しい段階の精製浅鉢と共に出土していることから、鳥井原式併行期と考えられる（**富田　1983, 1987**）。この土器群は、「高野原タイプ」と称したい（第24図）。同類の土器は、平畑遺跡の報告書中で、三万田式併行とされた深鉢Ⅰ－１・Ｊ類が挙げられよう（**菅付　1985a, 1985b**）。他に学頭遺跡[11]、竹ノ内遺跡[12]等で確認されている[13]。器面のミガキは前段階より丁寧なものが多く、この時期更に三万田系土器の受容が進んだと考えられる。なお、既に述べたとおり、精製浅鉢とはセット関係にあるが、詳細な器種構成は不明である。

２つのタイプは、比較的典型例に近い三万田～鳥井原式が出土する新富町春日遺跡では全く認められないことから、分布は、宮崎平野でも西部・南部・田野盆地に限られていたようである。



第23図　平畑第１段階先行タイプ

平畑：1・2，学頭：3，竹ノ内：4～11

第24図　高野原タイプ

高野原B・C区　SA－19内出土

高野原タイプの後は、桒畑氏による平畑第１～４段階に変遷すると見られる[14]。このように、北部を除く宮崎平野は、入佐式に至るまで、独自の土器が残存したと考えられる（**桒畑　1999**）。

６・課題

先に述べたように、納曽式は、磨消縄文系土器の影響を基に成立した土器型式である。しかし、その属性は、各段階の磨消縄文系土器を忠実に模倣しているわけではない。例えば、２式以降の口縁部文様帯の幅は、常に前段階の磨消縄文系土器に近い。このような時期差は、他にもあるかも知れない。こうした「揺らぎ」を踏まえながら、今後、更に考察を深める必要がある。また、型式論から離れるが、２式以降は、遺跡内で貝殻文系土器と共に製作されたことになる。こうした様相が出現した背景も考える必要があろう。

また、納屋向式から平畑第１段階の間について、本書では平畑第１段階先行タイプ、高野原タイプと称したが、この内容も検討すべきであろう。汎西日本的な器種構成や動態と比較し、どのような差が見られるのかを検討することによって、黒色磨研土器の受容の実態がより明らかになるのではないだろうか。

（註）

７）：なお、納曽遺跡からは丸尾式が出土していないために、本田氏が想定した型式変遷は実際に行われたと考えられる。

８）：（**宮崎県総合博物館　1987**）の、510～515等である。

９）：（**宮崎県教育委員会　2000c**）の、851～858のことである。

10）：（**宮崎県教育委員会　1995**）の、30、35のことである。

11）：（**宮崎県教育委員会　1995**）の、91～96のことである。

12）：（**宮崎県教育委員会　2000c**）の、975～978のことである。

13）：なお、桒畑氏の設定する平畑遺跡の分類のうち、深鉢D類の39（報告書の616）は第１段階とされているが、これは、その特徴から高野原タイプもしくはその漸移的な土器に含まれる可能性がある。

14）：平畑遺跡出土土器については、北郷氏により平畑晩期Ⅰ～Ⅳ式が設定され（**北郷　1985**）、後に清田純一氏がⅠ～Ⅲ式を編年に組み込んだ経緯があるが（**清田　1998**）、本書では、桒畑氏の４段階区分を支持する（**桒畑　1999**）。ただし、平畑第１段階は鳥井原式？～御領式とされているが、鳥井原式は高野原タイプと併行関係にあると判断したため、御領式併行とする。

第６節　小結

これまで、南九州の縄文中期後半～後期末の土器編年が抱えている問題点を整理し、設定や細分を行った。

しかし、本書で新たに設定した土器型式はあくまで試案である。各節に「課題」として述べた問題点はいまだ残されており、今後議論が進めば、土器型式の枠組みが変わることも十分予想される。また、市来式や内面施文土器など、筆者の力量不足により、今回再編ができなかった型式も存在する。今後、更なる研究の進展を望みたい。

第Ⅳ章　南九州縄文後期土器の変遷

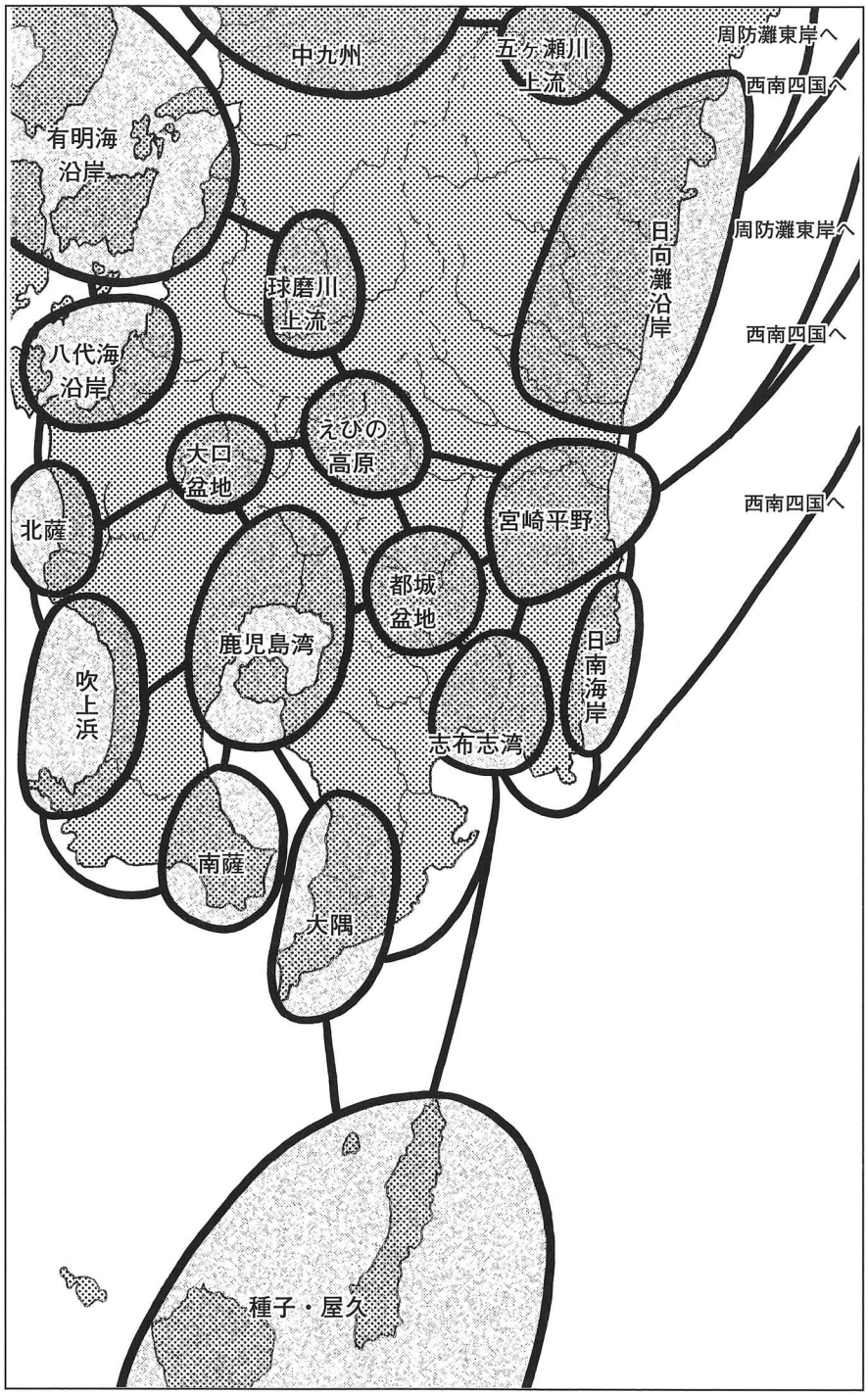
第Ⅰ章で、南九州の後期土器について再編を行った。しかし、南九州、とりわけ宮崎県域においては、縄文中期後葉～晩期の土器について、基本的理解が不足した状況にある。そこで、出土土器の説明を行う前に、本野原集落形成期における土器の動態を概観したい。なお、土器以外の面でも、遺跡分布等、重要と思われる点については併せて記したい。

1期

不確定要素が多いため、分布状況から推論を提示するに留めたい。

春日式に後続する土器型式の研究は、現在、中尾田Ⅲ類から並木式と大平式が分岐したとする徳永氏（**徳永　1994**）・三輪氏（**三輪　1996**）と、三型式を同時期とする東氏（**東　1989 1994　1999**）の二つの立場がある。宮崎県南部から志布志湾に大平式が、薩摩半島に並木式が、鹿児島湾とえびの高原は三群が混在する、という傾向が見られる。

並木式は、今日阿高式との関係も注目されている。冨井眞氏が、並木式の後期は阿高式と併行し、中津式の伝播直前まで残存するとした一方（**冨井　2001, 2004**）、荒木隆宏氏は、両型式を前後関係と捉え、併行関係は殆どないとしている（**荒木 2003**）。東南九州では、並木式と阿高式、更に中津式の出土が限られているため、両者の説を紹介するに留めたい。また、表の作成に当たっては、とりあえず従来の並木→阿高の編年観に従った。



第25図　中・南九州の地理区分

2期

東南九州で宮之迫１式が、西九州で阿高１式が成立する。こ

うした分布差は、両型式が大平式と並木式の分布域を継承した結果であろう。ただし、宮之迫1式は、大平式に比べて鹿児島湾での出土が少ない反面、1遺跡からの出土量は増加傾向にある。逆に阿高１式は、出土遺跡数・出土量共に並木式より減少傾向にある。

3期

東南九州では宮之迫2式、西九州では阿高2式に変遷する。宮之迫2式は、１式に比べて出土遺跡数が増加し、分布域も拡大する。ただし宮崎平野では、１遺跡当たりの出土量は減少しており、分散化の兆しを見る事ができる。出土遺跡の増加は、阿高2式からも窺える。なお、２・３期の、宮之迫式と阿高式は、施文部が共通しており、両型式が密接な関係にあった事を示している。なお、五ヶ瀬川流域や日向灘沿岸は、１～３期まで空白地に近い状態が続く。

4期

東部瀬戸内地方において、初期磨消縄文系土器である中津式が成立し、中・四国に急速に拡大を遂げる。九州に中津式が到達したのは２式とされている。当時の九州は、西九州に阿高３式～南福寺式、西北九州に阿高３～坂ノ下式、東北九州に西和田式、東南九州に宮之迫２式と、阿高系土器が地域別に分布するが、磨消縄文系土器の波及により、それぞれ影響を受ける。

北九州は、中津式が主体的に出土しており、瀬戸内から磨消縄文系土器を用いる集団が直接移動したと考えられる。磨消縄文系土器は、北九州を橋頭堡として福岡平野に進出し、阿高３式～坂ノ下式と混在する。天神山貝塚等では、在地土器に見られる凹点文を施文した口縁部の下位に磨消縄文を行った「折衷土器」も確認されている。

東北九州では、貝殻腹縁や刺突によって擬似縄文を行ったコウゴー松式（**久住町教育委員会　1974**）が成立する。菱形モチーフを多用し、退化したＪ字文も認められる。しかし、コウゴー松式の調整は基本的にナデであり、中津式におけるミガキではない。視覚に反映されやすい部分のみ伝播した理由は、中津式を模倣して製作したためであろう。

東南九州では、宮之迫２式に大きな変化をもたらした。つまり、平行沈線化、細線化が進んだ宮之迫３式への変遷である。また、コウゴー松式の菱形モチーフは、宮之迫式でも認められる。また、擬似縄文で充填される平行沈線も、鍵状にクランクさせる等、磨消縄文系土器の影響をより強く受けた土器も存在する。

宮之迫３式は、宮崎平野やえびの高原において主体的に確認される。ただし、１遺跡からの出土量は宮之迫２式よりも減少しており、小集団化が一層進んだと考えられる。また、A群とB群の分布上の相違も現れ始める。

八代海沿岸は、阿高３式の主分布域であるものの、柿内遺跡や南福寺貝塚で中津式が出土しており、北九州－福岡平野－中九州－有明海沿岸－八代海沿岸と言う西回りの情報流通路の存在を物語る。しかし、中津式の施文手法が在地土器に与えた影響としては、黒橋貝塚等で、僅かに縄文を施文する土器が見られる程度である。これは、阿高３式の文様では、中津式の受容が困難であった事や、そもそも情報量が少なかった事が理由であろう。宮之迫式と阿高式は、それまで器形や施文部等が共通しながら変遷していたが、磨消縄文系土器の到来により分岐する事になった。

この時期は、磨消縄文系土器のファースト・インパクトに位置付けられる。在地の土器に、磨消縄文の施文手法を反映させることは、この時期の特徴と言えるだろう。

5期

中津式は、瀬戸内では福田Ｋ２式、西南四国では宿毛式へと変遷する。主体的分布域は、東北九州で大幅に拡大し、日向灘沿岸までが主分布域となる。客体的分布域を含めれば、福田Ｋ２式は九州のほぼ全域に及んでおり、磨消縄文系土器の浸透が飛躍的に進行する。

東北九州の海岸沿いでは、小池原下層式が製作される。この型式は文様・調整・器種構成の点で福田Ｋ２・宿毛式と大きな違いはないため、西瀬戸内から直接集団が移動し成立したと考えられる。一方、東北九州の内陸部に分布した融合土器のコウゴー松式は、３本沈線を行うものに移行した後（**秦　2000**）、終焉を迎える。

日向灘沿岸にあたる門川町門川南町遺跡の磨消縄文系土器は、福田Ｋ２・宿毛式とはやや趣が異なるが、それまで遺跡

の空白地であったことを考慮すると、西南四国から移動した集団が、製作したと推測される。こうした地域差は、福田K２・宿毛式が規格性に乏しく、制約が少なかったことも一因する。この型式は、宮崎平野を経由して、宮之迫式の分布域である内陸へと浸透した。

東南九州では、３式より細線化、平行沈線化が更に進んだ宮之迫４式の成立によって、磨消縄文系土器を受容する地盤がほぼ出来上がる。なお、宮崎平野から日南海岸では、既に本野原１式が成立したと考えられる。西南九州では、阿高式に後続する南福寺式が成立する。同地域における福田K２式の出土量は増加するが、この後も出水式を成立させるなど、磨消縄文系土器化が進みつつある他地域とは相容れない様相を見ることができる。

５期は、４期に続く磨消縄文系土器のセカンド・インパクトの時期と言える。東南九州の在地土器も、磨消縄文系土器の影響を受けた土器が成立する。この時期、西瀬戸内・西南四国では遺跡数が急増するが、東九州の沿岸部も、瀬戸内から集団が直接移動し、集落が形成されたのであろう。また、磨消縄文系土器の主体的分布域の拡大化の一方で、西和田式、坂ノ下式、宮之迫式といった、各地の在地系土器は終焉を迎える事になる。

６期

磨消縄文系土器に変化が表れる。それは、東瀬戸内では広瀬40号土壙段階が、四国では松ノ木式や三里式が成立するなど、地域差が明瞭となった点である（**犬飼　2001**）。

松ノ木式は、南九州で近年出土が増加しており、川南町野稲尾遺跡[1]、宮崎市上の原第2遺跡、山川町山ノ中遺跡[2]、北方町川水流遺跡から出土する[3]。中でも、川水流遺跡の土器群は、松ノ木式を変化・発展させ得るだけの技量を備えていたことを窺わせる。

東南九州では、本野原２式に入り、志布志湾沿岸まで主体的分布域を拡大させる。一方、鹿児島湾以西では成川Ka式が成立し、鹿児島湾一帯に主体的に分布する。

前葉後半における磨消縄文系土器の地域分化に呼応するように、南九州も本野原式や成川Ｋａ式に分化する。

７期

豊前地方において、縁帯文土器の初期にあたる小池原上層式が成立する。これは、豊後水道対岸で成立した平城式のA類と同内容であるが、九州は、この時期になって始めて磨消縄文系土器の受容域から発信源の一角へと昇格することになった。その主体的分布は、北部九州一円に及ぶほか、東九州では日向灘沿岸を南限とする。同型式は、宮崎平野を介し、内陸部にも拡散したようである。

南九州は、宮崎平野が本野原３式、鹿児島湾が成川Ｋｂ式である。この時期、それまで遺跡密集地であった西南四国の遺跡が減少したため、鹿児島湾と宮崎平野は、志布志湾岸を仲介して、相互に結び付きを強めるようになる。なお、出水式の主分布域である八代海沿岸～北薩でも、良好な状態の小池原上層式が出土するなど、有明海沿岸を介した北部九州との結び付きが推測される。

磨消縄文系土器が、九州東北部で発信地に変貌を遂げた点で、7期は大きな変動があった時期と言えよう。しかし、西南四国から東南九州への情報流入は減少傾向にある。

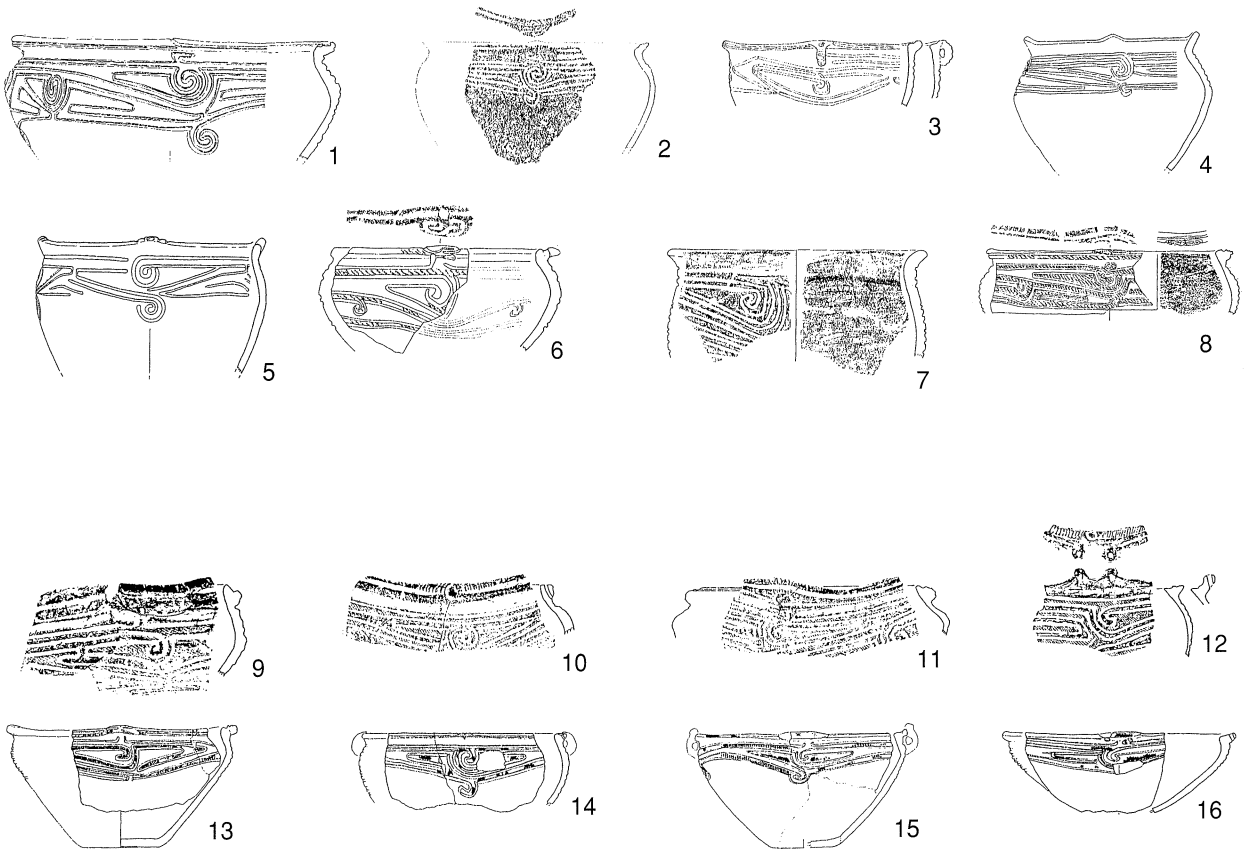
８期

北薩の出水式を祖型とし、貝殻文系土器の初源とする市来式が成立し、宮崎平野に後退した本野原4式、鹿児島湾に限定された橋牟礼川タイプを併呑する。また、市来式全体の土器の属性を見ると、貝殻条痕、貝殻腹縁刺突を多用し、沈線が太い宮崎平野～志布志湾と、器面調整はナデを用い、沈線の鋭利な鹿児島湾～内陸部、貝殻腹縁刺突により独特の文様を行う種子・屋久地域と、地域によって細かく分ける事ができるのも、同型式の特徴と言える。そうした視点から、有明海沿岸で成立した御手洗Ｃ式も、市来式の一種に位置付けられる。よって、この時期における市来式の分布域は、有明海沿岸から宮崎平野までである。

北部九州では、九州化された縁帯文土器として鐘崎式が成立し、豊後水道の情報圏を通して、一部西南四国にも拡散す

る。その影響を受けて、日向灘や宮崎平野にも土器が伝播するが、その量は前段階と比べ大差ない。その一方で、この土器は福岡平野をはじめ、西北九州を分布の中心とするために、八代海沿岸を経由して、鹿児島湾や大口盆地に進行する西回りルートが一気に活気付く。内陸にあたる須木村田代ヶ八重遺跡や大口市年ノ宮遺跡から良好な個体が出土するのはそれを象徴している。

市来式と鐘崎式の成立により、九州は南北に二分される。鐘崎式は南九州からも出土するが、それは北部九州のものと大きく異なる（第26図）。南九州は、幅広の口唇部に、穿孔と渦巻や連弧文を施すものが多く、頸部の括れは稀であり、胴部文様帯のうち渦巻文から流れた鍵状文は、北部九州とは逆の右側に流れるものが多い[4]。胴部文様帯は幅狭であり、2段渦巻のうち上部は橋状把手に行われることも多く、最終的に省略される。これらの特徴は、有明海沿岸に分布する鐘崎式[5]を誇張させたものと言える。この一群を象徴する遺跡として、加治木町干迫遺跡が挙げられる。土器の出土量は、九州の縄文遺跡の中でも突出するが、後期中葉～後葉にかけて一定量含まれる磨消縄文系土器は、胎土分析の結果、市来式などの貝殻文系土器と差がなかったことから、遠隔地からの搬入ではなく、遺跡内及びその周辺で製作したと考えられる。水ノ江氏は、この理由を「器種補完」としている（**水ノ江　1993**）。たしかに、北部九州の鐘崎式は、時期が新しくなると共に深鉢形を呈するが、南九州ではそれほど深くならないことから、この土器が何らかの機能を伴っていたと想定することも可能であろう。しかし、前迫氏も指摘するように、磨消縄文系土器の出土は市来式に必ずしも共伴しないことや、後続する北久根山式では、深鉢形を呈するいわゆる第一型式も多く出土している等の矛盾点も存在する（**前迫　2004**）。そもそも、生活用具として浅鉢という器形が必要であったとしても、わざわざ磨消縄文という、異なる系統の施文を行う必要はないだろう。以上の理由から、筆者も器種補完には疑問を呈しておきたい。ともあれ、この時期南九州で貝殻文系



第26図　九州南北の小池原上層式～鐘崎式
中村石丸：1～8，麦之浦：9～11，草野貝塚：12，干迫：13～16

土器と磨消縄文系土器の双方が製作されたことは重要であり、後に融合土器が成立する際の基盤となったと予想される。その意味で、南九州的鐘崎式は、融合土器の祖型に位置付けられよう。

9期

北久根山式に関しては、近年、林氏（**林　2002**）や前迫氏（**前迫　2002, 2004**）により急速に整備が行われたため、その成果も踏まえて説明を行いたい。つまり、従来の第一型式と第二型式を時期差と捉えた上で、第二型式は東北九州の石町式の影響を受けて地域分化を遂げたとする解釈である。本書では、北久根山式のうち先行型式とされる浜ン洲タイプ、第一型式、そして内陸部で第一型式が変容した段階を９期、第二型式に属する宮下式、納曽１式を10期とする。

この時期、情報圏の解体した東北九州は、瀬戸内から彦崎Ｋ２式系土器群が波及した結果、石町式が成立する。しかし、まだ他地域に拡散する影響力は弱く、日向灘沿岸や宮崎平野へは、同じ彦崎Ｋ２式系土器群に属し、中・東部瀬戸内に分布する片粕式が散見される程度である。

北久根山第一型式の分布の中心は中九州であり、８期からの南下が窺える。地理上の問題から、南九州への波及も西回りルートが主流となる。一方、東回りルートは、次第に縮小傾向にある。ごく僅かに、丸野第２遺跡や本野原遺跡からも出土するが、W字貼付文を消失したものや、W字貼付文以外は全く異なるもの等、大きく変質する。なお、干迫遺跡では、継続して北久根山第一型式が製作された。

大口盆地からえびの高原に至る山間部では、口縁に刻目や細沈線を行った肥厚帯を有し、波頂部にはW字状の突帯が貼り付けられるなど、市来式と北久根山式の中間的な土器が多く出土する。これは、前迫氏によって「北久根山式（内陸部タイプ）」とされた一群である。

南九州の主体は、市来Ⅱ式である。しかし有明海沿岸では、８期から９期の間に、御手洗C式が終焉し、北久根山式に転換したようである。つまり、後に顕著となる、磨消縄文系土器による貝殻文系土器分布域の侵食は、この時期から始まったと考えられる。

10期

既に述べたように、北久根山式が地域分化を遂げ、中九州で辛川Ⅰ式、西北九州で宮下式、薩摩半島～鹿児島湾で納曽1式が成立する。貝殻文系土器は、市来式の口縁部が屈曲し、文様が簡略化された丸尾A式が成立する。日向灘沿岸では出土量を減らすものの、宮崎平野から大隅半島では、市来式同様に主体的分布を見せる。双方の中間に位置する鹿児島湾では、納曽1式、辛川Ⅰ式、丸尾Ａ式が混在する。鹿児島湾の出土量が拮抗した事により、貝殻文系土器の後退は一層明確になる。

10期は、近畿～瀬戸内地方に波及した彦崎K2式系土器群が九州に本格的に拡大した時期でもある。九州で分化しながら成立した北久根山第二型式はその影響であり（**林　2002**）、その後、辛川Ⅱ式、西平式へと変遷しながら、口縁部や胴部の文様帯を圧縮させる。この流れは、いち早く影響を受けた四国における片粕式→広瀬上層式→伊吹町式の変遷と同じである（**木村　2005**）。彦崎K2式系土器群の流れは、やがて元住吉山系土器に受け継がれ、以後型式内容を接近させながら、連動して無文化・黒色磨研土器化を遂げる。そのなかで、なお貝殻文系土器を使用する日向・大隅地域は、磨消縄文系土器群によって、分布上包囲された状態となる。

11期

丸尾A式に後続して、丸尾B式が成立する。日向灘沿岸地域にも再び分布するが、鹿児島湾の出土状況に大きな変化はない。ただし、えびの高原では出土量が大幅に減少する。

中九州では、辛川Ⅰ式の文様帯が圧縮された辛川Ⅱ式が成立する。しかし、南九州への波及はごく僅かである。一方、融合型式である納曽2式は大隅地方を中心に出土する。

なお、鐘崎式～辛川Ⅱ式に併行する台付皿形土器の一部には、特有の文様モチーフが使用される。第27図に主要なものを掲載した。１は皿形土器であるが、上面にS字状の沈線が一定間隔で施文される。また２は、単位部にケズリ出しによ

るＳ字状の文様が描出される。これは、小池原上層式の口唇部文様に類似する。３は、口唇部に短沈線が巡り、口縁単位部に穿孔を有す突帯が２ヶ所貼付けられ、その間に渦巻文が施文されるが、これは「南九州における鐘崎式」の一般的な口唇部文様である。４は、波頂部から内面にかけて擬似縄文によって充填されたS字状が伸びるが、これは北久根山式の中でも前迫氏が浜ン洲タイプとした一群の胴部文様と同じである。５の単位部におけるM字状の貼付文は、北久根山第１型式の単位部貼付文と同じである。６の上面施文は、磨消縄文を行わないものの、北久根山第２型式の胴部文様に類似する。更に、７や８の上面に行われる、沈線内を貝殻腹縁刺突によって充填する手法は、納曽式に類似する。９の脚台部に行われる磨消縄文の文様モチーフは、辛川式そのものである。台付皿形土器の中には市来式や松山式を模倣したと思われるものも存在するが、南九州における貝殻文系土器と磨消縄文系土器の割合に反して、台付皿形土器におけるモチーフは、磨消縄文系土器に系譜を持つものが多い。台付皿形土器は、紅白の塗彩を施した割合が高く、（**瀬戸口　1984**）深鉢形土器に比べて特殊な器形と認識されていたようであるが、（**前迫　1996**）この土器の文様に客体的な磨消縄文系土器を多く用いた背景には、南九州の縄文人の心理が反映されており興味深い。

12期

丸尾B式に後続して、納屋向式が成立する。主体的分布域は宮崎平野にほぼ限られており、丸尾B式の段階で拡大した日向灘沿岸や、それまで貝殻文系土器の分布の中核を担った志布志湾や都城盆地は、分布域の縮小により空白に近い状態となる。これは、大隅やえびの高原で西平式前期の出土が増加傾向にあることと無関係ではないだろう。このように、磨消縄文系土器に押され、貝殻文系土器は縮小し、終息へと向かう。

この中で、種子・屋久地域や干迫遺跡のあり方は非常に特異である。磨消縄文の主体的分布域に含まれた後も、変わらず貝殻文系土器を製作し続けるためである。殊に、それまで積極的に磨消縄文系土器を製作し続けた干迫遺跡が、貝殻文系土器を製作したことは興味深い現象である。

磨消縄文系土器は、西平式の前期に当たる。この土器は、えびの高原で大幅に出土量を増加させる。宮崎平野へは、主にこの地域を通して入ってきたと予想されるが、一方で、海を隔てた中・四国からもたらされた可能性もある。急激に入り込んだ磨消縄文系土器の情報は、宮崎平野でも納曽３式を成立させる。また、当時宮崎平野で一般的に製作された納屋向式自体、口縁部断面形や施文部位などに西平式の影響が見られることも忘れてはならない。これは、磨消縄文系土器を受容する前段階の様相と言えるだろう。

なお、この時期以降、日向灘沿岸、志布志湾、日南海岸、えびの高原では、遺跡の分布が著しく希薄になる。縄文中期後半から受け継がれてきた九州南部の小地域圏や情報伝達網が崩壊したためと考えられる。

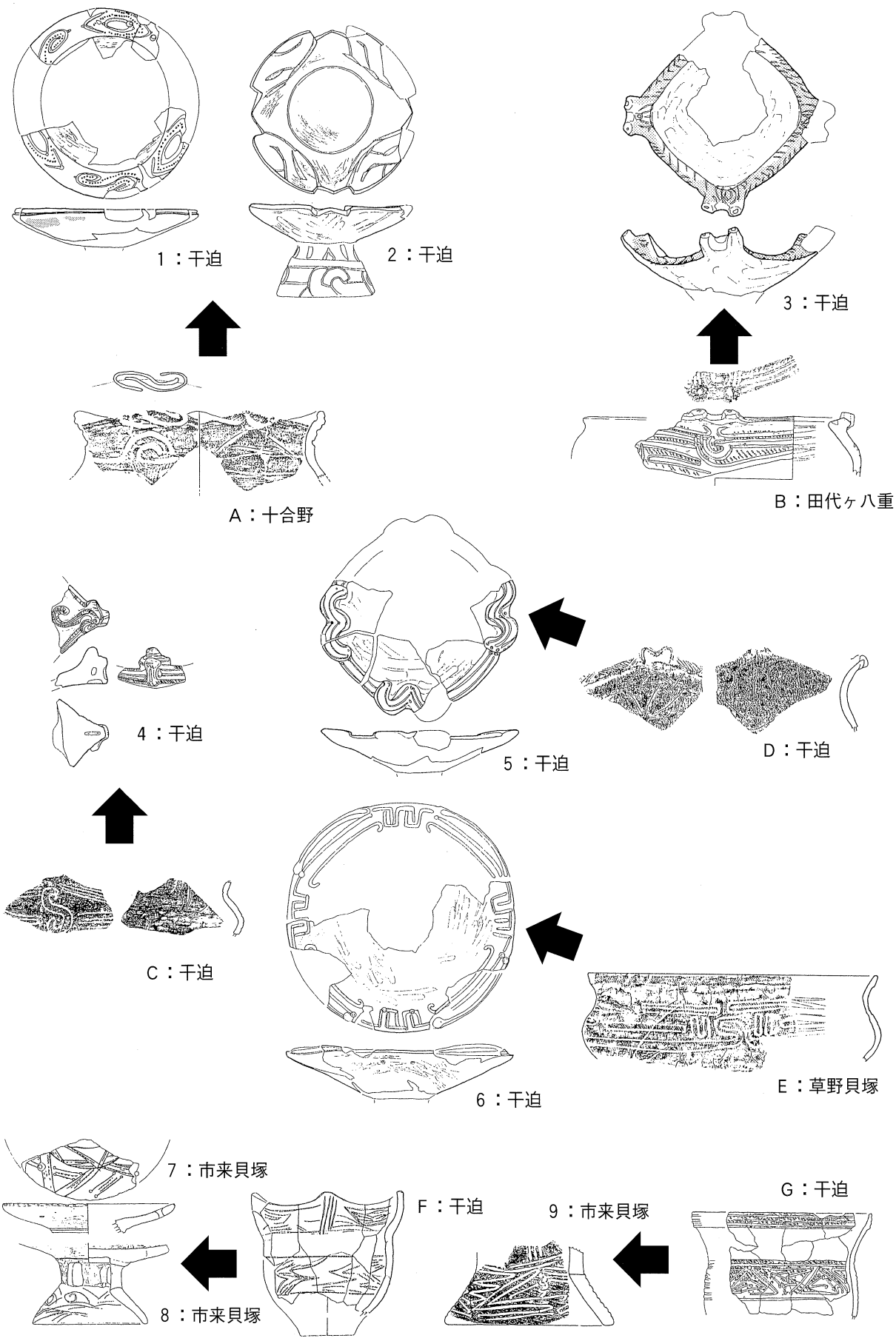
13期

宮崎平野一体は、依然として納屋向式である。併行する磨消縄文系土器の西平式後半期は、この時期更に文様帯の幅が狭くなり、平行沈線化を遂げる。分布の変化としては、えびの高原や大口盆地でやや減少し、五ヶ瀬川上流のうち高千穂盆地で増加する程度であり、全体的に大きな変化はない。一方、磨消縄文系土器の模倣土器として、細線化が進んだ中岳Ｉ式が製作される。この土器は都城盆地を中心としており、少量宮崎平野にもたらされる。

なお、この時期に前後して、八代海沿岸や北薩にかけて分布した貝塚遺跡はほぼ途絶える。特に薩摩半島は、全体的に遺跡分布が希薄な状態となる。中九州では、一転してこの時期から晩期前半にかけて遺跡数が密集する傾向にあり、歩調を合わせるように大規模集落も登場する。（**松本　2002**）遺跡数の増加は、やがて福岡平野にも拡大する。

14期

13期に納屋向式が終焉を迎えた事により、宮崎は全域が三万田式の分布域となる。高千穂盆地では、陣内遺跡を中心に大規模遺跡が幾つも出現する。宮崎平野でも、三万田式の情報が流入し、平畑第１段階先行タイプが成立するが、器形や属性において地域色が残されていることから、三万田式分布圏と、製作者まで含めた活発な交流は行われなかったのであろう。この土器は、より三万田式に近い調整を備えた高野原タイプに受け継がれる。これらの土器群の分布域は、宮崎平



第27図　台付皿形土器とその“原案”

野西部や南部、田野盆地と、非常に限定的なあり方を示す。都城盆地では、三万田式－御領式に併行して中岳Ⅱ式が製作される。このように、土器は依然として独自性を持つが、これまで貝殻文系土器を製作し続けたこれらの地域において、磨消縄文系土器の模倣土器が主体となった点は、大きな変化といえよう。

鹿児島では、三万田式の主要分布域となると共に、遺跡の過疎化が一層進行し、鹿児島湾でも出土遺跡は大幅に減少するほか、その他の地域ではほぼ崩壊状態となる。

15期

南九州は、全域が御領式の分布圏となる。宮崎平野南部は、平畑第１段階となり、依然として器形や調整で相違が認められるが、その差異は14期に比べると各段に縮まる。こうした地域色が払拭されるのは、縄文晩期の入佐式以降のことである。

以上、大雑把ながら概観を説明してきた。南九州は、当初磨消縄文系土器に寛容で、土器の特徴を積極的に在地系土器に取り入れ、本野原式や橋牟礼川タイプなど、在地化された磨消縄文系土器も出現する。しかし、市来式に始まる貝殻文系土器の成立した中葉以降、北部九州の磨消縄文系土器が南部九州の貝殻文系土器を西側から陵駕する構図となる。磨消縄文系土器に侵食される地域は、その前に模倣土器が製作され、磨消縄文系土器へ移行する漸移的様相を見ることができる。磨消縄文系土器に侵食されると、直後に遺跡の分布が極めて希薄になる傾向が見られる事も、重要な特徴と言えるだろう。

(註)

1）：川南町教育委員会の島岡武氏の御教示による。

2）：鹿児島県埋蔵文化財センターの東和幸氏の御教示による。

3）：北方町教育委員会の小野信彦氏、日田市教育委員会の今田秀樹氏の御教示による。

4）：日田市教育委員会の今田秀樹氏の御教示による。

5）：前迫氏の提唱する白浜タイプのことである。

（第15～18表　土器出土状況表について）

＊表中の型式分類は、報告書及びその資料を用いた論考の記述と一致しない場合がある。

＊項目にある記号は、○：5個体以下、◎：５個体以上30個体以下、●：30個体以上、である。

＊宮之迫式の型式弁別は、破片資料は沈線の太さを主な基準とした。

＊市来式の型式弁別は、一般的な分類基準である口縁断面形以外に、口縁部文様帯の幅も追加した。

＊鐘崎式は、北部九州では細分されているが、南九州でも同様に解釈できるとは限らないうえ、市来Ⅱ式の細分も提示されていないことから一括した。

＊北久根山式は、今日では鉢形を呈するものの一部も第一型式と認識されているが、破片資料の分類の難しさから、深鉢形を第一型式、鉢型を第二型式とする旧来の分類基準に準じた。なお、北久根山第二型式のうち、納曽1式に該当しないものは、ここでは宮下辛川Ⅰ式と纏めた。

＊西平式は、後藤晃一氏の編年（**後藤　2004**）を基に、西平式・太郎迫式・三万田Ⅰ式併行期のⅡ期を前半、Ⅲ期を後半と判断し分類した。

（表で用いた遺跡の文献）＊行頭番号は、第15～18表中の文献番号である。

1：宮崎県教育委員会　1993「吾平原第2遺跡　宮ノ前第2遺跡　城ノ平遺跡」
『国道218号線高千穂バイパス建設関係発掘調査報告書』

2：宮崎県埋蔵文化財センター　2003「五ヶ村遺跡　大野原遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第75集

3：高千穂町教育委員会　1985「梅ノ木原遺跡」『高千穂町文化財調査報告書』第4集

4：高千穂町教育委員会　1989「陣内遺跡（第2次調査）丸山石棺群（第3次調査）春姫登横穴墓」
『高千穂町文化財調査報告書』第8集

5：宮崎県総合博物館　1987「陣内第2遺跡　蓮ヶ池横穴墓群－遺物編－」『埋蔵文化財調査研究報告』Ⅰ

6：宮崎縣　1988『宮崎県史　先史編　考古1』

7・8：宮崎県教育委員会　1994「田向遺跡・平谷遺跡」
『県道向山・日之影線道路改良事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』

9：澤　皇臣　横山邦継　1982「宮崎県東臼杵郡北川町可愛遺跡の縄文遺物」『宮崎考古』第8号

10：宮崎県教育委員会　1996「門川南町遺跡」『一般国道10号門川拡幅南町地区事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

11：東郷町教育委員会　1991「樋田遺跡」『県営圃場整備事業（坪谷川地区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

12：木城町教育委員会　2000「石河内本村遺跡」
『県営中山間地域総合整備事業木城地区石河内工区圃場整備工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』

13：宮崎県・西都市教育委員会　1994「宝財原遺跡」『西都市埋蔵文化財発掘調査報告書』第20集

14：田中熊雄　1962「綾町尾立遺跡の研究（１）」『宮崎大学学芸学部紀要』13号
田中熊雄　1962「綾町尾立遺跡の研究（２）」『宮崎大学学芸学部紀要』14号

15：宮崎県埋蔵文化財センター　1999「西下本庄遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第15集

16：新富町教育委員会　2004「祇園原遺跡・春日遺跡（本文編）」『新富町文化財調査報告書』第39集

17：高岡町教育委員会　1996「橋山第1遺跡（A・B地区）」『高岡町埋蔵文化財調査報告書』第9集

18：宮崎県教育委員会　1995「学頭遺跡・八児遺跡」『県道高岡・郡司分線道路改良事業に伴う発掘調査報告書』

19：宮崎県埋蔵文化財センター　2000「上の原第2遺跡　上の原第1遺跡　上の原第4遺跡　白ヶ野第3遺跡A地区」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第25集

20：宮崎県埋蔵文化財センター　2002
「白ヶ野第2・第3遺跡（第2分冊　縄文前期～中・近世編）　上の原第1遺跡（B地区）」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第62集

21：田野町教育委員会　1990「丸野第2遺跡」『田野町文化財調査報告書』第11集

22：田野町教育委員会　2005「本野原遺跡二」『田野町文化財調査報告書』第52集
23：田野町教育委員会　2004「高野原遺跡B・C区（4）」『田野町文化財調査報告書』第50集
24：宮崎県埋蔵文化財センター　2000「竹ノ内遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第27集
25：宮崎県教育委員会　1988『宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書』第4集
26：宮崎県埋蔵文化財センター　2000「右葛ヶ迫遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第21集
27：日南市教育委員会　1995「上講遺跡」『日南市埋蔵文化財調査報告書』第5集
28：南郷町教育委員会　1990「崩野遺跡」『南郷町文化財調査報告書』第2集
29：宮崎県総合博物館　1991「下弓田遺跡　資料編Ⅰ」『埋文調査研究報告』Ⅳ
30：末吉町教育委員会　1981「宮之迫遺跡」『末吉町文化財調査報告書』2
31：鹿児島県教育委員会　1984「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報　－昭和58年度―」
『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』29
32：志布志町教育委員会　1985「中原遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』（9）
33：志布志町教育委員会　1984「柳井谷遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』（6）
34：志布志町教育委員会　1985「倉園A遺跡　土光遺跡　風穴遺跡」『志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書』（10）
35：志布志町教育委員会　1975『宮ノ前遺跡』
36：宮崎県教育委員会　1992「海蔵寺遺跡　様屋敷遺跡」『国道221号線バイパス建設関係発掘調査報告書』
37：高城町教育委員会　1989「城ヶ尾遺跡」『高城町文化財調査報告書』第1集
38：宮崎県埋蔵文化財センター　1999「上牧第2遺跡　母智丘原第2遺跡」
『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第18集
39：都城市教育委員会　1991「大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書」『都城市文化財調査報告書』第14集
40：宮崎県埋蔵文化財センター　2003「大岩田上村遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第77集
41：田中稔隆・面高哲郎　1974「都城市成山遺跡の研究」『宮崎大学教育学部紀要』35号
42：山田町教育委員会　1983「中村遺跡」『山田町文化財調査報告書』第1集
43：末吉町教育委員会　1980『中岳洞穴』
44：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2004「桐木遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（75）
45：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「桐木耳取遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（91）
46：高原町教育委員会　1999「高原町埋蔵文化財発掘調査報告書　日守地下式横穴墓群　大谷遺跡表採縄文土器資料」
『高原町文化財調査報告書』第4号
47：宮崎県教育委員会　1992「田代ヶ八重遺跡」『綾北側総合開発建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書』
48：菅付和樹　岩永哲夫　1986「日向考古資料Ⅱ」『宮崎県総合博物館』No,11
49：小林市教育委員会　2004「黒仁田遺跡」『小林市文化財調査報告書』第18集
50：小林市教育委員会　2004「永野遺跡」『小林市文化財調査報告書』第17集
51・52：えびの市教育委員会　1997「田代地区遺跡群」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第20集
53：えびの市教育委員会　2000「佐牛野遺跡」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第27集
54・55・56：えびの市教育委員会　2002「長江浦地区遺跡群」『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第32集
57：菱刈町教育委員会　1990「松美堂遺跡」『菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書』5
58：菱刈町教育委員会　1991「寺山・年ノ宮遺跡」『菱刈町埋蔵文化財発掘調査報告書』6
59：大口市教育委員会　1996「並木口遺跡」『大口市埋蔵文化財発掘調査報告書』（18）
60：鹿児島県教育委員会　1993「星塚遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（7）
61：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003「中原遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（54）
62：鹿児島県立埋蔵文化財センター　1997「干迫遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』（22）
63：奈良大学文学部考古学研究室　1998「武貝塚」『奈良大学考古学研究室調査報告書』第16集

64：鹿児島市教育委員会　1986「大龍遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(7)
鹿児島市教育委員会　2001「大龍遺跡」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(32・33)
65：河口貞徳　1952「草野貝塚発掘報告」『鹿児島県考古学会紀要』第1号
鹿児島市教育委員会　1988「草野貝塚」『鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
66：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2005「上ノ平遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(70)
67：出水市教育委員会　2000「出水貝塚」『出水市埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
68：鹿児島県立埋蔵文化財センター　1999「垣内遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(24)
69：川内市土地開発公社　1987『麦之浦貝塚』
70：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2003「楠元・城下遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(57)
71：河口貞徳　1991「市来貝塚－昭和36年の発掘について－」『鹿児島考古』第25号
市来町教育委員会　1991「市来（川上）貝塚」『市来町埋蔵文化財調査報告書』1
市来町教育委員会　1993「市来（川上）貝塚２」『市来町埋蔵文化財調査報告書』2
72：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002「今里遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(33)
73：鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002「諏訪免遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(44)
74：金峰町教育委員会　2003「上焼田A遺跡　上焼田B遺跡」『金峰町埋蔵文化財発掘調査報告書』(15)
75：本田道輝　1983「田中堀遺跡出土の口縁部上面施文形の土器について」『鹿大史学』31
本田道輝　1997「第二項　田中堀遺跡調査の概要」『川辺町郷土史追録』
76：加世田市教育委員会　1987「上加世田遺跡－1（第Ⅰ地点・第Ⅱ地点）」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（３）
加世田市教育委員会　1987「上加世田遺跡－２」『加世田市埋蔵文化財発掘調査報告書』（４）
77：鹿児島県教育委員会　1983「成川遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(24)
78：鹿児島県教育委員会　1983「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」『鹿児島県埋蔵文化財調査報告書』(25)
79：鹿児島県教育委員会　1989「中ノ原遺跡（Ⅰ）」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(48)
80：鹿児島県教育委員会　1987「榎木原遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』(44)
81：根占町教育委員会　2002「前田遺跡」『根占町埋蔵文化財発掘調査報告書』(11)
82：垂水市教育委員会　2005「柊原貝塚」『垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書』(8)
83：南種子町教育委員会　2002「藤平小田遺跡」『南種子町埋蔵文化財発掘調査報告書』(9)
84：鹿児島県立埋蔵文化財センター　1994「浅川牧（Ⅰ・Ⅱ）遺跡」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書』(10)
85：上村俊雄・本田道輝　1978「西之表市納曽遺跡」『鹿児島考古』第12号
86：上屋久町教育委員会　1981「一湊松山遺跡」『上屋久町埋蔵文化財発掘調査報告書』

中九州	有明海	北薩 （八代・北薩・吹上）	内陸部 （えびの・大口）	南薩	鹿児島湾	都城盆地	宮崎平野	県北 （五ヶ瀬川・日向灘）	西南四国
鐘崎	鐘崎　御手洗C	鐘崎　市来	市来	市来	鐘崎　市来	市来	市来	鐘崎	平城Ⅱ
白浜タイプ	白浜タイプ	白浜			白浜			市来	
浜ン洲タイプ	浜ン洲タイプ	浜ン洲			浜ン洲			浜ン洲	
北久根一	北久根一	北久根一	北久根（内陸部）		北久根一			北久根一	片粕Ⅰ
辛川Ⅰ	辛川Ⅰ	納曽1	納曽1		納曽1	丸尾A	丸尾A	納曽１	片粕Ⅱ
辛川Ⅱ	辛川Ⅱ	辛川Ⅱ	辛川Ⅱ	辛川Ⅱ	辛川Ⅱ　納曽2	丸尾B	丸尾B	辛川Ⅱ　丸尾B	広瀬上層
西平	西平	西平前半	西平前半	西平前半	西平前半　納曽3	西平前半	西平前半　納曽3　納屋向	西平前半	伊吹町
太郎迫	太郎迫	西平後半	西平後半	西平後半	西平後半	西平後半　中岳Ⅰ	西平後半　中岳Ⅰ	西平後半	
三万田	三万田	三万田	三万田	三万田	三万田	三万田　中岳Ⅱ	三万田　平畑第1先行 高野原タイプ	三万田	
御領	御領	御領	御領	御領	御領	御領	御領　平畑第1段階	御領	
黒色磨研	黒色磨研	黒色磨研	黒色磨研	黒色磨研	黒色磨研	黒色磨研	黒色磨研　平畑第2段階	黒色磨研	黒色磨研

第14表　縄文後期土器編年表（中葉以降）

地理区分	遺跡番号	遺跡名	所在市町村名（旧名）	宮之迫式				阿高式					本野原式				成川式			市来式等						模倣土器								磨消縄文・黒色磨研												文献番号
				宮之迫1式	宮之迫2式	宮之迫3式	宮之迫4式	阿高1式	阿高2式	阿高3式	南福寺式	出水式	本野原1式	本野原2式	本野原3式	本野原4式	成川Ka式	成川Kb式	橋牟礼川T	上・内面施文	市来I式	市来II式	丸尾A式	丸尾B式	納屋向式	北久根山内陸	納曽1式	納曽2式	納曽3式	中岳I式	中岳II式	平畑第1先行	高野原タイプ	門川南町	中津式	福田K2宿毛	小池原上層式	鐘崎式	浜ン洲タイプ	北久根山一	宮下辛川I式	辛川II式	西平式前期	西平式後期	三万田式	御領式	
五ヶ瀬川上流	1	宮ノ前第2	高千穂町																																		○			○				●	●	◎	1
	2	大野原	高千穂町																																					○					○	○	2
	3	梅ノ木原	高千穂町																																							●	◎	◎		3
	4	陣内	高千穂町																																							◎	●	●	●	4
	5	陣内第2	高千穂町																																					○	○	◎	●	●	●	5
	6	大溜	日之影町																														○			○	◎		○							6
	7	田向	日之影町																																						○	◎				7
	8	平谷	日之影町																														○							◎	○	◎	○			8
日向灘	9	可愛	北川町																		○	○		◎									◎			◎	○									9
	10	門川南町	門川町																			◎											●		●	◎	◎										10
	11	樋田	東郷町																○					●	○										○	○	◎						○	○			11
	12	石河内本村	木城町			◎	●							○																			◎		◎												12
宮崎平野	13	宝財原	西都市																					○				◎		○										○				○		13
	14	尾立	綾町		◎	●																													○											14
	15	西下本庄	国富町																	○	○	○	◎	◎		○										○	○	○	○	○		○	○	○		15
	16	春日	新富町																																									●	●	16
	17	橋山第1A	高岡町	●	◎	○	◎																											○												17
	18	学頭	高岡町																			○	○		○					◎		○											○		◎	18
	19	上の原第2	宮崎市		○	◎	◎							◎	◎					○	◎	◎	◎	●	○				○			○		○			○	○		○			○			19
	20	白ヶ野2・3	宮崎市	●	◎																◎	○		◎																						20
	21	丸野第2	田野町			◎	◎						○	◎	◎	○				◎	●	●	●													◎	○	○	○	○	○						21
	22	本野原	田野町		◎	◎	●		○	○	○	○	◎	●	●	◎	◎	◎	○	◎	●	●	●	●	●			○	◎	○		○		○		◎	○	◎			○		○	◎			22
	23	高野原	田野町																				○	○	◎					○		○	●												◎		23
	24	竹ノ内	清武町		○	○	◎							○	○	○				◎	◎	◎	◎	●	●			○	●			◎	○				○	◎	○	○	○		◎	◎		●	24
	25	平畑	宮崎市											◎	○						○	○	○	●				○	◎		◎	●	◎							○						◎	25
	26	右葛ヶ迫	宮崎市	◎		○	◎						○	◎	◎	○				○		○												○													26
日南	27	上講	日南市																		◎	●	●	●													○										27
	28	崩野	南郷町	◎	◎	●	●						◎	◎						○	◎	◎																									28
志布志湾	29	下弓田	串間市	○																	●	●	◎	●												○											29
	30	宮之迫	末吉町	●	●	●	●																																								30
	31	丸尾	国分市																				◎	◎			○	○														○					31
	32	中原	志布志町		●	●	◎				○			●	◎		◎	●		○																◎											32
	33	柳井谷	志布志町								○			◎	○				○	○	○	●	◎	◎																○							33
	34	倉園A	志布志町	◎	◎	◎	◎																																								34
	35	宮ノ前	志布志町	◎				○																																							35
都城盆地	36	海蔵寺	高崎町			○															○	◎		●													○										36
	37	城ヶ尾	高城町																			○	◎	◎														○									37
	38	上牧第2	都城市	◎	○	◎																																									38
	39	大岩田村ノ前	都城市																			○		○	○					○	○																39
	40	大岩田上村	都城市																												○																40
	41	成山	都城市																				○	◎						○													○		○	41
	42	中村	山田町																				○	◎							◎											○	◎	○	◎	42
	43	中岳洞穴	末吉町																											◎	◎														○	○	43

第15表　土器出土状況表（系統別・1）

地理区分	遺跡番号	遺跡名	所在市町村名（旧名）	宮之迫式				阿高式					本野原式				成川式			市来式等						模倣土器								磨消縄文・黒色磨研												文献番号
				宮之迫1式	宮之迫2式	宮之迫3式	宮之迫4式	阿高1式	阿高2式	阿高3式	南福寺式	出水式	本野原1式	本野原2式	本野原3式	本野原4式	成川Ka式	成川Kb式	橋牟礼川T	上・内面施文	市来I式	市来II式	丸尾A式	丸尾B式	納屋向式	北久根山内陸	納曽1式	納曽2式	納曽3式	中岳I式	中岳II式	平畑第1先行	高野原タイプ	門川南町	中津式	福田K2宿毛	小池原上層式	鐘崎式	浜ン洲タイプ	北久根山一	宮下辛川I式	辛川II式	西平式前期	西平式後期	三万田式	御領式	
都城	44	桐木	末吉町				○			○	○								○		○	○							○																		44
	45	桐木耳取	末吉町			◎	○								○		○		○		○	◎																									45
えびの高原	46	大谷	高原町									○									◎	◎	◎			●												○	○	◎	○		○				46
	47	田代ヶ八重	須木村			○	◎				○			◎	◎						○	●		○		◎		◎									◎		◎	○		○			◎	47
	48	東牧場	小林市									○									◎	◎	○	○		○												◎		○							48
	49	黒仁田	小林市																				○	◎				○											○	○		○					49
	50	永野	小林市			◎	◎							○																																	50
	51	上田代	えびの市	●	●	◎	◎		◎	○	●	◎																															○	○			51
	52	松山	えびの市																				●			○	○	●														○	●	●	◎		52
	53	佐牛野	えびの市																			◎	○			●													○	◎	○						53
	54	内丸	えびの市				○																◎			○		○												○	○	◎	○	◎		54
	55	馬場田	えびの市			◎	◎		◎			◎											●				◎										○			○	○		●	○			55
	56	役所田	えびの市																			●	○			●						○						●	●	○						●	56
大口	57	松美堂	菱刈町																		◎	◎																○	○				○				57
	58	年ノ宮	菱刈町																			●	○	○		◎											○	●	●	◎			○				58
	59	並木口	大口市							○	○	○																◎														◎	●	●	◎		59
鹿児島湾	60	星塚	横川町																		◎	●																									60
	61	中原	姶良町														●		●			●	◎	●														●	●	○	◎	◎	◎	○			61
	62	干迫	加治木町																		●	●	●	●	◎		●	●	○								◎	●	●	●	◎	●	●	●	●		62
	63	武貝塚	桜島町			○	◎					○		◎			○		◎		○	●	○														○	○	◎				○				63
	64	大龍	鹿児島市		○				○				○		○		◎	●	●		◎	●				○										○		○	◎									64
	65	草野貝塚	鹿児島市																●	●	●	●		○												○		◎	○	◎	○							65
	66	上ノ平	伊集院町				○			●	●	●					○		○																	◎												66
八代海	67	出水貝塚	出水市						◎	◎	●	●									◎																										67
	68	垣内	川内市						◎	●	●																								○												68
	69	麦之浦貝塚	川内市									○									◎	●					●											●	◎								69
	70	楠元・城下	川内市																	○	●	●				◎												◎	◎	◎							70
北薩	71	市来貝塚	市来町								◎	●									◎	●					◎	○								◎	○	◎	◎				◎				71
	72	今里	東市来町									◎										○																					○				72
	73	諏訪免	伊集院町				○			◎		◎							○																												73
南薩	74	上焼田A	金峰町			◎	◎	◎	◎		○	○		○			○	◎	◎	◎	●	◎	○	○	○		○	○								◎				○							74
	75	田中堀	川辺町														◎		◎																												75
	76	上加世田	加世田市																																									●	●	76
	77	成川	山川町				○										●	●																												77
大隅	78	大泊貝塚	佐多町		○												○			○	○	◎	●	●				○																			78
	79	中ノ原	鹿屋市			○								○	◎							◎	◎	◎			◎	○			○											◎					79
	80	榎木原	鹿屋市		◎	●	●			◎							◎				●	●	●	◎														○		○							80
	81	前田	根占町			○	○										◎	◎	◎		○	◎	○					○								○					○						81
	82	柊原貝塚	垂水市																●		◎	●	●	◎				○	○											○	○	○	○	◎	○	○	82
種子屋久	83	藤平小田	南種子町												●		○			○		●	◎	◎			●	●	○			◎				○		○					◎				83
	84	浅川牧	西之表市											●							●	●	◎	●												◎											84
	85	納曽	西之表市																		○	◎		○			○	◎	○														◎				85
	86	一湊松山	上屋久町																		◎	○																									86

第16表　土器出土状況表（系統別・２）